

日曜学校教案誌

vol. **9**

2003.4,5,6月号



わたしは復活であり、命である。

日本キリスト改革派教会 中部中会教育委員会

も く じ

まえがき	相馬伸郎	4
巻頭説教	春名義行	5
日曜学校・教会学校訪問		
津島伝道所日曜学校の紹介		8
聖書研究・説教展開例・分級展開例		11
2003年4・5・6月分カリキュラム		12
4月6日		13
4月13日		20
4月20日		27
4月27日		34
5月4日		41
5月11日		48
5月18日		55
5月25日		62
6月1日		69
6月8日		76
6月15日		83
6月22日		90
6月29日		97
幼稚科・小学科下級教材		104
2003年7・8・9月分カリキュラム		106
あとがき		107

まえがき

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

「このような形」で、皆様に『日曜学校教案誌』をお届けすることとなりました。申し訳なく思います。先の大会において、教育委員会から建議された、大会で日曜学校教案誌を発行することの提案が継続審議となったためです。

正直に申しますと、私の心には、「これで『日曜学校教案誌』の働きは終わる」との思いがよぎりました。『子どもカテキズム』を土台にした二年間のカリキュラムは完結しましたし、大会的には切羽詰った必要性、危機意識がないとも思ったからでした。ところが、周りの仲間たちはいささかもひるみませんでした。どんな形でも継続しなければという熱い思いを示してくださいました。「そうであれば、のぞむところ！」、教案誌の灯火を消してはならないとの一念で、しかも、中部中会以外の奉仕者をも与えられて、2003年度の日曜学校教案誌発行に立ち上がりました。

皆様の教会学校・日曜学校に資するものとなりますようにと祈りつつお届けします。

私どもは憂えます。この国が、主イエス・キリストに背を向け続けていることを。子どもたちの心が、そのもっとも大切な時期に、非キリスト・反キリスト的な知識で占領されていることを。青少年が、道を失ってさまよっていることを。何よりも教会が、「これが道だ、ここを歩め」と大胆に示せないことを。

どうぞ、愛する兄弟姉妹の皆様、日曜学校の尊い奉仕を続けてください。望みをもって、使命感を新しくして、共に楽しく奉仕をささげましょう。牧師方は、どうぞ率先して、子どもの前に立ってください。危機を唱え、立ちすくむだけでは済まされません。

『日曜学校教案誌』は、名称は「日曜学校」ですが、もともと「教会学校」に資することを目指して発行いたしました。およそ、どのような教派・教団であっても、責任的な教派（教団）形成をしようと志す教会であれば、まず何はともあれ教派立、教団立の神学校を整備しようと励むのはほとんど常識です。そうであれば、同じように、信徒教育のために、教案誌のようなテキストを発行する努力を惜しまないのも当然であろうと思います。日本キリスト教会はもちろん、日本キリスト教団内の改革長老教会協議会や、福音主義教会連合でも（教団出版局発行の「教師の友」がありながら）、自らの信仰理解に基いてテキストを発行しているということは、それが教会形成の根幹に関わる事柄であるという認識が共有されているからでありましょう。

我々が、改革派信仰の立場に立つ教案誌を持たずに、契約の子らと地域の子らを（そればかりか教える日曜学校教師方への影響があります！）教育することへの問題性を認識し、克服すべきではないでしょうか。

大会的には、弊誌の存在を知らない日曜学校教師がおられるようです。まだ伝わっていないのです。教案誌発行は中会の業ですむはずはありません。私は、各個教会主義を克服するために中会主義の徹底を求める者です。しかし、我々が日本伝道を考え、日本キリスト改革派教会としての形成を目指す「教派（教会）」であれば、これが大会の課題であることは明らかではないかと思えます。

弊誌の小さな貧しい奉仕が、日曜（教会）学校再生の運動となりますようにと大きく祈りつつ。

「子どもたちに福音を」

- マルコによる福音書 10 章 13 ~ 16 節による説教 -

春名義行（津島伝道所宣教師）

主イエス・キリストは、弟子たちに、「わたし（キリスト）の名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」（マルコ 9:37）とおっしゃいました。キリストにあつて子どものような小さな者を受け入れることの祝福について教えられました。もちろん、この御言葉は単に子どもを受け入れなさいと教えているだけではありません。しかし、力のない小さな者をキリストの名のゆえに受け入れることの重要さは明らかです。ところが、主イエスによってそのように教えられていたにもかかわらず、弟子たちは、主から祝福していただくとして主のみもとに子どもたちを連れてきた人々を拒否し、それを阻み叱りつけました。彼らは、子どもに祝福をいただくとする親とその子どもを受け入れることなく、激しく拒絶したのです。

この弟子たちのとつた態度を私たちは冷ややかに見て軽蔑したりする事はできません。むしろ、彼らのこのような態度は、私たちも良く理解できるものです。子どもというものは、端から見ているぶんにはかわいい存在です。しかし、実際に関わると煩わしくうるさいとさえ思えるのも事実です。そのような子どもたちを連れてきた人々を見て、弟子たちは、「休む間もないほど忙しい自分たちの先生を少しでも煩わせたくない」と考えたのではないのでしょうか。彼らは自分たちの先生である主イエスを思うばかりに、大切なものを

見落とし、最も小さい者の一人である子どもたちを拒絶したのです。

このような子どもの拒絶は、教会にも存在しないのでしょうか？ 子どもたちは長時間黙っていることができず、じっとしていることもできない存在です。礼拝の最中であつても声を出し、時には大声をあげて泣き出すこともあります。そのような子どもたちが礼拝の中で煩わしい存在として扱われていないのでしょうか？ 自分たちのことだけを考えて受け入れるべき小さな者の存在を忘れてはいないのでしょうか？ また、その小さな者たちが過去のある時代を生きているのではなく、今のこの時代を生きていることを見落とし、過去の価値観だけで判断し、今を生きる子どもたちの存在を無視していないのでしょうか？ 実際私たちの教会を見回すとき、そのような事態が起こっているのは事実です。特に子どもたちを煩わしい存在として、御言葉を通して与えられる祝福をいただくとして子どもたちをつれてきている礼拝式の場において、子どもたちを拒絶し、閉め出してしまうということは往々にして起こっているのです。

弟子たちは子どもたちを拒絶したのですが、それに対して主イエス・キリストがその子どもたちを肯定し受け入れていることが、14 ~ 16 節に記されています。マルコ福音書は、主イエスを、子どもたちが近寄るのを妨げる者たちに対して憤られる存在として描き、主が子どもたちを祝福したことを明らかに告げています。この出来事は、主イエス・キリストの子どもたちに対する深い慈しみと

暖かい眼差しを感じるものです。主は最も弱い者の一人である子どもを肯定し受け入れられ、そのお姿を弟子たちにお示しになりました。本来ならば弟子たちもキリストの名のために子どもたちを受け入れるべきであつたのです。また、私たちもこのキリストが受け入れられた子どもたちを、キリストの名のために受け入れるべきであるのです。

しかし、ここで気を付けなければならないのは、主がこの子どもたちを受け入れられたのは、子どもたちへの愛情によるものだけではないということです。その愛情以上に、子どもたちを受け入れるべき理由があるのです。それは、「神の国はこのような者たちのものである」ということです。つまり言い換えれば、この子どもたちこそ、神の国に属する者であり神の国に受け入れられる者であるから、受け入れるのであるということです。

この主イエス・キリストの御言葉は、誰が神の国で一番になれるかと神の国で少しでも良い地位をもらおうと議論しあつた弟子たちを、鋭く突き刺すものです。彼らは子どもたちを拒絶するのではなく、その拒絶した子どもたちから、どの様にすればその祝福に与ることができるかを学ぶべきであると主に諭されているのです。

その学ぶべき事柄とは、この子どもたちが、両親に支えられなければ生きていくことができず、両親の支えを期待し、それをただ受け入れる者であるということ、また弟子たちの激しい拒絶から身を避けることも身を守ることもしないほど弱く小さな存在であるということです。神の国の祝福にあずかる者は、小さく弱い幼子とその親に完全に頼るよう、完全に神様に依存しキリストが与えてくださる神の国に入る特権を謙虚に受け入れる者でなければならないのです。

主はそのことを教えてくださった後、その子どもたちをみもとに呼び寄せ、抱き上げて

祝福をお与え下さいました。弟子たちに拒絶された最も弱い存在である子どもたちは、今やキリストに受け入れられる者となつたのです。それは、神の国の祝福が、人間の側の何らかの条件や功績を必要とせず、何の力もないような者に与えられること、その恵みと約束を明らかにしてくださっているのです。

このように明らかにキリストは子どもたちを受け入れ、神の国の民の一員として受け入れてくださっています。それゆえに、私たちの教会は、幼児洗礼を認めて、子どもたちに幼児洗礼を授け、契約共同体の一員として、つまりは神の国の一員として数え、キリストにあつて人間の業に先行する神様の恵みの約束を継承していきます。そうである以上、私たちは、キリストが御自身のもとにその子どもたちを呼び寄せ、その子どもたちを愛して受け入れられたように、子どもたちを肯定し、受け入れなければなりません。またそのことを通して、教会は、何の力もない者をありのままの姿で完全に受け入れ、祝福を与えてくださった主の恵みを知るべきです。さらにはその事実を知つたなら、キリストがくださったように、私たちが今を生きるありのままの子どもたちを受け入れることが求められるのです。ですから、私たちは決して子どもたちを主が招いてくださっている礼拝の場から閉め出すのではなく、どの様な形であれ、その場にありのまま受け入れることをしなければならぬのです。主が子どもを愛し受け入れてくださったように、私たちも子どもたちを教会の中に受け入れ、キリストの体なる教会の中に彼らを抱き、福音を語り育むことが求められるています。子どもをそのように受け入れることにより、キリストが弟子たちに子どもたちを用いて教訓的に教えられ、信仰的成長を与えられたように、キリストは私たちにもその子どもを通して、信仰的成長を与えてくださるのです。

しかし、主が受け入れてくださったように子どもたちをその教会の中に受け入れるべきであることを知るときに、あわせて私たちが気を付けなければならない事実があります。それは、子どもたちには罪がないなどと錯覚してはならないということです。そんなのは当たり前ではないかと思われるかもしれませんが。

このことと合わせて私たちが見落としがちなことは、子どもも死ぬという現実です。これも当たり前だと言われるかもしれませんが、子どもが死ぬと言いますと、明日死ぬかもしれないという現実目には目を向けるのではなく、いずれ遠い将来、当然死ぬ日が来るでしょうという程度にしか考えられないのです。しかし、子どもであっても明日死ぬかもしれないし、死を覚悟するような病を負いながら日々を生活している子どもも多くいるのです。その子どもたちがもし死んだなら、どうなるのでしょうか。子どもには罪はないから天国に行くなどという人はいないでしょう。子どもであっても罪を持っており、その罪の現実から逃れることはできません。ですから必ず裁きを受け、永遠の刑罰を受けるのです。主が愛され、召してくださるその子どもたちも裁きを受けその刑罰を受けるべき存在なのです。そのためにも、教会はその子どもたちを神の民の一員として受け入れ、そのふところに抱き育んでいかなければならないのです。その現実にとれだけの人が目を向け危機感を持っているのでしょうか。

子どもは主が招き愛されて、祝福を与えてくださるような存在だから、滅びから免れるなどということではありません。神の民として招かれても、なお子どもたちが自らの口で主を自らの救い主と告白できるまで、教会は彼らを受け入れ養っていかなければならない

のです。そして、そのための努力を決して惜しんではならないのです。それは人間の目先や小手先の技術的なことで子どもをいかに集めることができるかという方法論ではありません。主イエスがへりくだって私たちの一人となってくくださったように、子どもたちの高さにまでへりくだり、今を生きる彼らと共に歩むことができるかどうかがまず第一に求められ問われています。子どもたちを抱き上げられる主は、子どもたちをいとおしみ、その高さにまでへりくだられ、心から彼らを受け入れられました。同じように、私たちも受け入れられています。私たちは子どもたちを上辺だけで受け入れるのではなく、キリストがその子どもたちになされたように、そして、あなたにもしてくださったように、へりくだって心からその者たちを受け入れることが大事なのです。教会もそのようにして小さな者たちを受け入れることが求められています。そして、主が招いてくださる子どもに福音が語られ、その幼い口でもって主を告白できるように熱心に祈り導いていくことが私たちに求められています。このことは、子どもを受け入れてくださったキリストから託されている教会の一つの使命です。その使命はこの子どもを招いてくださる主のみもとへ彼らを導くために与えられた使命であり、子どもの真の命に関わる重大な使命でなのです。

主は、子どもたちを心から受け入れる群に、大いなる励ましと慰めを与え、さらなる発展を与えてくださいます。そのような群となることができるように、もう一度私たちは私たちの群の姿を見直したいと思うのです。小さい者を受け入れることができる群、子どもたちに本当に福音を語ることでできる群となっているかを見直し、キリストから受けている大きな使命を果たそうではありませんか。

津島伝道所日曜学校紹介

津島伝道所日曜学校教師会

津島伝道所のある津島の地は、「津島神社」という大きな神社があり、古くから神社と共に歩んできたような地域で、神社に近い地域では因習なども根深く残る所で、子どもたちにも福音を告げ知らせていくことは、地域の教会として重要な使命であると感じています。

現在、津島伝道所の日曜学校は、幼稚科、小学科下級、中級、上級および中・高料の五クラスで、生徒のいないクラスもあります。教師は10人で複数担任制を採っています。礼拝のお話は4～5人で輪番制です。生徒については10人不足の子どもの出席が続いているのが現状です。子どもたちが中学・高校へと進学するにつれて日曜学校への参加が減少しています。特に契約の子どもたちの出席が進学と共に減少し、人数的には寂しい集会が続いています。しかし、キリスト教系の中学校に進学したことから、日曜学校に来るようになり、高校に進学しても、友だちや同

年代の子が来ているわけではないのに、続けて来ている子が一人います。この子がさらに教会につながるができるように、みんなで祈っています。またそういう中で、ほぼ毎週出席している小学生の兄妹もおり、その子どもたちの信仰継承のために、教師たちが熱心にその務めを果たしています。この子どもたちが楽しく、日曜学校に来たいと自発的に思うことができるように、教師たちが、まずこの子どもたちを中心に覚えて様々な行事などを考えています。それは、何よりもまず、今来ている子どもを大事にし、その子どもたちから福音が地域の子どもたちへと広がることへの期待があるからです。そういう中で、子どもたちが喜んで集まってくるのできる日曜学校を模索しているところです。

この地に教会が建てられてもう何十年もたち、幾人もの日曜学校OBを送り出しているこの伝道所の日曜学校が今、このように模索



日曜学校ピクニックにて

せざるを得ないのは、日曜学校の教師たちが若返ったことにあります。日曜学校の奉仕者の多くは青年会員です。春名牧師に替わる以前からすでに奉仕を続けていた者もいますが、幾人かの教師たちの入れ替わりがありました。したがって、奉仕者としては初めて体験することが多く、何をして良いのか、分からないところもあります。しかし、どのような日曜学校にすれば子どもたちが喜んで集うことができ、楽しく喜びを持って主の御前に集えるかを求め探りつつ、熱心にその奉仕にあたっています。

日曜学校教師会では、日曜学校教案誌の学びと共に日曜学校がどのようなものであるのかを続けて学んでいます。教案誌の学びは毎回行われますが、日曜学校についての学びは毎回続けて行うことが難しいのが現状です。しかし、日曜学校に対する思いや姿勢を改めて見直し、様々な模索を続けている奉仕者、特に若い奉仕者たちが日曜学校にさらに真剣に取り組もうとしています。

この若い奉仕者たちが、牧師や年長者の指導によるのではなく、主の日の僅かな空いている時間を用いて、自発的に日曜学校のための祈禱会を始め、今はほぼ全員がその祈り会に参加しています。この祈禱会は、必ずしも毎週行うことができているわけではありませんし、忙しさの中で後回しにされてしまうとの問題もありますが、日曜学校の奉仕者が、日曜学校は主がなして下さる御業であることを信じていることの証となっています。その祈禱会では欠席している子や、その日に来た子のことを覚えて祈りを捧げています。そのような祈りこそ、この日曜学校の力となり、大きな祝福の源となることを信じています。また、これまで三回にわたる日曜学校教案誌の分級原稿執筆にも、この若い奉仕者たちが熱心に取り組み、責任を果たすことができたことは感謝です。

私たちの日曜学校では、カリキュラムとして、中部中会の日曜学校教案誌を用いています。お話担当の奉仕者は、その教案誌を中心に学び、説教展開例も参考にしていますが、それぞれの語り口でお話をされます。その準備には多大の労力を用い忠実な備えをなし、毎回教えられることの多いメッセージを、与えられた聖書箇所と子どもカテキズムを十分に用いて行ってくださいます。また礼拝式の讃美にも新しい歌を取り入れ、春名牧師のギター伴奏による讃美も行っています。さらに主の祈りの唱和も、小さい子どもがついて行けるように、ゆっくりと一言一言を噛みしめつつ唱えています。これは教師にも主の祈りの意味と大切さを再認識する機会となりました。

子どもの礼拝式のあと、通常は各分級に分かれて学びを深めているのですが、基本的に毎月第一主の日には誕生会を行い、その後合同分級を行っています。合同分級では様々な工作をしたり、遊びを取り入れて、正月には室内で手作りの双六をしたり、オリジナルのカレンダーをつくったり、夏には大きなシャボン玉を作るとばしたりと様々な工夫をしながら過ごしています。

また、年によってまちまちですが、春にはピクニックに行き、夏にはデイキャンプに出掛けています。今は参加者が少なくなってきたので、いろいろな難しさがありますが、子どもたちと共に楽しく時を過ごすことができます。

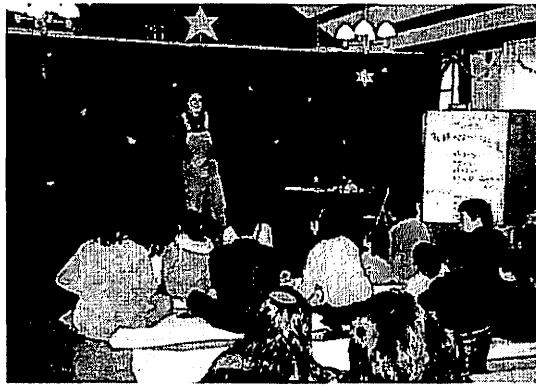
クリスマスの時期には、日曜学校のクリスマス礼拝とは別に、子どもクリスマス会を行っています。今年のこの会は、第2土曜日の午後の時間に開催しました。牧師交替の前後にはしばらく開催していなかったのですが、地域の子どもたちに福音を語りたいとの

若い教師たちの熱意と祈りにより、一昨年から再開することができました。一昨年は僅かな人数しか集めることができませんでした。昨年は子どもたちだけで20名近くの参加がありました。この時のために奉仕者は忙しい合間を縫って、人形劇の練習、ゲームなどの準備を行い、チラシを作って新聞への折り込みも致しました。それらのことが用いられ、昨年は一昨年の倍近くの参加者が与えられたのです。この子どもクリスマス会に来てくれた子どもたちは、まだ小さな子たちが多かったのですが、しかし、皆とても楽しみ喜んで帰って行きました。教会につながった方はまだいませんが、主がそのなされた業を用いてくださることを信じて、これからも続けて行きたいと願っています。

この子どもクリスマス会とは別に、ささやかな日曜学校だけのクリスマス会も行いました。この会は、毎年クリスマス記念礼拝が行われる日曜日に開催しています。限られた時

間の中ですから、特に大きなことはできませんが、普段日曜学校に参加している子どもたちのために、大人数ではできないような会を開いています。その中で、日曜学校から子どもたちへプレゼントが渡されます。それを渡すときに、昨年はクリスマスプレゼントの意味を語り聞かせ、その後、それぞれの分級担当の奉仕者から各子どもたちに手渡します。このプレゼントの意味を語ることで、ただ楽しいクリスマスではなく、救い主のご降誕の喜びと感謝を捧げることができるクリスマスにしたいと願っています。

今は、この津島伝道所の日曜学校の働きは小さな働きでしかありません。しかし、主がこの働きを大いに用いてくださり、大きな実を結ばせてくださることを信じて、これからもこの業にあたっていきたいと思っています。



子どもクリスマス会にて

聖書研究・説教展開例・分級展開例

日曜学校 2003年度カリキュラム (2003年4～6月分)

－救済史に基づく一年間のカリキュラム－

月 日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
4月6日	裁かれるキリスト	マタイ 27:15-26	イザヤ 53:5a
レント・進級	キリストの裁きを通して私たちの罪を知り、キリストを仰ぐことへと招く		
4月13日	十字架のキリスト	ルカ 23:44-56	ペトロ ー 2:24
受難週	十字架のキリストを仰いで、神の救いの恵みに感謝することへと招く		
4月20日	復活のキリスト	ヨハネ 20:24-29	ヨハネ 20:27
イースター	復活された勝利の主キリストを仰ぎ、喜びを共にすることへと招く		
4月27日	天地の良き創造	創世記 1章	創世記 1:1
	世界を神の作品としてみるまなざしの中で、平安と使命感を持つことに招く		
5月4日	人間の創造	創世記 2:6-25	創世記 2:7
	神に造られた存在として、神を知り、喜び、その栄光をあらわすことへと招く		
5月11日	罪と墮落	創世記 3章	ローマ 3:23-24
母の日	人間の罪を知り、自分の罪を知り、悔い改めと信仰へと招く		
5月18日	アブラハムの召命	創世記 12:1-9	創世記 12:2
	神の一方向的な選びと召命に、自分たちもあずかっていることを悟らせる		
5月25日	アブラハムへの約束	創世記 15:1-21	創世記 15:5
	アブラハムへの約束がキリストによって私たちにも及んでいることを知る		
6月1日	イサクをささげる	創世記 21:1-8, 22:1-19	創世記 22:14
	アブラハムの信仰を導かれた神の恵みを語り、感謝と信仰に招く		
6月8日	教会の誕生	使徒 2:1-13	使徒 1:8
ペンテコステ	聖霊により教会が始まった。教会を建てて民を養われる神への感謝に招く		
6月15日	エジプトに売られるヨセフ	創世記 37:12-36	コリント ー 10:13b
父の日	ヨセフ物語を通して、神の歴史支配を確信する信仰、摂理の信仰へと導く		
6月22日	主が共におられる	創世記 39～41章	創世記 39:2
	主が共にいてくださる祝福を示し、主の臨在を認め、求めることへと招く		
6月29日	悪を善に造りかえた神	創世記 45章、50章	創世記 50:20
	人間の悪を善に変えられる歴史の主の勝利を示し、摂理の主への信頼に導く		

27:11-26 は、総督ポンテオ・ピラトの裁判を受けられる主イエスの姿を描きます。ピラトと、彼を取り巻く人々の罪の姿を通して、十字架の主イエスによる救いの計画のくすしさが浮かび上がってきます。

〈不当な判決〉

ポンテオ・ピラトは使徒信条の中に登場する唯一の固有名詞です。主イエスを裁き、十字架に引き渡した人として、彼はその名を教会の歴史にくっきりととどめることとなりました。

ただ、ピラトは主イエスに積極的に死刑判決を下したわけではなかったようです。彼は主イエスに罪を認めることができませんでした(23)。また彼が裁判の席についているときに、彼の妻が彼に伝言をし、主イエスとの関係を持たないようにと願います。これは彼女もまた主イエスの正しさを訴えているわけで、ピラトを相当動揺させるものとなったに違いありません。ともかくこの箇所から、彼が主イエスを何とかして釈放しようと努めていることが読み取れます。

にもかかわらずピラトは、結局は裁判を放棄するかたちで(24)、主イエスを十字架に引き渡すのです。そこには彼の政治的な判断と、自己保身の思いとが働いたようです。

祭司長たちが群衆をあおりたてた(20)のは、ピラトが真理よりも世論を恐れる政治家であったことをよく見抜いていたためでしょうし、またピラトは主イエスへの裁判のしかたによってローマ皇帝から不評を買うことになりかねないことをも恐れていたに違いあり

ません。

このように、この世的な打算に屈して罪なき神の子に死刑を宣告したピラトもまた、主イエスを十字架に追いやった罪人のひとりであり、このピラトの姿の中に、私たちは自分自身の姿をも見出すのです。「ナザレのイエスを／十字架にかけよと／要求した人／許可した人／執行した人／それらの人の中に／私がいる」(水野源三)。

〈貫かれる救いの計画〉

ピラトの罪は明白で、覆い隠すことはできません。にもかかわらず、彼は神の救いのご計画を決定的に押し進めたとも言えるのです。なぜなら、正しきお方である主イエスが、不義なる人間のかわりに十字架に死なれることこそ、私たち罪人を救うためにみ父が計画なさったことであるからです。この点で、「評判の囚人」(16) パラバ・イエス(ローマ政府は、被占領国であるユダヤの民の心をなだめるために、祭り等特別の場合に囚人をひとり特赦する慣例をもうけていました)が主イエスのかわりに釈放されたことには深い意味があるものと考えます。

このように、不当な裁判によって人間の罪の力が勝利したと思われたそのところでもイエスはまさに主であられ、このお方が罪人たちの手の中に引き渡されているかに見えるその時に、神の恵みのみ心が成就しつつあったのです。主イエスが十字架に引き渡されて死なれたからこそ、私たちは救われました。人の思いをはるかにこえて、神の恵みは大きいのです。

テキスト マタイによる福音書 27章 15 - 26節

〔単元のねらい〕

主イエスの受難の姿をどれほどリアルに語ろうとも、単に「イエスさまはかわいそう」という同情心を起こさせるだけならば、福音は伝わっていない。「私の罪のために苦しみ、さばかれたのだ」との信仰の心が与えられることを目指して、祈り備えたい。

「私たちの身代わりに十字架で死なれたイエスさま」

今、教会は、レントと言われる期間を過ごしています。主イエスが苦しみを耐え忍んでくださったことを覚えるときです。

イエスさまは、多くの人々のお友だちになってくださったお方です。イエスさまは、いやしのみわざや不思議なことを行われて、大勢の人々から「イエスさまはすばらしい」、「イエスさまは救い主になられるお方だ」と慕われました。

それを見ていた祭司、律法学者、パリサイ人たちは、おもしろくありません。その人たちは、それまで、皆からこう言われていました。「あの人は聖書の事をよく知っている頭の良い先生だ」、「あの人たちは、神さまの教えをきちんと守ることの出来る立派な人たちだ。」皆からほめられていた人たちです。だんだん、心のなかに、イエスさまをねたむ思いが湧いてきます。それがどんどんどんどん大きくなって、とうとうイエスさまを憎むようになったのです。その人たちは、遂に、決めてしまいました。「そうだ、あのイエスを殺してしまおう、それが神さまにとって良いことなのだ。イエスさえいなければ、自分たちも昔のように皆から尊敬されるし、楽しく暮らしていける。そうだ、あの男を裁判にかけて殺してしまおう。」

あるお祭りの夜の出来事です。彼らは、イエスさまをローマの兵隊に頼んで捕まえてもらったのです。そして、イエスさまはローマの国から来ている裁判長ピラトによって、裁判にかけられます。祭司長や律法学者たちは、何とかイエスさまを殺そうとします。けれども、ピラトはイエスさまが本当に悪い人間だとは考えていませんでした。ピラトは言いました。「今日は、あなたがたのお祭りだ。このお祭りには特別に一人だけ、牢屋から出してあげることになっている。ユダヤのみなさん、ここにバラバ・イエスという男がいる。この男は、強盗だ。しかしここにもう一人男がいる。この男は救い主と呼ばれているイエスだ。さあ、どちらを牢から出してほしいのか、言ってみるが良い。」

そうすると、祭司長や律法学者は何とかしてイエスを殺そうとして、人々に、「バラバ・イエスの方をゆるしてください」と言わせるように企みました。まんまと群衆は、叫び始めました。「バラバのイエスを赦して、ナザレのイエスを十字架に付けろ。」何度も何度も人々は大声で叫びます。「イエスを十字架につけろ！」。とうとうピラトは仕方がなく、人々の言うとおりにしたのです。

それを、聞いていたバラバはびっくりした

でしょう。バラバさんは心のなかで思いました。「なぜ人殺しをして牢屋にいれられた俺様が、助かるのか。どうして、この罪のないイエスと言う人が殺されなければならないのか。そんなばかなことがあるものか。」その時、イエスさまと目が合いました。バラバさんは、イエスさまの目がバラバさんに、このようなことを訴えておられるように思いました。「あなたの名前はバラバ・イエスだね。わたしの名前はあなたと同じイエスだよ。私とあなたの名前の『イエス』とは、罪を赦し、罪から救うという意味があることを知っているね。私は神さまから遣わされた神の独り子です。救い主です。わたしは、バラバ・イエスさん、あなたの身代わりになって十字架にかかります。そのために、わたしはこの地上に来ました。あなたもわたしを信じなさい。」

皆さんは、「親分はイエスさま」という映画を知っていますか。やくざ、つまり、人をだましてお金をもうけたり悪いことをして、人を傷つけたりしていた人が、イエスさまを信じて、イエスさまのために良いお仕事をするようになったという、本当のお話です。そのやくざをしていた人たちが「ミッション・バラバ」というチームを作ってイエスさまのことを、いろいろなところでお話してまわっています。何故、バラバという名前を付けたか分かりますか。そうです。自分が昔バラバであったことを知っているからです。そして2000年前のバラバだけのためではなく、自分にもイエスさまがどんなに素晴らしいことをしてくださったかを信じたからです。この人たちは、「これからは、イエスさまのために生きてゆこう、イエスさまに喜ばれるよう

に生きよう」と決心したのです。

イエスさまがバラバさんにしてくださったことは、たとえて言えばこういうことです。イエスさまは、バラバが入っていた牢屋に入って来てくださいました。そしてバラバに「さあ、あなたの囚人服を脱ぎなさい。そして、私が着ている神さまのきれいな綺麗な服を着なさい。これを来ていれば、神さまの子どもとして、神さまに近づくことができる素晴らしい服です。そして外に出てゆきなさい。」バラバは今、そのイエスさまの服を着て、牢屋から出してもらったのです。バラバはどれほど、嬉しい気持ちになったでしょうか。そして、どれほど、「ごめんなさい！」と罪を悔いたことでしょうか。

さて、自分より、お友だちのほうりがほめられていると、一緒になって喜ぶより、「あー、つまらないや。僕の方が上手なのに。」そうやって思ったことはありませんか。その人は律法学者と同じです。もしも、人の物を盗んでしまったことがあれば、もしもケンカをして誰かを叩いてしまったことがあれば、その人はバラバさんと同じです。このバラバさんとはいったい誰のことですか。それは、先生のことです。そして、皆さんのことではありませんか。イエスさまはその私たちの罪を赦すために、十字架にかかって神さまのさばきを受けてくださいました。私たちの身代わりになって死んでくださったのです。

心から、イエスさまに感謝しましょう。イエスさまを信じて、イエスさまの綺麗な服を着せてもらって、神さまの子どもとしていただきましょう。僕たち私たちも、イエスさまのために何ができるかを考えましょう。

〔今日の暗唱聖句〕 イザヤ書 53章 5節前半

彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり
彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。

〈ねらい〉

桜の開花と共に、新しいクラスがスタートしました。お友だちと親しみ、私たちの友となってくださったイエスさまに感謝します。

〈お話〉

新しく幼稚科のお友だちと、賛美したりみことばを覚えたり、いっしょに遊ぶことができ、とてもうれしいです。今日から一年間、幼稚科のお友だちと仲良く分級をいたしましょう。

さて、イエスさまは、人々にどんなことをしていただきましたか？

イエスさまは、人々に神さまのお話をたくさんしました。

イエスさまは、人から嫌われて独りぼっちになっている人の友だちになりました。

イエスさまは、病気で苦しんでいる人を助けて友だちになりました。

イエスさまは、十字架にかかるような悪いことは何ひとつしていません。ピラトさんも、そう思っていました。

でも、イエスさまは、悪いことばかりをして捕まったバラバさんのかわりに、十字架におかかりになりました。イエスさまは、バラバさんを、愛しておられたからです。イエスさまは、バラバさんのお友だちになって、バラバさんのために命をお捨てになられたのです。それは、バラバさんだけではありません。イエスさまは、〇〇ちゃんの救い主・本当のお友だちとなってくださったんですよ。

〈暗唱聖句〉

「父よ、彼らをお救してください」

ルカ 23:34

〈賛美〉

「こどもをまねく」

『こどもさんびか』48番

(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 26 を参照

〈分級の流れ〉

- ①輪になって、自分の名前を言いましょう。
- ②名前のパッチ(右参照)をつけてもらいます。
- ③名前を呼び合いましょう。ゲームのように。

最初のお友だちが、「〇〇〇(自分を指さしながら自分の名前を言う)、△△ちゃん(お友だちを指さしてお友だちの名前を言う)」

指を指されたお友だちがこんどは、「△△△、××ちゃん」と続けます。

教師も入って、楽しい雰囲気の中で繰り返し続けてみましょう。

- ④上記のお話をした後、暗唱聖句を覚えます。
- ⑤まるくなり、手をつないで賛美(#48)をささげた後、お祈りをささげます。来週に期待を持たせて、わかれます。

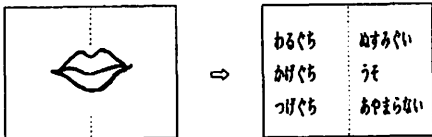


〈目標〉

私たちの罪を知り、その罪がイエス様の十字架によって赦されていることを感謝する。私たちの中にあるいろいろな罪に気づかせる。その罪をイエスが担ってくださった。

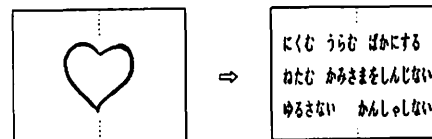
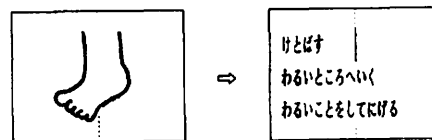
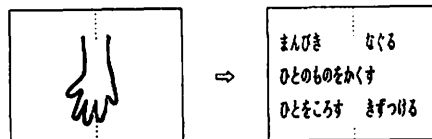
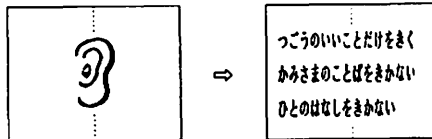
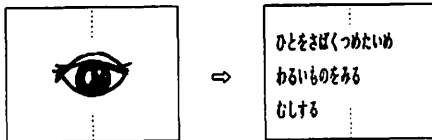
〈展開例〉

1. 「私たちの罪」の本を作る。私たちの中にある罪を覚える。厚紙を貼り合わせて本を作り、そこに絵と文を書く。表紙には「わたしたちのつみ」と書く。それぞれの部分で犯す罪を具体的に書く。



(p. 1~2)

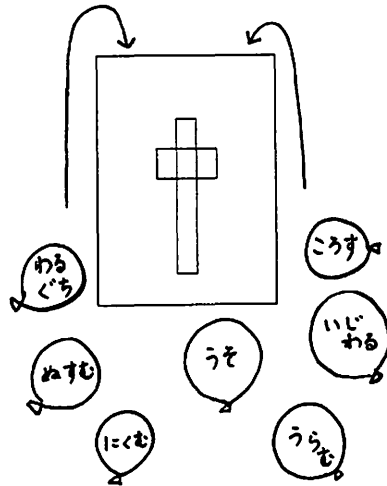
⇒ (p. 3~4) (以下同様)



子どもたちにどんな罪があるかを考えさせる

2. 風船入れゲーム

- ・風船をふくらませて、そこにマジックでいろいろな罪を書く。
- ・大きな箱を用意する。箱の前面に十字架を書いて貼っておく。
- ・足でジャンケンをして勝ったら1個、風船をカゴの中に入れる。(少し離れた所から入れる方がおもしろい。風船がなくなるまで続ける)。
- ・足ジャンケン
 - (グー) 足をそろえる
 - (チョキ) 右足と左足を前後にずらす
 - (パー) 足を左右に広げる



私たちの罪のすべてをイエス様が十字架で担ってくださったこと、私たちの一つ一つの罪はすでに十字架のもとにおいて赦されていることを感謝する。

〈折り〉

天のお父さま、どうぞ私たちの中にある罪に気づかせてください。イエス様が身代わりとなって、私たちの罪を引き受けてくださったことを感謝いたします。

〈ねらい〉

イエス様を十字架につけた責任は、自分が神様のようになりたいと願う、私たち自身の罪にあることを学ぶ。

〈展開例〉

生徒との話し合いをするための問いかけを用意しました。分級の状況によって選択して用いてください。矢印の箇所は、指導の際の参考とお考えください。

1. ポンテオ・ピラトにはイエス様を十字架につけた責任がないのでしょうか？

→責任があります。ピラトはイエス様に何の罪もないことを知りながら、死刑判決を下したからです。ピラトが「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、キリスト・イエスか」と民衆に尋ねたのは、イエス様を釈放したかったからにちがいません。強盗バラバの名前を出せば、まさか「バラバを釈放せよ」とは言われなかつたのでしよう。

ところが結局はイエス様を十字架につけてしまいました。自分の身を守るためです。もし暴動が起これば、ローマ皇帝に総督を辞めさせられるかもしれないと恐れたのでしよう。神様が明らかにされた真実よりも、自分の都合を大切にしましたのです。この不正な判決にも、自分が神様のようになりたいと願う人間の罪があらわれています。

2. 祭司長や長老の責任はどうですか？

→大きな責任があります。祭司長たちや長老たちには、民衆が神様に正しく従うよう指導する使命がありました。ところが実際は、神様がお遣わしになったイエス様を死刑にしてみらうようにと民衆をそそのかしたのです。神様より自分たちが偉く思われたいと願う、ねたみの罪のためでした。

3. 民衆の責任はどうなりますか？

→民衆にも責任があります。25節で「責任は、我々と子孫にある」と認めている通りです。なぜ民衆が祭司長たちや長老たちの言いなりになってイエス様を「十字架につけろ」と叫んだのか、詳しくは書かれていません。おそらく、指導者に逆らっては生きていけないと恐れたのでしよう。ここでも、神様より自分を大切に人間の罪があらわれています。

4. 約2000年後の今日、生きている私たちの責任はどうでしょうか？

→私たちもイエス様の時代の人々を非難する資格はありません。彼らと同じように「自分が自分の神のようになりたい、自分の中からイエス様を追い出したい」と願う罪を持っているからです。この罪のため、イエス様は十字架につけられたのです。けれども、私たちがこの罪を心から悔い改めるなら、イエス様が私たちの代わりに刑罰を引き受けてくださり、私たちをほろびから救い出してくださるのです。強盗バラバの代わりにイエス様が十字架についてくださったのと同じように。

ねらい

教会暦としてレント・受難週・イースターのシーズンにあることを知らせる。

4月最初のクラスで進級者や新しい中学生がいることを想定して、自己紹介や挨拶の時間を多くとる。

展開例

イザヤ書 53 章の暗唱聖句の説明をしながら、神に立てられたあがない主がこの世界には与えられていることを実感させる。

話し合ってみよう!

新しい友の自己紹介や交わりの時を持つ。

祈り

新しい教会学校の歩みを導いてください。

○暗唱聖句○

イザヤ 53:5a

○祈りの課題○

聖書日課

日	イザヤ書 53 章 1 ~ 6 節
月	イザヤ書 53 章 7 ~ 12 節
火	マタイ福音書 26 章 1 ~ 13 節
水	マタイ福音書 26 章 14 ~ 25 節
木	マタイ福音書 26 章 26 ~ 30 節
金	マタイ福音書 26 章 31 ~ 35 節
土	マタイ福音書 26 章 36 ~ 46 節

☆三日記☆

テキスト ルカによる福音書 23章 44 ~ 56節

(1) 異常なしるし

「全地は暗くなり」「太陽は光を失っていた」。これは単なる自然現象ではありません。この出来事は、終末的なしるしとして理解されます。この暗闇は、起ころうとしている出来事が、自然をも含む被造物全体の出来事であることを示しているのです。また、裂けた神殿の幕は、ヘブライ書に基づいて、主イエスの贖いの御業によって神様へと至る道が開かれた、ということの意味しています。

この二つのしるしを重ねてみると、主イエスの死が全地、被造物全体に影響を及ぼすと同時に、特に救いの核心、救いの根幹に関わることであることが分かります。

(2) 主イエスの死

ルカ福音書には、見捨てられることへの叫び（マルコ 15:34）は書き記されません。示されることは、主イエスの独特の態度です。特に、その最後の言葉によって表されています。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」。この言葉は、詩編 31 編 6 節の引用とされています。この句は、当時敬虔なユダヤ人たちが就寝の祈りとして用いていたともいわれています。ユダヤ人にとって、眠りは死の前段階であり、朝毎の目覚めは新たに命を得ることと考えられていたからです。そのような祈りの言葉を主イエスは口になさいました。

それは、死を前にした主イエスが父なる神様に御自身の霊をゆだねたということです。これは、御父の完全な保護を信じる、御子として相応しい確信の表現です。つまり、この主イエスの叫びは、神様への信頼の祈りと、自らの魂を神様にゆだねるものなのです。主イエスには、死に対する怒りやのたうち回る

様子もなく、御父への疑いもなく、また、この死を諦めて忍耐するということでもありませんでした。むしろルカは、平穩と受容と信頼を描きます。主イエスは、神様を信頼して素直に従って、御自身の贖い主としての任務の終了として、この死を肯定するのです。そして、死は、主イエスにとって終わりではありません。神様のみもとの命が待っているであり、死においてこそ、主イエスの全能が発揮されるという確信があるのです。

(3) そこに居合わせた人々の反応

ルカは主イエスの死に続いて、そこに居合わせた人々の反応を記しています。

ローマの百人隊長は、この死の出来事に感銘を受け、ローマ人として再び主イエスの無罪を証しし、神様を賛美しています。主イエスを通して人々を神様を賛美することへと至る、ルカの特徴が表れています。

次に人々ですが、彼らは見せ物を見るように集まってきたのですが、ここで起こった出来事の意味を知ったのでしょうか。彼らは深く悲しみ「胸を打ちながら」、つまり、罪の悔い改めを示して家路につくのです。主イエスの死が、彼らに悔い改めをもたらしたのです。

第三に「イエスを知っていた・・・婦人たちが」が記されています。ここに、弟子という言葉は出てきません。「主イエスを知っていた」と弟子たちがいた可能性が残されていますが、しかし、遠くに立つことによって、すべての者が主イエスから離れたことが示されています。また、知り合いの人や婦人たちが、主イエスの死に立ち会い主の死の証人となったことということは、彼らが復活の証人となるために必要なことでありました。

テキスト ルカによる福音書 23章 44 ~ 56節

〔単元のねらい〕

受難週を迎え、教会によっては特別の祈りの集會が持たれるかもしれない。子どもたちにも、受難週を特別の週として意識させることは、信仰教育上、意義が深い。この一週間は、子どもたちを祈りに導くべく工夫したい。特に契約の子らは、春休みに教会に集まって、子どもの祈禱会を行うのことも一つの方法である。難しければ、朝夕の祈禱会に親子で出席する事も考えられよう。その際にも、契約の子への指導が中心となるような祈禱会とする事が大切であろう。奉仕者一同、本日こそ、目の前にイエス・キリストの十字架につけられた姿をはっきり示す（ガラテヤ 3:1）ことができるように、特別の祈禱の備えを持って臨みたい。聖霊によらなければ、誰も主イエスを告白できない。そうであれば、毎主日のことであるが、説教（者）の為の祈りを欠いて、良き子ども礼拝式がささげられることは期待できない。

「十字架と葬り」

今日から始まる一週間を、教会では受難週と言います。イエスさまが苦しみを受けられ、十字架につけられ、復活されるまでの一週間を特別の思いで、祈りのうちに覚えて過ごします。皆も、お祈りしていると思いますが、それぞれ励ましあって、毎日のお祈りを忘れないようにしましょう。

さて、先週のお話の続きです。ピラトは、「十字架につけろ、殺してしまえ」と叫び続けた、群衆の声に負けて、イエスさまを彼らの好きなようにさせました。こうして、イエスさまは、十字架に磔けられるために、「されこうべ」、骸骨と呼ばれる場所に連れて行かれます。人々は重い木の十字架を、一晩中寝ていないイエスさまに担がせました。

イエスさまは、午前中に、骸骨、ゴルゴダという名前の丘に連れて行かれました。手には釘を打ち込まれ、足にも釘を打ち込まれました。イエスさまの釘つけられた十字架は、二人の強盗の真ん中に立てられました。この

ように、イエスさまは罪人の一人として、十字架につけられたのです。お昼の 12 時になりました。するとどうでしょう。最も、太陽が高く昇る時間なのに、真っ黒な雲がもくもくと現れました。そして、太陽の光をさえぎってしまったのです。あたりはすっかり暗くなってしまいました。まるで、太陽も月も、自然界が、神さまの御子のこのような姿を見たくない、悲しいと言っているようです。そのような状態が、3 時まで続きました。そして、イエスさまは幾つかのことを語られました。福音書には、七つの言葉が記されています。ルカによる福音書の中には、その中の一つの言葉が記されています。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られました。

最後の最後まで、イエスさまは父なる神さまを愛し続け、信じ続けておられたのです。あのオリーブ山のゲツセマネで、イエスさまの父なる神さまに、「御心がなりますように

と」と汗を血の滴りのように流されて、祈られたイエスさまです。ですから、十字架の上で血を流しながら、体の痛みや、心の痛み、そして何よりも、今こそ、受けなければならぬ神の刑罰、神の怒りを受けようとされたとき、「痛みをやわらげてください」とか、「神さまの怒りを手加減してください」とか祈られなかったのです。「すべてをゆだねます。すべて、父なる神さまがなさる事を受け入れます。」このように祈られたのです。

そのようなイエスさまのお姿を最も身近で見ていたのは、ローマの百人隊長でした。イエスさまを十字架につけるのに手を動かした人でした。その人は、このイエスさまの十字架のお姿を見て言いました。「本当に、この人は正しい人であった。」十字架の上のお姿、それは普通であれば、人間が最も汚くなってしまう処刑の方法だと思えます。とてつもない、苦しみ、痛みがあるのです。しかも、すぐには死ねません。じわじわ死んでいくのです。百人隊長は、それまで何人もの犯罪者が、呪いの言葉、汚い言葉を言って、苦しんで死んでいったのを見てきたと思います。だからこそ、こう言ったのでしょうか。「本当に、この人は正しい人であった。」でも、もう遅いのです。イエスさまは死なれました。父なる神さまが、僕たち私たちの罪をイエスさまの上に乗せて、罰せられたのです。手加減はありません。神さまの怒りが僕たち私たちに向けられたのではなく、罪のまったくない独り子イエスさまに下ったのです。人間が今まで経験した事のない、本物の死をイエスさまは十字架の上で経験されたのです。イエスさまは、まったく従順に父なる神さまの審きを受

け入れられました。

午後3時になりました。その日は金曜日。もう、日が沈んでしまったら安息日となり、掟によって、イエスさまの死体を取りおろす事ができなくなります。弟子たちは逃げてしまっています。そこで、率先してヨセフと言う議員が、イエスさまを取りおろし、岩に掘った墓の中に納めました。このようにして、イエスさまは葬られたのです。完全に死なれたのです。これはすべて歴史の事実です。本当に今からおよそ2000年前にイエスさまは十字架で死なれました。

聖書は、イエスさまは、このように僕たち私たちに教えています。「これはあなたのためです。あなたを神さまの子とするためには、あなたの罪を償うためには、これ以外に方法がありません。」父なる神さまは、独り子イエスさまをご自分の御手で罰せられました。人間が殺したように見えます。確かその通りです。でも、本当にイエスさまが死なれたのは、父なる神さまの審きを受けられたからです。父なる神さまはどんなに心に、痛み、悲しみをもたれた事でしょうか。イエスさまは、父なる神さまから一度も離れてしまったことはありません。いつも愛され続けてきました。でも、今、イエスさまはお墓の中におります。すべては、僕たち私たちが、神さまの愛と祝福、赦しと命を受けるためなのです。

今週一週間、十字架のイエスさまを思って勉強したり、遊んだりしましょう。イエスさまの愛が皆の心のなかに注がれて、イエスさまへの愛がもっともっと溢れ出しますように。

【今日の暗唱聖句】 ペトロの手紙 一 2章24節前半

そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。

〈ねらい〉

幼くとも自分の罪をみとめ、その罪の為にイエスさまが十字架で死んでくださったことを受け止め、救いの恵みにあずかります。そして、神のこどもとされたことを喜び感謝します。

〈お話〉

らみちゃんは、お外で遊ぶのが大好きな、4才のお友だちです。ある日、幼稚園のお砂場でお友だちといっしょに砂プリンを作って遊んでいました。らみちゃんのお気に入りの赤のスコップを今日は、ウサちゃんが使っています。「貸して！」と頼んだのに、「今使っているからダメ！」と貸してくれません。らみちゃんは、力任せに無理やり取ってしまいました（黒い心）。ウサちゃんは、砂場で引っくり返ってしまい、大声で泣きました。

らみちゃんは、今朝、日曜学校に来て、幼稚科の先生に「みなさんの心の中にも、いじわるな暗い心はありませんか？」と聞かれて

ドキッとしました。お砂場の事を思い出したからです。らみちゃんは、日曜学校の先生といっしょに、「わがままな心をゆるしてください、イエスさまがわたしの代わりに十字架にかかってくださってありがとうございます」とお祈りしました（白い心）。らみちゃんは、神さまの子どもになれたことが嬉しくて、明るいい心になりました（金色の心）。

〈暗唱聖句〉

「イエス（さま）は、わたしたちのために命を捨ててくださいました。」

ヨハネー 3:16 a

〈賛美〉

「わたしたちのつみのために」

『こどもさんびか』38番

（日本基督教団出版局）

〈こどもカテキズム〉

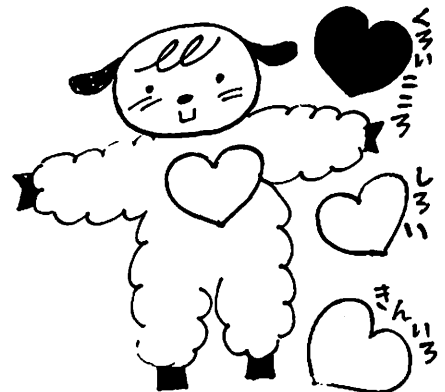
問 17、18、19、20、21 を参照

〈準備〉

- ・厚手の紙で、“らみちゃん人形”を作り準備します。
- ・心のハートの部分に、黒・白・金色のハート型の色用紙を用意します。
- ・セロテープを輪にして両面テープにして、貼ることができるようにしておきます。

〈分級の流れ〉

- ① “らみちゃん人形”を、子どもたちに見せながら、上記のお話をします。お話の中で“心の色”を貼りかえていきます。
一通り話をした後、質問しながら、子どもに貼りかえさせてもよいでしょう。
- ② 暗唱聖句を覚えます。
- ③ まるくなり、手をつないで賛美（#38）をささげた後、お祈りをささげます。
来週に期待を持たせて、わかれます。



〈礼拝説教のおさらい〉 ルカ 23:44-56

序 神殿の垂れ幕が真ん中から裂け、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」との祈りの内に息を引き取られました。

本 事態を見守った百人隊長は「本当に、この人は正しい人だった」と、神を賛美しました。

結 ヨセフという議員が、遺体を降ろして墓に葬りました。真の人であり真の神であられるイエスさまは、人間としての死をお受けになり、葬られ、よみにまで下られたのです。

〈やってみよう〉

- 受難週祈りのノートを作る -
- ノートは 104 ページに掲載しています。
- ① ノートを拡大コピーする。
 - ② _____ を切り、
 を山折り、
 _____ を谷折りにして、
 ミニブックのようにする。
 - ③ 日付を入れて、聖書を開き、書かれてい御言葉が何章何節かを書き込む。今週一週間毎日聖書箇所を読み、お祈りできるよう励ましましょう。また、色塗りなどをして楽しんでください。

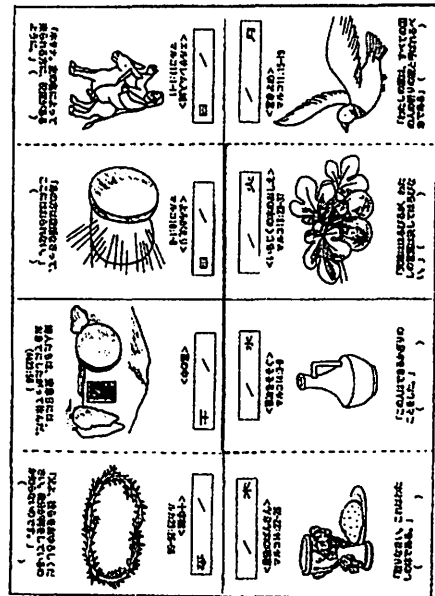
伝言板

神殿の垂れ幕が真ん中から裂けたように、イエスさまによって、神さまと、私たちの隔たりが取り去られました。「天の父なる神さま・・・」と祈れることは、なんとうれしことでしょう！！

神さまは現在の世界の状況をご覧になり、心を痛めておられることでしょう。しかし、このような罪に満ちた暗黒の世界にも、夜空に星がきらめくごとくに、神さまは神の子どもたちを、“星”として見て下さいます。真の光なるイエスさまの光を受けて輝いている神の子たちを・・・。

「よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかりと保つでしょう」(フィリピ 2:15)

夜空を見上げるたびに、「ガンバレ、星のこどもたち・・・」と、世界中の神さまのこどもたちのことを、祈ります。



〈ねらい〉

イエス様は、「救い主の苦しみ」を最後まで苦しみぬかれ、十字架の上で息を引き取られた。この十字架によって私たちの罪が贖われたことを学ぶ。イエス様を十字架につけてまで、私たち罪人を生かそうとくださる神様の愛に気づき、感謝する者とされたい。

〈展開例〉

1. 救い主が受ける苦しみについてどのような預言が実現したのでしょうか。

→ 渴くわたしに酢をのませようとしています
(詩編 69:22)

・わたしの着物を分け、衣を取ろうとしてくじを引く (詩編 22:19)

・わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか (詩編 22:1)

・わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い、唇を突き出し、頭を振る。「主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら助けてくださるだろう。」(詩編 22:8 ~ 9)

2. 人々はイエス様に向かって「神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い」とののしりました。「エリアが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と期待した人々もいました。それなのにどうしてイエス様はそのまま息を引き取られたの

でしょうか。

→ イエス様はいつでも十字架から降りることができる能力をお持ちでしたが、最後まで降りられませんでした。ご自分から進んで罪人の刑罰を引き受けてくださったのです。もし途中でイエス様が十字架から降りてしまわれたのなら、いったい誰が私たちの罪を贖うことができるのでしょうか。私たち罪人にはできません。滅びるしかないのです。イエス様をご自分から進んで十字架を苦しみ抜かれ、私たちの罪を贖ってくださいましたのです。

3. イエス様が息を引き取られると、神殿の幕が真っ二つに裂けました。この出来事はいったい何を示しているのでしょうか。

→ 神殿の幕は、神様と私たちとを隔てる罪の印でした。イエス様が息を引き取られた時、この神殿の幕が裂かれたことにより、神様と私たちとを隔てる罪が取り除かれたことを示してくださいましたのです。本当なら私たちが自分で受けなくてはならない刑罰をイエス様が代わりに引き受けてくださったので、私たちの罪が贖われたのです。神様は、私たちが神様に近づくよう招いてくださるのです。

イエス様を十字架につけてまで、私たち罪人を生かそうとくださる神様の愛に感謝いたしましょう。

ねらい

であろう。

受難週の意味を考える。

弟子の裏切りや見捨てにあった主イエスが、受難を自ら引き受けようとしている。この主イエスの偉大な恵みを知る。

話し合ってみよう！

主イエスの生き方について話し合ってみよう。

展開例

主イエスの偉大な生涯の物語のその偉大さは、十字架の死を自ら選び取った点にある。

主イエスの苦しみ、悲しみ、しかし、その中での父なる神への信頼と信仰の強さに感動してみよう。

バッハのマタイ受難曲を鑑賞するのよ

祈り

主イエスの悲しみや苦しみが自分のためであったことを知り、深く感謝します。

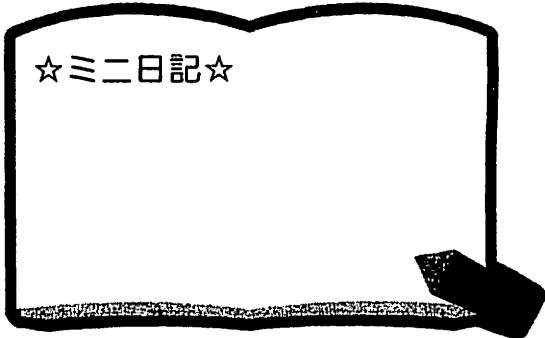
○暗唱聖句○

ペトロ 2:24

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 ルカ福音書 22章 47～53節
- 月 ルカ福音書 22章 54～71節
- 火 ルカ福音書 23章 1～12節
- 水 ルカ福音書 23章 13～25節
- 木 ルカ福音書 23章 26～43節
- 金 ルカ福音書 23章 44～49節
- 土 ルカ福音書 23章 50～56節



テキスト ヨハネによる福音書 20章 24～29節

この聖書箇所は、ヨハネ福音書全体のクライマックスの一つと言えるでしょう。

主の復活を疑っていたトマスに、復活の主ご自身が出会って下さり、そのことによって、福音書が冒頭で語っていた「言は神であった」(1:1)との信仰の告白へと、彼もまた導き入れられたことが印象的です。

〈トマスの疑い〉

トマスは、先に主イエスとその復活のみ姿を弟子たちに示して下さったおり(19以下)には、その場に居合わせませんでした。ほかの弟子たちの証言にも復活を信じることができず、イエスの手に釘跡を見、指をそこに入れ、またイエスの脇腹に手を入れてみなければ決して信じないと言い切ります(25)。

注解者たちの中には、彼を「実証主義的懐疑論者」と呼ぶ人もありますが、彼がひたすらに懐疑論者であったと考えるよりも、信仰と疑いの間を揺れながら生きていた人であったとするほうが適切であると思います。そうであればトマスは、特別に疑い深い人ではなかったということになります。

ただ、11章で主イエスがラザロの死について語られた時、彼は「わたしたちも行つて、一緒に死のうではないか」(16)と言っています。このことから、彼は人間は死ねば終わりであり、誰かのために死ぬことこそ人間の最高の行為であると考えていたとも推測されます。

〈わたしの主、わたしの神よ〉

八日の後、おそらくは復活日の次の安息日に、復活の主はトマスにも出会って下さり、み言葉を下さいます。トマスは「わたしの主、わたしの神よ」と明確に信仰を言い表します。

信仰は実証的な次元をこえて、主との出会いのいとなみです。トマスは科学的に説得されたのではなく、復活の主との出会いを通して、主の十字架の死と甦りとがまさに「わたしの」ためであり、「わたし」への愛のみわざであったことを理解して、信じたのです。

主イエスとともに死のうと決意したにもかかわらず、トマスもまたほかの弟子たちとともに十字架の主イエスを裏切り、見捨てて、主のみ前から逃げてしまいました。その時に彼は自分の罪の深さと無力とを痛切に思い知らされ、絶望を感じたに違いありません。

しかし、そのような彼を赦し、死をこえる命を与えることのために、また真の「平和」(26)を与えて下さることのために、主は死んで甦って下さいました。そしてこのお方とともに生きる命こそ、まことの命であることを示して下さいました。そのことがわかった時に、彼は主イエスのみ前にひれ伏すほか、なすすべがなかったのです。そして彼自身も、新しい命に甦ったのです。

復活は人間の理性をこえた、ただ信仰によってのみ受け入れることを許される事柄です。人間理性をこえたみわざであるからこそ、私たちは復活のイエス・キリストを主、神として礼拝するのです。

復活の主は「見ないのに信じる人は、幸いである」(29)と仰せになりました。地上の、また復活の主イエスをその目で見ると幸いにあずかった弟子たちの時代は去って、新約の教会は主イエスのみ言葉と聖霊によって主を信じます。聖書と聖霊を通して、私たちも「見ないのに信じる」「幸い」な者とされているのです。

テキスト ヨハネによる福音書 20章 24 ~ 29節

〔単元のねらい〕

主イエスの復活の事実を共に喜びたい。そのためには、キリストの復活をはっきりと信じさせる以外になく、そのためにこそ、礼拝式と教会の交わりが与えられていることを伝えたい。

「私たちが救うために復活されたイエスさま」

今日は復活祭、イースターです。イエスさまがお墓の中から復活なさったことをお祝いする日です。世界中で、「イースターおめでとうございます」という挨拶がかわされます。みなさんと一緒に、言いましょう。「イースターおめでとうございます。」

イエスさまが十字架につけられたのは、金曜日、その午後3時に十字架で息をひきとられました。イエスさまの死なれたお姿を悲しみながら見ていたわずかの人が、大急ぎで、イエスさまのお体を、洞穴のお墓のなかに運び込みました。イエスさまのお墓の洞穴の入口には、誰にも中に入って荒らされないように、大きなおおきな石が、ふたをするように置かれていました。

さて、金曜日から数えて三日目、日曜日になりました。その日の夕方のことです。お弟子さんたちは、家の中にとじこもってただ「じっ」としていました。イエスさまを十字架につけた人たちに見つかってしまうのを怖がっていたからです。するとどうでしょうか。イエスさまが現れたのです。イエスさまはこうおっしゃいました。「あなたがたに平和がありますように。」皆さん、不思議に思いませんか。イエスさまは、ちっとも弟子たちを怒っていません。弟子たちはついさっきまで、「イエスさま、わたしは絶対に裏切りません。

逃げ去ったりしません」と言っていたのです。けれども、イエスさまがローマの兵隊に捕まえられるとみんなワーッと逃げ去ったのです。皆がイエスさまだったらどうしますか。「ここにいたのか、どうして、僕一人を残して、逃げたりしたんだ。君たちのことは赦さないぞ。」もしかしたらそう言うかもしれませんね。ところがどうですか。イエスさまはちっとも怒っていません。反対です。神さまの平和、祝福、救いがあるようにとおっしゃってくださったのです。そして、びっくりしているだけのお弟子さんたちに、手と脇腹をお見せになりました。その手には十字架で打たれたクギの跡があります。脇腹には、槍で突き刺された傷痕があります。イエスさまは、おっしゃいます。「あなたたちの罪はわたしが十字架で死んだことによって、償われました。もう、あなたがたが神さまのお怒りを受ける必要はありません。私を信じるなら、あなたたちの罪も過ちもみんな赦されるのです。わたしは十字架で死んだだけでなく復活しました。私を信じれば、あなたたちは救われるのです。」

お弟子さんたちの心は、復活のイエスさまに出会って、優しいお言葉をかけてもらうまでは苦しくて苦しくてたまりませんでした。自分が、どんなにひどい人間であるのか、ど

んなにイエスさまに悪いことをしたのか、自分でも分かっていたので、心が傷ついてしまっていたのです。しかし、今はもう違います。イエスさまが復活されたことを知って大喜びです。嬉しくてうれしくて仕方がありません。弟子たちは皆で言いました。「イエスさま、ごめんなさい。信じます。わたしたちの罪を赦してください。感謝します。」

ところが、そこに、お弟子さんの中でトマスさん一人が一緒にいなかったのです。お友だちのお弟子さんたちは、トマスさんに一生懸命言いました。「トマス、喜んでください。イエスさまは復活されました。私たちはイエスさまを見ました。」すると、トマスさんはとても暗い顔つきで、けれども強い口調できっぱりと言いました。「そんなこと信じるものか。死んだ人がよみがえるわけないでしょう。僕は、イエスさまの手のクギ跡を見、いや、見るだけではだめだ、僕の指で実際にクギ跡に入れてみないと決して信じやしない！」みなさんはトマスさんの気持ち、言葉をどう思いますか。

一週間が過ぎました。すると、どうでしょう。もう一度、イエスさまが皆が集まっているところに現れてくださいました。この日も同じように、「あなたがたに平和がありますように」とおっしゃいます。そしてイエスさまは、真っ直ぐにトマスさんに近づかれました。そして優しい眼差しで、トマスさんを見ながら、しかし、はっきりとおっしゃいました。「トマス、あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。あなたの手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

イエスさまは、トマスが他のお弟子さんに言ったあの言葉を聞いておられたのです。そして、トマスに何としても、信じさせたかったのです。イエスさまはここでも怒っておられるではありません。「トマス、なんてひどいことを言ったのだ。」イエスさまはそんなことをおっしゃらないのです。どこまでもどこまでも優しく、そして誰よりも真剣におっしゃるのです。「トマス、信じなさい。信じなければ、あなたの罪は残ってしまうのです。赦されずに残ってしまうのです。神さまの子どもとなれません。信じなさい。そのためなら、あなたが望むとおりにしても良いのですよ。トマス、信じなさい。」トマスさんの目にはもう涙が一杯です。もう、触る必要などありません。トマスさんは嬉し涙で言いました。「イエスさま、わたしの主、わたしの神さま！」

トマスさんはなぜ、最初信じるのが出来なかったのでしょうか。それは最初の日曜日に、皆と一緒にいなかったからです。でも次の日曜日には、皆と一緒に集まっていました。わたしたちは、毎週日曜日に教会に集まります。そして、復活されたイエスさまから、「あなたがたに平和がありますように」と言っただけのです。イエスさまはおっしゃっておられます。「信じない人にならないで、信じる人になりなさい。そして、神さまの子どもとして育ちなさい。わたしはそのためにお墓を破って、十字架で死んだけれどもよみがえったのですよ。」イエスさまは復活されました。目には見えませんが今も僕たち私たちと一緒にいて、見守って下さいます。イエスさまは生きておられます。

〔今日の暗唱聖句〕 ヨハネによる福音書 20章 27節

あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。

〈ねらい〉

復活されたイエスさまが、いつも共にいてくださることを喜び、イースターをお祝いします。

〈お話〉

「コツ、コツ・・・」なんの音でしょう！卵の中で、何かがゴソゴソ動いています。卵の殻に、ひびが入りましたよ！卵の殻が、二つに割れて、中から黄色い元気なヒヨコが飛び出してきました！卵の殻をやぶってヒヨコが出てくるように、イエスさまは死を打ち破って、よみがえられたのです！

イエスさまが十字架にかかった日から、三日がたちました。そして、日曜日の朝早く、女の人たちは、イエスさまのお墓にいきました。すると、どうでしょう！お墓の入り口をふさいであった大きな石がゴロリと転がしてあるではありませんか。

そこには、二人の天使が立っていました。「あなたがたは、どうしてイエスさまのお体をさがしているのですか。イエスさまは、もう、ここにはおられません。イエスさまは、よみがえられたのです。」と言いました。

女の人たちは、イエスさまが、「わたしは三日目に復活する」と何度も言っておられたことを、やっと思い出しました。

〈暗唱聖句〉

「信じる者になりなさい」

ヨハネ 20:27

〈賛美〉

「くさのめ きのめ」

『こどもさんびか』113番

(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 24 を参照

〈分級の流れ〉

○「飛び出すヒヨコ」

材料・・・卵型の白い画用紙、黄色の色画用紙、割りビヨウ、クレヨン

黄色の色画用紙でヒヨコを作っておく

①何ができるか、期待を持たせながら、卵形の白い厚紙を配ります。

「卵がコロコロころがってきました！好きな模様や、色をぬってみましょう。」

③「コツ、コツ・・・」、「オヤ？卵に、ひびが入りましたヨ」と言いながら、ハサミで、割れ目を入れます。

④以下は、教師が作る。

下の殻の右端に、細長い紙をはりつけ、上の殻と割りビヨウでつなぐ。

裏側にポケットをつけ、その中に、ヒヨコを入れる。

⑤113番を賛美します。2節の歌詞の「卵の中から、ピヨピヨと、かわいいヒヨコ飛び出せよ」のところでは、自分の卵を開けながら賛美します。

⑥くり返し賛美した後、祈ってわかれませう。



〈目標〉

イエス様は復活されて、死を滅ぼしてくださった。私たちの希望はここにある。復活されたイエス様はいつも私たちと一緒にいてくださる。イースターを共に喜ぶ。

〈展開例〉

1. イースターになぜタマゴを食べるのかを説明する。

起源は昔、ベルシャ人に埋葬の時にタマゴを入れる習慣があったのが教会に取り入れられたらしい。殻を破ってヒヨコが出てくるように、イエス様が墓を破ってよみがえられた象徴になった。

2. タマゴさがしゲーム

- ・雨の場合は教会の中で、暗れていたら公園などで行う。(2人で1チーム)
- ・タマゴをセロファンなどで包み、汚れないようにしておく。
- ・さらに、問題を書いてある紙で包む。
- ・包んだタマゴをいろいろな所に隠しておく。
- ・クイズの答えを別の用紙に書く。
- ・後で正解を発表して得点を計算する。

〔用意するもの〕

茹でたタマゴ 10～20個(人数によって)
セロファン(セロテープ、リボンなどでとめる)

クイズを書いた紙、答えを書く紙、ペン紙の下におく厚紙かテイター

タマゴを入れる袋かカゴ



〔クイズの例〕

- ・イエス様が十字架にかかられたのは何曜日ですか。
- ・イエス様の復活は、何曜日ですか。
- ・イエス様の手のクギあとを指でさわらなければ信じないと言ったのは、誰ですか。
- ・イエス様がおっしゃった言葉「信じないものではなく、()者になりなさい」
- ・神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の()を得るためである。
- ・イエス様はおっしゃいました。「わたしを信じる者はたとえ死んでも()」
- ・イエス様がよみがえられたので、イエス様を信じる私たちも()ります。
- ・イースターにタマゴを食べるのはなぜですか。①～③から選んでください。
①イエス様がタマゴが大好きだったから。
②タマゴの殻を破るようにイエス様が墓からよみがえられたから。
③イエス様が亡くなった時、体に巻いていた布が白かったから。
- ・イエス様がよみがえられたことをお祝いする日を何といいますか。

(注) 子どもたちが読めるように、なるべくひらがなで書く。答えの用紙に問題の番号、解答欄、合計欄などを書いておく。

外から帰ってきた時には飲み物を用意しておくとうい。

〈祈り〉

天のお父さま、私たちのために、イエス様が死んでよみがえってくださったことを感謝します。イエス様が今も生きておられ、私たちと一緒にいてくださることを忘れることがありませんように。

〈ねらい〉

イエス様は十字架の死から三日目に復活された。弟子たちに預言されていた通りである。はじめ預言を信じなかった弟子たちは、復活の主にお会いして、イエス様のご復活を述べ伝える者に変えられた。この大きな変化を引き起こした復活の確かさを心に刻み込み、喜びをかみしめたい。

〈展開例〉

1. イエス様はお弟子さんたちに、ご自分のことをどのように預言されていましたか？
→ 預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、預言者が三日三晩大魚の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になること（マタイ 12:39、16:4）
・長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている（マタイ 16:21、17:23、20:19）

2. お弟子さんたちはイエス様の預言を信じ、復活を待ち望んでいたのでしょうか？
→ いいえ。お弟子さんたちは、イエス様が復活されることを全く期待していませんでした。復活の預言など信じる気になれなかったのです。イエス様が復活された後でさえ、なかなかすぐには信じるできませんでした。

3. 復活の預言を信じる事が出来なかったお弟子さんたちが、なぜイエス様の復活を述べ伝えるようになったのでしょうか？
→ イエス様が本当に復活されたからです。最初は信じる事ができなかったお弟子さんたちですが、復活されたイエス様に何度もお会いし、声をきき、体をさわらせていただきながら、幽霊でも幻覚でもない、本物のイエス様が間違いなく復活されたのだということを確認しました。そして、聖霊に導かれ、この喜びの知らせを述べ伝える者に変えられたのです。

4. 私たちはどのようにしてイエス様の復活を信じる事ができますか？
→ 今、生きている私たちは、イエス様のご復活を体験されたお弟子さんたちの証言（新約聖書）を通して復活を知ることができます。私たちが見なくても信じる事ができるように、神様が聖霊をおくって助けてくださるのです。

5. イエス様が復活されたことが、どうして私たちにあって喜びの知らせなのでしょうか？
→ イエス様は「私を信じる者は、死んでも生きる」と約束してくださいました。この約束は、決して口先だけの「うそ」の約束ではありません。イエス様の復活が確かであったように、イエス様を信じるものが復活することも確かだからです。私たちの罪を贖って、死んでも生きるようにしてください。神様の恵みに感謝いたしましょう。

ねらい

キリスト教は復活信仰によって成立している。復活は、大切な教えである。主イエスを死から復活させた父なる神の偉大な力と、主イエスを義人として証明した父なる神の働きの大きさを知る必要がある。

展開例

ちょう（昆虫）の一生を見ても、地上を這う青虫（幼虫）が空を飛ぶちょう（成虫）に変化する姿は、見方によれば幼虫に死んで成虫に復活した奇跡と見える。草花の種が死んで芽を出し花を咲かせる生物の変化も、一種の死から再生の現象と考えられる。

人間の成長も、子どもに死んで大人に変化したとも言える。死と再生は、日常的な現象とも言えないだろうか。

話し合ってみよう！

生物の成長の変化の中に復活に似た現象があることについて話しあってみよう。

祈り

人間の命が復活を通して完全にされることを信じる信仰をお与えください。

○暗唱聖句○

ヨハネ 20:27

○祈りの課題○

聖書日課

日 ヨハネ福音書 20章 1～10節
 月 ヨハネ福音書 20章 11～18節
 火 ヨハネ福音書 20章 19～23節
 水 ヨハネ福音書 20章 24～31節
 木 ヨハネ福音書 21章 1～14節
 金 ヨハネ福音書 21章 15～19節
 土 ヨハネ福音書 21章 20～25節

☆三日記☆

テキスト 創世記1章

創世記の天地創造の記事から私たちが学ぶべき点は、以下の諸点です。

- ・神が唯一の、人格を持つお方であり、かつ永遠のご存在であられること。
- ・天地創造は神の力と全能を示し、被造世界は神の栄光と知恵を照り返していること。
- ・創造が「無からの」「言葉による」創造であること。
- ・神がよきご意志をもってすべての被造物、とくに創造の冠たる人間をお造りになったこと。人間が「六日目」に、準備万端整えられた世界に、「神にかたどって」(1:26,27)創造されたことの中に、神の特別の愛と配慮を見ることができます。

ここでは1:1に絞って見ていきます。

[1]「初めに」

「初めに、神は天地を創造された」(1:1)というみ言葉は、生きています永遠の神のご存在を明瞭に示します。神はすべての命の根源にいますお方です。この神が天地万物を創造されました。天地万物は偶然に生じたのでも、また得体の知れない何がしかの力の作用によって生み出されたのでもなく、この永遠の神の明確なご意志によって造られたのです。

神は天地万物の主権者にています。永遠の神は三位一体のお交わりにあっておん自ら満ち足りておられ、何か足りないことでもあるかのように被造物の手を借りなければ立てないということはありません(神が自らの不足を補うために創造のみわざをなさったという考え方を聖書はしりぞけます)。反対に、天地とそこにあるすべての被造物は、まったく神に依存しています。

神はご自身の主権をもって天地を創造され、ただみ言葉によって混沌と闇をご自身の秩序をもって整えられ、ご自身のよきみ心のいきわたる光の世界となさいました(2-3)。

作品が作者のすばらしさを反映するように、被造物のすべては神の栄光をあらわすことを目的に創造され、神のよきご意志を照り返します。

[2]「神が」

1:1に用いられる「神」は、ヘブル語「エロヒーム」で、神を意味する「エル」という語の複数形です。この複数形は三位一体の反映であるとか、神の尊厳を表すといった説がありますが、いずれにせよ(複数形であるからといって)創造の神が(偶像の)神々であるということではまったくないことは明らかです。創世記の創造の記事は、むしろ偶像的な古代のさまざまな創造神話を打ち破って、真の世界の「初め」をさし示しているのです。

[3]「創造された」

1:1で用いられている「造る」という意味の語「バーラー」は、神の創造のみわざに限って用いられる言葉です。人が何か物を造る場合には「アーサー」という別の言葉が用いられます。

「アーサー」と「バーラー」の違いは、前者が素材を用いて造ることを意味するのに大して、後者は何ら素材を用いずに造ることを意味するという点にあります。すなわち、「バーラー」は神の、無からの創造を物語っているということです。創造は人の知恵や力をまったく超越した、神としての偉大なみ力によるみわざであったのです。

テキスト 創世記1章

〔単元のねらい〕

徹底して創造者なる神を伝えたい。信じる者は、この世界を受け入れることができる。安心して生きてゆける。そのことを伝えたい。創造者への感謝と被造物への責任を呼び覚ましたい。小学上級、中学生の分級では進化論等について取り扱ってもよいであろう。

「天地創造、創造者なる神」

「初めに、神は天地を創造された。」これが、聖書の一番最初に記されている神さまの御言葉です。創世記の第1章第1節です。ニカイア信条では、一番最初のところで、父なる神さまのことをこう賛美しています。「私たちは天と地と、見えるものと見えないもののすべての造り主を信じます。」

もう一度、聖書を読みます。「神は言われた。『光あれ。こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。』神さまはこのようにして、順々に、第一日目には光、次の第二日目には水と大空、第三日目には、大地と海そして草と木、第四日目には太陽と星、第五日目には魚と鳥、第六日目には動物そして最後に私たち人間をお造りになりました。神さまはお造りになられた全てのものをご覧になるたびに、とても喜ばれました。すべて良いものとしてお造りになられ、その通り良いものが造られたからです。

皆さんの回りにこう言う人がいませんか。太陽に向かって拝んでいる人。大きな大きな木に縄を巻いて、御神木といって手を合せている人。白い蛇や白い馬などを神さまのお使いといって敬う人。キツネや狸を神さまの使者といって、石で造ったキツネに油揚げを

供える人。

針供養というのを聞いたことがあります。それは、いつも、縫い物をしている方々が、一年に一度、いつも使っているその針が、毎日毎日固い布に刺されるのがかわいそう、ご苦労さまと言って、お豆腐に刺してあげるのだそうです。神主さんが御破いをするそうです。皆さんはどう思いますか。針は、毎日毎日、固い布に刺されて痛いのでしょうか。針にごめんなさい。いつもありがとうございます。と言うのは、正しいのでしょうか。

死んだ人は仏さまとか神さまになるという話を聞いたことがありますか。死んだ人は、生きていた人より力が強くなったり、不思議なことをすることが出来るようになるのでしょうか。決してそんなことはありません。江戸時代の将軍の徳川家康は、こう命令しました。「わたしは、死んだら、自分は神さまになるのだから、立派なお宮を造りなさい。」栃木県の日光と言うところに東照宮という立派なお宮があります。けれども、徳川家康は神さまになったわけではありません。今から、50数年前、日本の天皇は、自分自身そして他の人たちから神さまと言われて来ました。けれども、その同じ天皇は「自分は神さまではありません」とあとで言いました。

昔、石川五衛門という有名な泥棒がいました。この人は、ルパン三世のように、これこれの場所にいついつの時に、盗みに入る、その金は貧しい人に分けてあげると言って、その通りに、盗みに入ってお金を盗み出したと言われています。しかし、その石川五衛門も捕まってしまうました。そして、この人が死んで、この人をお祭りした神社が東京の葛飾にあるそうです。二月や三月になると受験生が来てお祈りして、御札を買うそうです。勉強の神さまと言われて有名なのは、菅原道真という人です。この人は頭が良かったからです。でも、石川五衛門はなぜ、受験生がお祈りしにくるのでしょうか。それは、「入るのに難しい学校に僕も、私も入らせて下さい」とお願いしにくるのだそうです。新聞で読んで、先生は笑ってしまいました。

もう僕たち私たちは言うまでもありませんね。そのようなものは神さまでも何でもありません。「ありがとうございます。」とか「ごめんなさい」とか「これこれをおねがいします」と言って、手をあわせるのは、太陽や月や星でもなく、動物でも木でも草でもなく、人間でもありません。それらはすべて神さまによって造られたものに過ぎません。神さまに向かって、天の父なる神さまに向かってだけ、礼拝するのです。お祈りするのです。

そして、私たちの神さまが「天と地と、見えるものと見えないものすべて」をお造りになられたのですから、お魚、昆虫、動物、植物、すべて生命のある自然を大切にしなければなりませんね。神さまが造られた自然、地球の環境を守ることは、神さまを信じている僕たち私たちの責任です。僕たち私たちは、この地球に住んでいます。ところが、この地

球は、このまま行くと人間はもちろん、すべての生き物が住めなくなると言われています。今こそ、神さまを信じる私たちが、生き物を大切にすることが必要です。それが、神さまが私たち人間に与えてくださった使命、仕事なのです。

最後に、神さまは、どのようにして、すべてをお造りになられたのでしょうか。それは、神さまの口から出た御言葉によります。「光あれ」とおっしゃった、その時に、何もなかったところから光が現れたのです。神さまの御言葉には力があります。世界を創造する力が神さまの御言葉にはあるのです。

私たちは今、教会に来て、礼拝の中で、先生から神さまのお話を聴いています。それを説教と言います。そのお話は、神さまからの御言葉です。神さまは先生のお話を通して、僕たち私たちひとり一人に、神さまは語りかけておられます。日本語で話しかけて下さいます。その語りかけは、日本語ですが、神さまの御言葉です。ですから、世界の全てを創造するほどの力のある言葉です。

ですから、この神さまの言葉を自分に語りかけられた言葉として信じて聴いた人には、神さまの御言葉はその通り、実現します。聖書のお言葉の通り、イエスさまを自分の救い主として信じてご覧なさい。イエスさまは私をいつも愛して、いつも一緒にいてお守り下さると信じてご覧なさい。神さまの御言葉は本場で、力があるのです、そのお友達はイエスさまに救われ、神さまの子どもにしたいだけです。

世界をその御言葉でお造りになられた神さまが、今もこの世界を統べ治めておられます。私たちは安心して、生きてゆけます。

〔今日の暗唱聖句〕 創世記1章1節

初めに、神は天地を創造された。

〈ねらい〉

神さまが、みことばによって、世界とその中にあるすべてのものを良きものとして、お造りくださったことを感謝します。

〈お話〉

真っ暗やみで何もない時に、神さまは「光あれ」と言われました。すると、光が射し、明るくなりました。神さまは、ことばによって「光」をおつくりになったのです。神さまがおつくりになった世界の始まりです。

みんなは、夜と朝とどちらが好きですか？「夜は、オバケが出そうでこわいから、きれい」というお友だちもいるかもしれません。神さまは、小さな私たちに「夜は、早くおやすみなさい」と静かな暗い夜をお与えくださいました。ぐっすり眠っている間に、子どもは毎日少しずつ体が大きくなります。

そして、かわいい小鳥たちの鳴き声が、明るい朝を知らせてくれます。小鳥も神さまがお造りくださいましたね。「神さま、明るい朝をありがとうございます。そして、今日一日の全部をありがとうございます」と感謝のお祈りをささげて、起きましようね。

〈暗唱聖句〉

『「光あれ。」こうして、光があった。』
創世記 1:1

〈賛美〉

「うれしい あさよ」
『こどもさんびか』14番
(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問12を参照

〈分級の流れ〉

- ①共に礼拝をささげることができた恵みを感謝しながら、賛美(#14)をささげます。
- ②賛美の後、上記のお話を、質問を交えて話します。暗唱聖句を覚えます。
- ③ゲーム 「そら・うみ・りく」
 - ・地面に直径2～3メートル程の円を三つかき、それぞれを「そら」「うみ」「りく」とします。(室内の場合は、ロープなどで輪を作って、床に置きます)
 - ・こどもたちは円の外に立ち、教師が鳥の名前を言ったら「そら」の円に入り、動物や植物の名前を言ったら「りく」の円に入り、魚の名前を言ったら「うみ」の円に入ります。(年齢に合わせてアレンジしてください)
- ④一週間の神さまのお守りをお祈りしてわかれます。
- ⑤一か月たちました。幼稚科のお子さんの様子などについて個別にお母さんと連絡を取りましょう。



〈目標〉

天地を創造されたのは神様であることを知る。神様はこの世界を力ある言葉によって造られた。創造の御わざを順を追って見ていく。世界は極めて良いものとして造られた。

〈展開例〉

1. 天地創造をフランネルグラフで振り返る。

段ボールにネル生地をはりフランネルボードを作る。その上に黄色の紙をはり、その上に黒の紙をはる。



一番初め、世界は真っ暗で何にもありませんでした。神様だけがおられました。

○一日目



黒い紙を半分はがす。

↓
黄色の紙が出てくる。

神様は「光あれ」とおっしゃいました。すると光がありました。この光を昼、暗闇を夜と名づけられました。

○二日目



空色の紙と雲をはる。

神様は「大空があるように」とおっしゃいました。きれいな青い空と雲ができました。

○三日目



陸と海の紙をはる

↓
草や木、花などをはる

神様は「天の下の水は一つの所に集まり、乾いた地があるように」とおっしゃいました。すると海と陸ができました。そして陸には草やきれいな花、おいしい果物や野菜ができました。神様は、美しく素晴らしい世界を創ってくださいました。

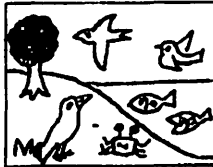
○四日目



先に はがした黒い紙の半分をはる。太陽や月や星をはる。

「天に光るものがあってみんなを照らせ」。昼には太陽、夜には月や星ができました。

○五日目



魚や鳥をはる。魚や鳥、動物などは図鑑をカラーコピーしたものなどを利用してよい。

神様は水の中に魚が泳ぐように、大空を鳥が飛ぶようにとおっしゃいました。するとそのようになりました。

○六日目



動物をはる。

↓
人間をはる。

神様は次にいろんな種類の動物や虫などをお造りになりました。そして最後に神様は人間をお造りになりました。神様が造ったすべてのものをごらんになると、それはすばらしく良いものでした。

2. 作ってみよう！（神様が作られたもの）

いろいろな形の石を拾ってきて洗って乾かしておく。ポスターカラーやマジックなどでいろいろな動物などの絵を描く。



〈祈り〉

天のお父さま、この素晴らしい世界を造ってください。ありがとうございます。神様が造られたこの世界を大切にすることができますように。

〈ねらい〉

創造主としての神様を知る。そのことは、小さな幸せを求める信仰心や、神様を小さな幸せを提供してくださる方といった理解に陥りやすい私たちを、より大きな視点に立った信仰へと、そして、神の前に喜んで生きる者へと導くことだろう。

〈展開例〉

1. 「初めに神は天地を創造された」で聖書全体は始まる。この言葉をどう感じるだろうか。
→聖書の神様が、唯一の創造主、全能の神であることの高らかな宣言として聞きたい。
2. 2節の状態をどのように感じるだろうか。
→不気味というのが正直な感想ではないか。しかし、聖書は天地創造の前の世界を、ただ不気味なものとして描いているのではない。動いている神の霊は、(三位一体の)神様の活動があることを示している。「密雲と濃霧が主のまわりを立ちこめ」(詩97:2)、「厚き雲と暗闇」(同詩編歌)とあるように暗闇は神様の御座。(この問いのポイントは、天地創造で全てが始まったのではなく、永遠の昔から神様が活動しておられることを知ること。)

3. 一日ごとの神様の創造のお働きを、順番に言ってみよう。

→神様は人間が住むことのできる世界を、一日ごとに造り続けられ、その最後に、すべてが整ってから人間を創造してくださったことがわかる。

4. 七日目は私たちにどのような意味を持っているだろうか。

→神様がこの日を聖別されたことによって特別な日となった。身体の安息とともに、神様を礼拝し、神様を喜ぶ特別な日となった。

5. 天地創造、さらにこの後に続く創世記の記事はだれが書いたのだろうか。

→当然、天地創造の場面を見た人はいない。教会は、神様の霊の導き(テモテニ 3:16)により、モーセが記したと考えてきた(モーセ五書)。後の時代の編集はあるだろうが。

6. 「光あれ」のお言葉と、風と湖に向かって「黙れ。静まれ。」(マルコ 4:39)と言われたイエス様のお言葉と、なにか似ていると感じるだろうか。

→イエス様のお言葉は、自然の力(その背後にある霊の力に対しても)に対する絶対的な優位性を示している。そのイエス様のお姿は、三位一体の神として、「光あれ」と命じられたお姿(見ることはできないけれど)と共通していると感じることだろう。

ねらい

宇宙・自然・命（植物・動物・人間）の存在の不思議さの感覚（センス・オブ・ワンダー）と、感謝と賛美の心を起こさせる。

話し合ってみよう！

神からの恵みとして与えられている自然環境への応答（責任）として、知識を学ぶ目的について話合おう。

展開例

レイチェル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』を紹介し、環境保護と人間の責任について語る事が可能。

世界を治める手段として、学問や文化・文明をどのように活用したらよいのか考えてみよう。

祈り

この世界の存在を感謝し、人間の責任を果たせるように導いてください。

○暗唱聖句○

創世記 1:1

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 創世記 1章 1～5節
- 月 創世記 1章 6～8節
- 火 創世記 1章 9～13節
- 水 創世記 1章 14～19節
- 木 創世記 1章 20～23節
- 金 創世記 1章 24～31節
- 土 創世記 2章 1～3節

☆三二日記☆

テキスト 創世記2章6～25節

創世記2:4-25は、1:26以下とともに、創造の冠としての人間の創造について語ります。神の「よき創造」(1:31)は、六日目の人間の創造をもって完成へと至ったのです。

〔1〕人間の創造

2:7は、土の塵（ヘブル語「アダマ」）で形づくられた人（「アダム」）が、神によって命の息を吹き込まれたことによって生きる者となったと記します。このことによって人が、他の動物とは異なった特別な存在、すなわち神にかたどって造られた被造物(1:26)であることが理解されます。

人は体を持つ点で神と異なりますが、霊的、人格的存在である点で神と共通する者として創造されました。人は神のかたちを持ち、神を礼拝することを本分として生きる者として、最初から造られているのです（ウ小教理問1参照）。

〔2〕エデン

神は人をエデンの園に置かれました。エデンは神がとくに人のために設けて下さった場所です。エデンの園はよく潤った、美しい木々の生い茂る至福の場所として描かれています。人はそこを守り耕すこと、すなわち労働の務めを神から与えられましたが(15)、彼にとって労働もまた純粋な喜びでした。

園の中央には「命の木」と「善悪の知識の木」とが生えていました(9)が、神は人に善悪の知識の木から食べることは禁じられ、食べると必ず死ぬと警告されました(17)。

これは、善悪の木自体に魔力があったとかではなく、人が神のみ言葉に従うかどうかを神がお試しになったということであって、純粋な信仰のテストでした。被造物は造り主のみ言葉によって生かされます。み言葉への服従は命の祝福の前提です。もしもこのみ言葉に従ったなら、人には最高度の命の祝福が与えられたはずです。

〔3〕女の創造

人がひとりで生きるのではなく、他者との交わりにおいて共同の生をいとなむことは、そもそも創造の秩序における神のみ心です。人には特に彼にふさわしい助け手が必要でした。

他の動物はいずれもそのような存在とはなり得ませんでした。そこで神は人を深い眠りに落とされ、彼のあばら骨の一部を抜き取って、女を造り上げられました(22)。

眠りから覚めた人が女を見ると、彼は「ついにこれこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉」と言いました(23)。人のこの叫びには、文字通り自身の骨肉、一心同体の助け手を見出した喜びがあふれています。

テキスト 創世記2章6～25節

〔単元のねらい〕

人間は神へと造られた。それ故に、礼拝者として生きるとき、人間は人間として回復される。人間は神の形に似せられて男と女とに創造された。それ故に、人間同士の真実、愛の絆を結ぶことが求められる。人間は、すばらしい存在であることを伝えたい。

「神のかたちに創造された人間」

僕たち私たちは人間です。もちろん、当たり前のことですね。でも、人間と他の動物との違いは、何でしょうか。ある人は、人間は、猿がだんだん進化して、賢くなって人間になったのですとまったくおかしなことを言います。そのような考えをする人は少なくありません。私たちは、神さまが「天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主」であることを学びました。最初人間がどのように誕生したのか、それは、私たちがどれほど研究しても分かりません。どんなに賢い学者が研究しても分かりません。それは、人間をお造りくださった神さまから教えてもらう以外にありません。神さまは僕たち私たちに聖書を通して人間とは何か、人間はどのように造られたのか、何のために生命を与えられたのかを教えてください。

創世記第1章27節を読みます。「神はご自分にかたどって人を創造された。男と女とに創造された。」人間と動物との違いは、動物も神さまに造られたのですが、神さまは人間だけを神さまの形にかたどり、似せてお造りになられたのです。もちろん、人間も、土のちり、この地上の物を用いて造られました。その意味では動物とまったく同じです。けれども違いがありました。それは、神さまにか

たどってということです。神さまに似せてということです。でも、誤解しないでください。神さまには顔があつて、手があつて、足があるというように、人間のような形をしておられるということではありません。人間は、神さまにかたどられて、男の人・女の人として、造られたのです。最初から、男の人・女の人として造られたのです。

どうして、神さまの形にかたどられると、男の人・女の人になるのでしょうか。誤解しないでくださいね。神さまに男の神さま、女の神さまがいるわけではありません。私たちの真の神さまはどのような神さまでしたか。そう、三位一体の神さまです。御父なる神さまと御子なる神さまイエスさまと聖霊なる神さまです。神さまは、父と御子と聖霊の交わりをもっておられ、離れることがない、愛の神さまということ学びましたね。愛の神さまに似せて造られた人間ですから、人間どうし真実に、誠実に、愛をもって深い絆で結ばれることが大切なのです。皆が、お友だちを大好きになること、お父さんお母さんが大好きになることは、とても素晴らしいことです。神さまはそれをとつても喜んで下さいます。人間が人間として素晴らしいことになるのはお友だちを愛するときなのです。逆に、人間が人間どうし憎

しみ合ったり、喧嘩したり、殺しあったりするなら、どれほど神さまを悲しませることになるでしょうか。人間はお互いをかけがえない大切な相手と思う必要があるのです。それが、神さまにかたどり似せられて造られた人間の本当の姿なのです。ですから、神さまに似せて造られた私たちは、お友だちを大切に、仲良くすることを目標にするのです。

また聖書を読みます。創世記第2章6節、「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。」人間は、動物と同じように土の塵で造られたのです。その意味で、人間は死んだら土の塵に戻ってしまいます。ですから、土の塵から造られただけであるならば、人間は本当の人間になれません。人間が人間となるのは、私たちの鼻に命の息、つまり神さまの命が吹き入れられたとき、その時、人間は人間となったのです。

僕たち私たちが息をしているのでしょうか。どこでしているのかな。口で息を吸う人もいるかもしれませんが。でも、大抵は、鼻で息を吸うのです。空気を吸って、人間は生きています。今、実験をしてみましょうか。口を閉じて鼻をつまんで下さい。もうすぐに苦しくなってしまうでしょう。皆が1分とか2分息を止めたら、先生は大急ぎで救急車を呼ばなければなりません。息を止めたら死んでしまいます。神さまは人間の鼻に命の息を吹き入れられました。それは、どう言うことを意味しているのでしょうか。それは空気を入れたということではありません。神さまの命、神さまの息、聖霊です。聖霊なる神さまを注ぎ込まれたのです。「それが、人間が本当に生きることですよ」と教えていただきました。

それなら、今、私たちは空気ではなく、神さまの命の息、聖霊を吹き入れられているのでしょうか。神さまの命の息は口から出るのでしょうか。そうして、私たち人間は、鼻から吸うのでしょうか。それは、こう言うことを言おうとしているのです。「神さまの御顔の方に自分の顔を向けることが必要なのですよ。神さまに背中を向けていれば、神さまの息が入りませんよ。神さまに近づきなさい。どんどん近づきなさい。」

それなら、僕たち私たちが、どうしたら、近づくことになるのでしょうか。それは、礼拝をささげることです。今、僕たち私たちがしていることです。礼拝をささげるのです。今、先生は、神さまのことばを語っています。皆は先生の顔を見てくれていますね。それは、ただ先生の顔を見るということだけを意味しているではありません。目に見えないけれどここにおられる神さまの御顔を見ていることなのです。もちろん、先生の顔は神さまの御顔ではありませんよ。けれども、先生の口から出ることばを信じて聞いている人には神さまが聖霊を注いでおられるのです。そのときには皆はますます、神さまを好きになり、神さまのことを信じ、教会に来ることが楽しくなります。そして、日曜日だけではなく、毎日、神さまを礼拝したくなります。毎日お祈りして礼拝するのです。

今週も、神さまは優しい愛の御顔を向けて、優しい目で僕たち私たちを見守っていて下さいます。それなら、私たちも、背中を向けて無視したりしないで、神さまの方へ顔を向けましょう。「神さま、天のお父さま、イエスさま」とお呼びして過ごしましょう。

〔今日の暗唱聖句〕 創世記2章7節

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

〈ねらい〉

私たちは、神さまに造っていただいた「神の作品」であることを喜びます。

〈お話〉

今日から五月です。お花もたくさん咲いて小鳥はますます元気にさえずります。木々の緑色がとても美しいですね。さわやかな五月の風も、吹きわたります。神さまのお創りになった自然は、本当にきれいです。神さまはおことばによってお創りになった世界をごらんになって「たいへん、すばらしい」と、満足されました。

神さまのお創りになった世界の中でも、一番の特別は人間でした。神さまは、人間にいのちの息を吹き入れました。それは、人間が神さまに、お話し（お祈り）したり、感謝することができるためです。どんなにかしこい

動物でも、神さまにお祈りしたり、礼拝したりすることはできません。神さまは、人間を他の生き物よりも、特別にすばらしく創ってくださったからです。

神さまを礼拝すること、お友だちを愛するためにわたしたちをお創りくださいました。

〈暗唱聖句〉

「男と女に創造された」

創世記 1:27

〈賛美〉

「うれしいあさよ」

『こどもさんびか』14番

(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 15 を参照

〈分級の流れ〉

- ①お天気の良い日であれば、戸外に出ましょう。散歩をしながら（自然の豊かな場所であればさらに良い）草花や樹木、鳥、虫などの生き物、さわやかな風に触れるとよいでしょう。散歩をしながら、休憩をしながら、上記のお話をします。
- ②戸外ゲーム 「おーい、エバさん」
 - 必要な物・・・手拭い2本
 - ・アダムさんとエバさんを一人ずつ決めます。二人は、手拭い（または、タオル）などで、二人とも目かくしをする。
 - ・他の子は、手をつないでまるくなる。
 - ・輪の中に、アダムさんとエバさんが入って、エバさんが「アダムさーん」と呼びながらアダムさんを探します。輪になったお友だちも「前！、右右！！」と、エバさんに教えます。アダムさんも、「ハーイ！」と言いながら、エバさんに近づいていきます。
 - ・アダムさんとエバさんが、見つかったら他のお友だちと交替して遊びます。
- ③野原や道端の草花や葉っぱを、一人ひとつずつ、お土産に持ち帰ります。教師は、お部屋に帰ったら、ティッシュペーパーにはさんだ後、電話帳にはさみ、辞典などで重しをします。押し花に関しては、教案誌第2号、16～19ページを参照してください。
- ④来週に期待を持たせて、お祈りをささげた後、わかれます。

〈目標〉

人間は「神のかたち」に似せて創造された。神と交わることのできる霊的存在として造られたということを教える。神が命の息を吹き込まれ、人は生きる者となった。

〈展開例〉

1. 人間とは何かを考える。

人間が動物や他の生き物と違っているところは何かを考えさせる。

- ①考えたり、工夫したりする知恵がある。
- ②自由に話したり、言葉を書いたりできる。
- ③物を作り出すことができる。

など、いろんところで動物とは違った特別なところがあることに気づかせる。

○人間は「神のかたち」に似せて造られた。

→人間は神と霊的な交わりをもつ存在。

神様を愛し、礼拝するために造られた。

→動物は神に祈ることができない。

動物は神様を礼拝しない。

2. 次の中で正しいものに○をつけましょう。

- () サルは、何のために生まれてきたのかと時々悩んでいる。
- () 犬は道に落ちているお金を拾ったら交番に届けなくてはと考える。
- () 世界にはお祈りする猫がいる。
- () 最初に造られた人はアダムである。
- () 人間は土の塵から造られた。
- () インドにいるあるチンパンジーは、手紙を書くのが趣味だそうだ。
- () 神様は人に命の息を吹き込まれた。
- () 人間はサルからだんだん形が変わって今のような姿になった。
- () 人間は神さまとの交わりがないならば死んでしまう

3. 作ってみよう

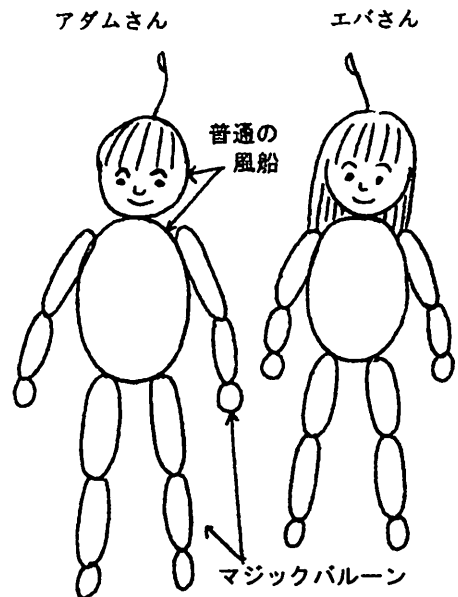
「神様に命の息を吹き入れられた人間」

風船でアダムさんとエバさんを作ろう。

〔用意するもの〕

普通の風船6個、マジックバルーン8個、マジックバルーンのポンプ、ひも、マジック（黒と赤）、セロテープ

(注) マジックバルーンは細長い風船のことです。おもちゃ屋さんにあります。



- ・手や足の部分は、マジックバルーンを3～4回ねじって関節をつくる。(長すぎる場合は余った部分を付け根の方にまとめてテープではる)
- ・髪の毛をひもで作ってつける。
- ・頭の上にひもをつけて持てるようにする。

〈祈り〉

天のお父さま。私たちが特別に神様に似た者として造ってくださりありがとうございます。いつも神様の方を向いて、感謝をもって生きることができますように。

〈ねらい〉

神様の命の息を吹き入れられたもの、つまり特別な存在として人間が創造されたことを知る。

〈展開例〉

1. 人間が神様の命の息を鼻から吹き入れられて生きるものとなったということは、どうということだろう。

→ そのとき命が与えられ生きようになったとも理解できる（電池を入れられたロボットのように）。しかし、他の生き物の場合に神様の息が吹き込まれたと記されていないことからすれば、単なる命というより、神様との交わりのうちに生きるものとされたとして理解すべきだろう。つまり、霊的な命を持つもの（神様を知り神様との交わりに生きるもの）とされたということ。そうだとすると、ただ身体的に生きていただけでは、本当の人間としての命を持っていないということになる。

2. エバが「彼（アダム）に合う助けるもの」として、アダムのあばら骨からつくられたということはどういうことだろう。女は男より低い存在だろうか。

→ 「助けるもの」から、女が男に従属するも

のとしてつくられたと理解されやすいのではないか。しかし、「わが助けはどこからくるのか」（詩 121:2）とあるように、「助けるもの」は神様のご本性を示す言葉でもあり、女を低いものとする言葉ではない。英語の聖書には helper ではなく partner と訳しているものが多い。

3. 世界が神様によって創造されたものであるなら、私たちが自然を研究したり、また、自分の存在を考えたりすることによって、神様のことを知ることができるだろうか。

→ 今の自然は神様の創造のままのものではない（ローマ 8:20）。また、私たちの（罪によってくもらされた）知恵も、神様の助けなしに神様を知ることができない。したがって、自然を知ることによっては、神様を正しく知ることはできない。偉大な自然の力に接するときに、神の存在を感じるのは、神様が人間の心に宗教心を与えてくださったから。しかし、罪の中にある人間には、生まれながらの宗教心によっては正しい信仰を持つことができない。神様から信仰を与えられて自然を見るときに（それが本来の輝きがくもらされたものであっても）、そこに神様のみ業のすばらしさを知ることができる。

ねらい

動物の命と人間の命の類似と相違について考える。命の息（スピリット）が与えられている独自性に注目したい。

話し合ってみよう！

英語の辞書で spirit について調べてみよう。
日本語の「気」の用法も調べてみよう。

展開例

命の息（スピリット）は人間の生きる意味や生きがいと深く関わっていることを認識しよう。

また、世界における人間の特別な地位について考えてみよう。

祈り

世界における人間の特別な使命について自覚させてください。

○暗唱聖句○

創世記 2:7

○祈りの課題○

聖書日課

日 詩編 104 編 1 ~ 9 節
月 詩編 104 編 10 ~ 24 節
火 詩編 104 編 25 ~ 35 節
水 詩編 139 編 1 ~ 6 節
木 詩編 139 編 7 ~ 12 節
金 詩編 139 編 13 ~ 24 節
土 詩編 8 編 1 ~ 10 節

☆三二日記☆

テキスト 創世記3章

〔1〕罪の現実

主なる神は、人を至福の場所であるエデンの園に置き、園を耕し守る者とされました。また神は人に、助け手である女をお与えになりました。エデンで人は、神を見、神と交わる喜びと祝福に満ち足りていました。

神は人に、ひとつの命令を与えていました。園の中央にある、善悪の知識の木の実を決して食べてはならないという命令でした(2:17)。この命令を守るなら、人は最高度の命の祝福を与えられるはずでした。反対にこれに背いた場合には、必ず死ぬと警告されていました。これは純然たる信仰のテストでした。

しかし人は、サタンの使いである蛇の誘惑を受けて、この命令に背いて木の実を食べます。この罪によって始祖アダムと、彼の子孫である全人類は墮落し、人類に罪と死の法則が入ることになります。聖書では死とは命の神から離されることです。そしてサタンは、人を誘惑して罪を犯させ、神から引き離そうとする存在です。

この聖書箇所注目せずにおれないのは、サタンが人を誘惑する時のたくみさです。サタンはまず助け手である女に語りかけ、神のみ言葉そのものの確かさを疑わせ、神のみ言葉そのものから、善悪の知識の木のうるわしさのほうに目をそらせようとします。このサタンの巧妙さは、現代においても変わることはありません。

〔2〕神のようになれる

人を決定的に魅了し、同様させたサタンの誘惑の言葉は、木の実を食べてもあなたは決して死ぬことはない、むしろ目が開け、神の

ように善悪を知るものとなるのだとの言葉でした(4-5)。

羊が羊飼いのもとにあつて初めて生き得るように、被造物である人は造り主である神のみ手にあつてはじめて真の命を生き得ます。もしも人が神から離れたなら、命を失って滅びるほかはありません。サタンはそのことを熟知していますから、人を神から引き離すために、あなた自身が神になれるというまことに効果的な言葉をもって誘います。

現代に至るまで、これは人にとってまことに魅力的な言葉であり続けています。自分を神のような絶対の存在とする志向は、バベルの塔を築く試み(創世記 11:1 以下)に象徴的にあらわれていますが、私たちはすでに最初の人がエデンで、サタンからこの誘惑に揺さぶられたことを知っています。人のあらゆる罪の根は、神になろうとするこの根本的な志向に根ざしています。

これは具体的には偶像崇拜の姿であらわれます。真の神を離れるとき、人は自分の言うことを何でもきいてくれる神をこしらえ、その神の主人として君臨しようとするからです。(偶像とはたんに宗教的な彫像ということにとどまらず、例えばには、金銭や能力や権力といったものも含まれるでしょう)。

しかし、いかなる偶像も人に命を与え、罪と死の悲惨から救い出すことはできません。自分を神とする道は命ではなく、滅びに至る道です。神のみ子イエス・キリストを通して悔い改めに導かれ、真の神へと立ち返るとき、人は初めて真の命を回復することができるのです。

テキスト 創世記3章

〔単元のねらい〕

神に似せて形づくられた人間が、神に背いてしまったこと。その罪が、今の人間の姿になったことを伝える。分級で、神さまはなぜ、人間が罪を犯すのを許されたのか、神さまが悪いのではないか、もっと立派に人間を造ったらよい、人間を造った神さまにこそ責任があるとの問いが出るかもしれない。それは真剣に考えているゆえなので、ゆっくりと牧会してあげたい。

「墮落した人間」

神さまの形に似せて造られた人間は、男と女とに造られました。男の人の名前はアダム、女の人の名前はエバです。アダムさんは、エバさんを初めて見たときに嬉しくてうたいました。「あなたはわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。」つまり、一番身近で、一番好きな人という意味です。この二人は、とても仲良しでした。神さまに似せて造られた二人なので、神さまを愛し、お互いのそのあるがままの姿が大好きでなりませんでした。二人は結婚しました。隠すこともなど何もありませんでした。二人は、神さまの用意してくださったエデンという園で、それはそれは幸せな素晴らしい生活を続けました。園には、神さまが与えてくださった美しい自然があります。動物もいます。みんな仲良く暮らしています。ライオンも人間を襲いません。大きな動物も人間に噛みついたりしません。人間は、園のすべての木の実を自由に食べることができます。まさに天国のような場所、それが最初の人間が住んでいたエデンなのです。

そんな素敵な生活を送っていたある日のこと、二人の前に、蛇が現れました。蛇とは悪魔のことです。蛇はエバさんに言いました。「エバさん、園のどの木からも食べてはいけ

ない、などと神は言われたのか。」神さまは、こうおっしゃっていました。注意して聞いてください。創世記2章16節です。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」神さまは何とおっしゃいましたか。「園のすべての木から取って食べなさい」とおっしゃいました。悪魔は何と言いましたか。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」悪魔はずるがしこく、正反対のことを言いました。神さまは、「園のどの木からもとって食べなさい」とおっしゃったのであって、食べていけないとはおっしゃっておりません。ただし、たった一本。たった一つだけ禁じられていました。「善悪の知識の木」と呼ばれる木だけは食べてはいけないのです。悪魔は、エバをそそのかして、神さまの御言葉、命令を破らせようと働きかけます。

これに対して、エバさんは何と答えたのでしょうか。「私たちは園の木の果実を食べてもよいのです。」これはその通りです。エバさん間違っていない。けれども、エバさんは続けてこう言いました。「でも、園の中央に生えている木の果実だけは食べてはいけな

い、触れてもいけない、死んではいけないから、と神さまはおっしゃいました。」さて、この答えは正しいでしょうか。正しいように聞こえますが、間違っています。第一に、「触れてもいけない」などとはおっしゃっていません。第二に、「死んではいけない」ともおっしゃっていません。「食べると必ず死ぬ」と警告されたのです。「死ぬかもしれませんよ」というような、のんき言い方はなさいませんでした。エバさんは、神さまの御言葉に対して真剣ではなかったのです。心を注いで、真剣に聴き、そして従うのだという気持ちがあるんでいたのです。

そこを見逃さないのが、悪魔の悪知恵です。すぐに、サタン、悪魔はエバさんの心の隙間に攻め込みます。「死ぬことなんてありませんよ。神さまはその木を食べるとあなたが神さまのようになることを知っているのです、意地悪を言っておられるのです。さあ、良く見てご覧なさい。美味しいですよ。さわってご覧なさい。美味しそうでしょう。なめるだけなら、いいのじゃないかな。食べるのが駄目なら、かじってみてはどうですか。」そしてとうとう、エバさん、「ガブツ」。エバさんは心細くなったのでしょうか、一緒にいたアダムさんにも木の実を差し出しました。アダムさんも、「ガブツ」。

アダムさんとエバさん、この二人はそれまで園の中で楽しく幸せに暮らしていました。どうして楽しく幸せだったのでしょうか。それは、二人が神さまと正しい関係にあったからです。神さまとの正しい関係ってどんな関係なのでしょう。それは、神さまの御顔の方を向くことでした。自分の顔を神さまに向け

て、神さまの息を受けることでした。それは、神さまの御言葉をしっかり聞いて、それを守ることです。御言葉を守らないときには、人間は神さまとの交わり、神さまの命の息が失われてしまうのです。そうすると、どうなるのでしたか。先週、鼻をつまんでもらったでしょう。そのまま続けたら死んでしまうのでしたね。そのように、神さまとの交わり、神さまの命の息がかからない間柄、遠く離れてしまったり、背中を向けてしまったら人間は、動物のように生きていますかもしれませんが、人間らしくは生きれないのです。神さまとの正しい関係を失ったら、人間は人間以下になってしまうのです。

ある有名な牧師さんがこう言っています。「神さまとの正しい関係、神さまの御言葉を破っている人間は、動物のようになるのではなく、動物以下になっている。」とても厳しい言葉です。でも、動物は、神さまの御言葉を自由に守ることもできませんし、ですから破ることもできません。人間だけがそれをできるのです。その人間が、御言葉を破ってしまうなら、動物にも劣ってしまいますのです。

私たちは今、イエスさまによって、罪を赦していただいています。つまり、神さまとの間に正しい関係をつくっていただきました。でも、油断していると、あのアダムとエバのように、神さまの御言葉をいい加減に聞いてしまい、過ちを何度も繰り返して、神さまを悲しませてしまいます。今朝も、皆で真剣に聖書のお話を、神さまの御言葉を聞いたことを感謝しましょう。そして、神さまとの正しい関係をつくってくださったイエスさまに感謝して、イエスさまを信じ続けましょう。

〔今日の暗唱聖句〕 ローマの信徒への手紙3章23～24節

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

〈ねらい〉

神さまのみことばをしっかりと聴いて、みことばを守る子どもにさせていただけるように、お祈りをささげます。

〈お話〉

きれいな花がたくさん咲いて、おいしい果物もいっぱいになっています。たくさんの鳥や動物がうれしそうに、仲良く暮らしています。みなさんは、どんな果物が好きですか。アダムさんもエバさんもおいしい果物が大好きでした。バナナ、オレンジ、ぶどう、ももいちご・・・毎日食べたい時に、食べたいだけ、仲良く食べていました。鳥も動物も、好きな果物を、分け合って仲良く食べていました。

神さまは、「ここにある果物は、どれでも好きなだけ取って食べなさい。でも、あの真ん中にある木の果物だけは、食べてはいけません。」と言いました。

ある日、エバさんのところにヘビがやって来ました。「あの真ん中にある木の果物を食べてごらん」とささやきました。エバさんには、とてもおいしそうに見えました。エバさんは、神さまとの約束をすっかり忘れてしまって、ヘビの言うことを聞いてしまいました。エバさんは、神さまのおことばより、へびのことばを信じてしまったのです。

〈暗唱聖句〉

「御言葉を守らせてください」

詩編 119:101

〈賛美〉

「うれしい あさよ」

『こどもさんびか』14番

(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 16、17、18 を参照

〈分級の流れ〉

①果物のおいしい季節です。身近な話題から上記のお話をします。神さまのおことばを信じて従いますか？ それとも、ヘビの言うことを信じますか？

②先週作った押し花をしおりにします。

製作 「押し花のしおり」

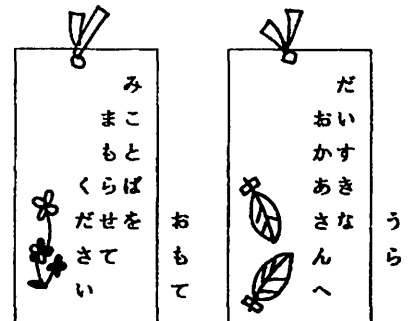
材料・・・色画用紙、リボン、透明粘着シート、あるいは薄手の和紙

・押し花に軽く接着剤をつけて、色画用紙に貼ります。その上に透明粘着シート、あるいは和紙をかぶせて、わきに教師が今日の暗唱聖句を書きます。

・お母さんへの感謝の気持ちを表すために母の日のプレゼントとして持ち帰ります。

③暗唱聖句を覚えます。

④神さまのおことばをどんな時でも信じて、神さまとの約束を守ることができるようにお祈りをささげます。



〈目標〉

最初の人間の罪について学ぶ。神の言葉に従わないことが罪である。

〈展開例〉

1. 最初の罪について考える。

①創世記2章15～17節と3章1～6節を読む。

- ・神様がアダムに与えた命令は何でしたか。
- ・蛇はエバさんにどう言いましたか。
- ・エバさんはどう答えましたか。

②神様の言葉とエバさんの言葉を比べよう。

神様の言葉・・・「食べると必ず死んでしまう」

エバの言葉・・・「死んではいけないから」
→どこが違うかを考えさせる。

神の御言葉を自分の考えに置き換えてしまっている。

③木の実を食べることがどうして悪いの？

→子どもたちに木の実を食べることがどうして罪なのかと問う。

- ・この木の実に死ぬような毒が入っていたのではない。神様の命令に背いたことが罪。
- ・食べるなどという命令は何をあらわしているのか。→「あなたはわたしに従いなさい」という神様の戒め。

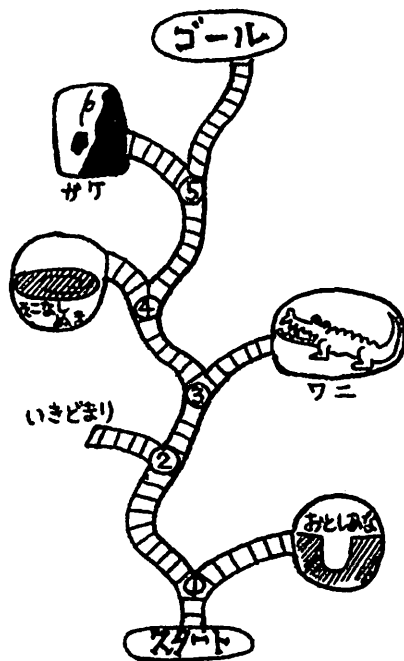
2. ゲーム「御言葉が示す道」

駒を一つ用意する。順番にサイコロをふり、進む道の分岐点で番号の御言葉を読み、どちらの道が正しいかを選んで進む。聖書を開いて調べてもよい。

ゴールの方を棒などで見えないように丸めておき少しずつのばしてゲームをする。

○分岐点の質問の例

- ①右「人は神を信じなくても生きていける」
左「信じない者ではなく信じる者になりなさい」
ヨハネ 20:27



- ②右「何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」コリントー 10:31
左「何をするにしても、自分が楽しいようにやりなさい」

- ③右「人はしよせん独りで生き、独りで死ぬ」
左「あなたがたはキリストの体であり、また一人一人はその部分です」
コリントー 12:27

- ④右「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」 マタイ 10:28
左「体が死ねばすべて終わりなのさ」

- ⑤右「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」 創世記 2:16、17
左「園のどの木からも食べてはいけない」
〈折り〉

天にいらっしゃる父なる神様。人間は神様の言葉に背いて罪を犯しました。自分の考えではなく、神様の言葉に従っていくことができるように導いてください。

〈ねらい〉

人間の罪の起源を学ぶ。罪は最初の人間からのものであり、それほど根源的であるため、私たちが自分自身ではどうすることもできない問題ともいえる。また、罪が私たちの苦しみや死の起源になっていることも学ぶ。

〈展開例〉

1. エバとアダムは、どうして神様のご命令に背いて園の中央の木の実を食べたのだろうか。

→いろいろな考えられるが、へびが言った「目が開け、神のように善悪を知るものとなる・・・」を受けて、実を食べたとする理解は重要だろう。「神のようになる」は、文字通り神のようになるということではなく、神を離れて生きるもの（つまり自分を神とすること）となることを意味しているのだろう。「善悪を知る」は、道徳的な向上というより、人間の分を超えて全てを知るといふ思い上がりを示しているのではないか。つまり、アダムとエバは実を食べることによって、神様から独立した者になる道を選び取ったと理解される。

2. 「目が開け」て見えたものは何だったのだろうか。

→自分たちの裸の姿。それは神から離れた人間の、無力な、恥ずべき姿ではないか。人間が「神のようになる」ことなど、あり得ないことを示している。その無力な様は、神様に背き、罪の中にある人間の姿ではな

いか（参考、ウ小教理問 17～19、子どもカテキズム問 17）。

3. エバについて「ついに、これこそわたしの骨の骨・・・」と言っていたアダムが、ここではだいぶ違う言葉を言っている。聖書の言葉からそれを探してみよう。

→「あなたがわたしとともにいるようにしてくださいました女が・・・」。それは、自分の過ちを女のせいにならうとする（さらには女をつくられた神様のせいにならうとする）態度。

4. アダムとエバが神様のご命令に背いたためにもたらされた結果は何だっただろう。→労働の苦しみ、出産の苦しみ、死。つまり悲惨な人生。それは、アダム、エバだけでなく、その全ての子孫に及ぶ（ウ小教理問 16、子どもカテキズム問 20）。罪を犯したアダムとエバはエデンの園を追われる。そのような彼らに神様は皮の衣を着せられ、憐れんでくださった。

5. 15節の意味を想像してみよう。

→へびを嫌う人間の心理の起源が示されているともとれる。しかし、教会は、女の子孫として生まれられるイエス様が、やがてサタンを砕き、人に救いをもたらしてくださることを示していると考えてきた。イエス様を信じ、救いに入れられた者の人生は喜びの人生へと変わる（小教理問 20、子どもカテキズム問 21）。

ねらい

人間は失敗や挫折を体験するが、それでおしまいでなく、再生ややり直しが可能であることを理解させる。

展開例

登山道路のガードレールは自動車にとって自由を制限するものなのか、それとも安全運転に必要なか、を考えながら、神の律法は人間を不自由にするかどうか、考えてみる。

間違った自由意志によって世界に悪が始まった人間の惨めさについて考える。

良心の呵責の意味について考えてみよう。

話し合ってみよう!

学校の規則は何のためかを話し合おう。
自分勝手な人間にならないために何が必要か話し合ってみよう。

祈り

神様に従う善い心を与えてください。

○暗唱聖句○

ローマ 3:23-24

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 創世記 3章 1～7節
- 月 創世記 3章 8～19節
- 火 創世記 3章 20～24節
- 水 詩編 51編 1～4節
- 木 詩編 51編 5～11節
- 金 詩編 51編 12～15節
- 土 詩編 51編 16～21節

☆三二日記☆

テキスト 創世記 12章1～9節

〈一般史からイスラエル史へ〉

創世記は11章までと12章以降との間で大きく区切られます。11章までは天地創造と人間の墮落について記されていました。ここまではおおまかに言って被造世界全体の歴史が射程に入っていたと言えます。

一方12章からは、いよいよ特定の民に焦点が絞られます。すなわち神の選びの民イスラエルの歴史へと移っていくのです。ここからは新約のイエス・キリストへと至る恵みの契約の進展の歴史が叙述されていくことになります。

そしてその幕開けとも言えるのが、信仰の父アブラハムの召命の物語です。

〈命令と約束〉

神は生まれ故郷カルデアのウルにいたアブラハム（「アブラハム契約」が締結される17章までは「アブラム」）を、ご自身の恵みの主権にもとづいてお召しになります。神のアブラハムへの呼びかけは、命令と約束をともなうものでした。

命令は「生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」(1)というものでした。神はアブラハムに、信仰によるみ言葉への服従をお求めになりました。

これにともなう神の約束は、彼の子孫を大いなる民とすること、そして彼を祝福の源とし、彼の子孫によって地上のすべての民を祝福する(2-3)というものでした。

〈信仰によって旅立つ〉

神の約束は以上のように驚くべき大いなる祝福の約束でしたが、神の呼びかけはアブラ

ハムにとっては、苦悩をともなう決断を迫るものでもありました。

第一に、彼は生まれ故郷を捨てなければなりませんでした。第二に、それまでなじんでいた生活を捨て、家族と別れなければなりませんでした。第三に、神はこの信仰の旅の経路や終着点をいっさい明らかになさいませんでした。第四に、彼はこのときに75才という高齢でした。新しい旅へと出ていける年齢ではありませんでした。

さらに、75才になってアブラハムと妻との間には、子供がいませんでした。その彼に神は子孫を増やすと仰せになったのです。

聖書は神の召しを受けたとき、アブラハムがどれほど躊躇し、苦悩したのかについてはひとことも記していませんが、彼がみ言葉の前に大いに悩み、考え抜いたであろうことは想像にかたくありません。

しかし聖書は、伝えるべき重要な事実のみを簡潔に記します。「アブラムは、主の言葉に従って旅立った」(4)。

この一言に、信仰者の生涯のありようというものがまさに凝縮されているのではないのでしょうか。結局のところ私たちの信仰の生涯は、神が語られ、私たちが神の祝福を信じ、信仰をもってみ言葉にこたえる、この単純な営みでなみな尽きるのではないのでしょうか。そして、私たちの生涯にあつて最後まで残り続け、神に覚えられ続けるのは、このシンプルな軌跡ではないのでしょうか。

イスラエルの歴史の冒頭に、このアブラハムの信仰による旅立ちが描かれていることの意義ははかり知れないものであると思います。

テキスト 創世記 12 章 1 ~ 9 節

〔単元のねらい〕

アブラムの選びと召命の意味を教えます。アブラム、そしてイスラエルが選ばれたのは、彼らが特権階級的な選民となるためではなく、「祝福の源」となるためでした。神の恵みと祝福とを彼らが一人占めし、独占するためではなく、彼らを通して世界中の人々へと神の恵みと祝福が分かち与えられていくことが、選びの目的なものでした。彼らは、神の恵みを分かち与えるための通路に他なりません。そのためにアブラムは神の召しを受け、それに従うのです。

「みんなの祝福の源となったアブラム」

今朝は、とってもすてきなプレゼントをもらったお友だちのことを一緒に考えてもらいましょう。〇〇君は、学級委員長でした。そのクラスには 35 人のお友だちがいましたが、男子はたったの 9 人で、残りの 26 人は女の子でした。このクラスはクラス発表会でとてもすばらしい器楽演奏をしたので、校長先生はとても喜び、このクラスに特別なご褒美をあげることにしました。それは、ポケモンや犬夜叉、名探偵コナンといった、みんなが大好きなキャラクターが入っている文具セットで、だれもがほしがるような、すてきなものでした。校長先生は、これをクラスみんなに分けるようにと、学級委員長の〇〇君に渡したのですが、〇〇君はどうしたのでしょうか。〇〇君は、校長先生からもらったものが、とてもすてきなもので、みんなで分けるのが惜しくなりました。そこで男子たちだけで、分け合うことにしたのです。女の子たちは一人も、校長先生からのすてきなプレゼントをもらいませんでした。みんなは、このことをどう思いますか。

神さまは、すべての人たちが神さまの祝福と恵みにあずかることができることを心から願

い、それをみんなと分かち合うようにと、ある人々にあずけられました。それがアブラムという人であり、彼から生まれたイスラエルという人々でした。神さまは、このアブラムとイスラエルをととても愛し、祝福されたのですが、それはただアブラムとイスラエルだけではなくて、アブラムとイスラエルを通して、世界中の人々が神さまの祝福と恵みにあずかるようにするためでした。そしてそのために神さまは、ご自分の祝福と恵みを、まずアブラムとイスラエルの人々におあずけになられたのです。だからイスラエルの人々は、神さまからの特別な祝福と恵みをたくさんいただきました。しかしそれは、イスラエルの人々が神さまの祝福と恵みを一人占めし、独占するためではなくて、それを世界中の人々へと分かち与えるためでした。そのように、神さまの祝福と恵みをみんなに分かち与える働きをするために、神さまはアブラムを選び、これからどこに行くとしても、神さまが示される場所に、神さまを信頼して、神さまに従ってくるようにと、呼び出されたのです。ここでアブラムが、神さまと出会い、神さまから呼び出され、神さまの後に従って、旅を始めていったのは、アブラムが「祝福の源」(3 節)となる

ためでした。神さまの祝福は、まずアブラムに与えられ、アブラムを源として、すべての人々へと神さまの祝福が分かち与えられていくのです。こうして地上のすべての人々は、アブラムによって神さまの「祝福に入る」(3節、18章18節、22章18節、26章4節、28章14節、使徒3章25節、ガラテヤ3章8節)ことができるようになるのでした。

アブラムは、この神さまからの約束を信じ、神さまから与えられた働きを忠実に果たすために、命じられたとおり、自分が慣れ親しんだ土地を離れて、神さまについていきました。そのためには、親しくしていた親戚の人たちや、大切な友だちとも別れなければなりませんでしたが、「アブラムは、主の言葉に従って旅立っていったのでした(4節)。アブラムは神さまに「服従し、行き先も知らずに出発したのです」(ヘブライ11章8節)。まわりが敵だらけの厳しい荒れ野で、これまでアブラムたちをかばって来てくれた親戚の人たちや友だちはいません。しかし、これからは神さまがアブラムと共にいて、守ってくださるのです。アブラムは、その神さまを信頼し、神さまの約束を信じて、出て行ったのでした。

実は、ここで世界中の人々に神さまの祝福と恵みを分かち与えるために選ばれた、アブラムの子孫とは、ずっと後にお生まれになる「ア

ブラハムの子(子孫と言う意味)ダビデの子、イエス・キリスト」(マタイ1章1節)のことなのです。神さまは、ここで「アブラハムとその子孫に対して約束を告げられましたが、その際、多くの人を指して『子孫たちとに』とは言われず、一人の人を指して『あなたの子孫とに』と言われていました。この『子孫』とは、キリストのこと」(ガラテヤ3章16節)なのでした。ここでアブラハムとイスラエルの人々に与えられた神さまの約束は、世界中の人々のためのもので、アブラムの子であるイエス・キリストによって、今や世界中の人々が神さまのすばらしい祝福と恵みにあずかることができるようにされたのでした。イエス・キリストによって与えられる神さまのすばらしい祝福と恵みとは、ただ地上の上での幸いのことだけではなくて、永遠の命と永遠に神さまからいただける幸いのことなのです。わたしたちが天国に入れていただけるために、神の子イエスさまは人間となり、アブラハムの子としてお生まれくださいました。わたしたちのイエスさまこそ、アブラハムに約束された「祝福の源」なのです。わたしたちも、神さまのすばらしい祝福をいただくことができるように、「祝福の源」であるイエスさまに、しっかりとつながっていきましょう。そして、イエスさまから豊かに神さまの祝福をいただいたあなたが、今度はお友だちのための「祝福の源」となってください。

〔今日の暗唱聖句〕 創世記12章2節

わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、
あなたの名を高める。祝福の源となるように。

〈ねらい〉

アブラハムが、神さまのことばに従ったように、まっすぐな心で神さまに従うことができるよう、感謝をもって祈りましょう。

を出て、カナン^①の国へ行きなさい」と、おっしゃいました。アブラハムはびっくりしましたが、神さまのおことばどおりに、長い旅に出ることに決めました。

〈お話〉

アブラハムさんは、家族と、そして、たくささんの動物たちと暮らしていました。羊・牛・ろば・らくだ・やぎ・・・など、とてもにぎやかです。牛や、やぎはとても美味しいお乳をたくさん出してくれますし、羊のあたたかい毛で、着るものや布団を作ります。ろばや、らくだは丈夫な足で、人や荷物をたくさん運んでくれます。

ある日、神さまはアブラハムに、「この町

〈暗唱聖句〉

「アブラハムは主を信じた。」

創世記 15:6

〈賛美〉

「主にしたがいゆくは」

『こどもさんびか』53番

(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 37、38 を参照

〈分級の流れ〉

①「聖書物語」などの絵本でアブラハムの物語の絵を見せた後、上記のお話をします。

②元気よく賛美 (#53) をささげた後、暗唱聖句を覚えます。

③製作 「なぞなぞすごろく」☆☆☆

- ・アブラハムは、家族や動物と、遠い旅に出ました。ことばのなぞなぞをしながら、カナンの国を目指します。
- ・自分のコマを作ります。すごろくのマスに入る大きさであれば、なんでもかまいません。アブラハム人形や、いっしょに旅をした動物でもいいですね。
- ・次に、協力して三つのサイを作ります。どんな絵柄でもいいです。子どもの手で握れるくらいの小さな丸い厚紙(直径2センチ位)に一個ずつ絵柄を描きます。裏には何も描きません。
- ・「なぞなぞすごろく」のすごろく盤は、105ページをご覧ください。
- ・「なぞなぞの部屋」は黄色、「一回休み」や「もどる」などは水色など、色分けしてぬります。

④さあ、準備ができました！ 来週を楽しみに。

お祈りをささげて、わかれます。

〈展開例〉

昔々、アブラムという人がいました。お父さんが死んだために、アブラムの一家は、奥さんのサライと甥のロトだけとなりました。でも、アブラムの家は、お金持ちでしたから、羊ややぎなどをたくさん持っていましたし、羊ややぎの世話をするためにたくさんの人を雇っていました。

そんなある日、神様は、アブラムに語りかけられたのです。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい（1節）」。

「生まれ故郷」を離れるのは、だれでもいやですね。お父さんの転勤で、違うところへ引っ越ししなければならなくなったら、みんなだったらどう思う。第一に友だちと別れたくないね。知らない学校に行って、新しい友だちができるかなあ。どんな家に住むのかなあ。いろいろ心配があるよね。

しかも、神様は、アブラムに「わたしが示す地に行きなさい」とおっしゃるだけで、どこへ行っていいのかも教えておられません。みんなだったら、どうする？

「行き先もわからないし、何があるかわからない。そんな所には行きたくない」って神様にお祈りするかなあ。しかも、アブラムは、もう75才にもなっていました。旅をするだけでも大変な年齢です。

でも、神様は、さらに、こうおっしゃいました。「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝

福の源となるように（2節）」。

「祝福の源」って、わかるかなあ。

みんな知っているかなあ。川を、ずっとずっとさかのぼっていくと、だんだん川の幅も少なくなり、水も少なくなって行きます。さらに、さかのぼって行くと、ちよろちよろつと、水がわき出ている所に着きます。もう、その先はありません。そういう場所を川の源と言います。

今、世界中には、たくさんの教会と主イエス様を信じているたくさんの人々がいます。でも、ずっとずっと昔にさかのぼっていくと、アブラムのところまで行くのです。アブラムから始まって、ダビデ、そして主イエス様。この主イエス様によって教会が全世界に広がっていくのです。

アブラムは、神様のお言葉通りにしました。そこにアブラムが神様を信じているということがあるんですね。神様を信じるということとは、神様のお言葉通りにするという事柄ですね。アブラムが神様のお言葉通り、カナンという土地にまで行きますと、神様は「あなたの子孫にこの土地を与える（7節）」とおっしゃいました。そこが神様の約束された所だったんだね。でも、まだ、たくさん問題があるます。第一、跡を継ぐ子どもがいませんね。第二に、カナンの地には、他の人たちがたくさん住んでいます。神様は、どのようにして、アブラムに約束をはたしてくださるのでしょいか。来週のお楽しみです。

〈ねらい〉

アブラハムの召命物語の意味を、1) 神様による神の民の創造と、2) 個人への召しとそれに対する応答、の両面から学ぶ。

〈展開例〉

1. アブラハムは突然に神様のお声を聞いている。その言葉の意味ははっきりとしたものだった。私たちも、そのように神様のお声を聞くことがあるだろうか。

→アブラハムのようなしかたで神様のお声を聞くことはないだろう。でも、礼拝で説教をきくとき、神様が私たちに、はっきりと語りかけてくださる。教会の皆に向かって、また、私たち一人一人にも。

2. アブラハムに対して与えられた神様の祝福の約束の内容は何だろうか。12章1～3節の箇所から探してみよう。

→ 1) あなたを祝福する、2) 地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。「あなた」はアブラハムだけでなく、その子孫も含まれている。地上の人々がアブラハムの子孫を通して神様の祝福を受けることは、後のヨセフ物語でエジプトに与えられた祝福でも明らかになる。

3. この物語の直前にはバベルの塔の物語がある。その出来事は人類が全地に散らされるところで終わる。今日の聖書の箇所との関係を想像してみよう。

→アブラハムの物語は、バベルの塔の話と反対に、人々が集められるイメージがある。つまり、神様によって新たにご神様の民が創造され、集められるイメージ。さらに、アブラハムとその子孫を通して、世界に散らばった人々に神様の祝福が広げられる。私たちも（信仰による）アブラハムの子孫であり、神様は世界に祝福を与えるために私たちをお用いになられる。（神様によって集められる人々は、しかし、バベルの塔の場所に戻るのではなく、神様との正しい関係の中に戻る。つまり、神の国。）

4. アブラハムはなぜウルを、そして後にハランを出たのだろうか。

→参考=ヨシュア 24:2、ヘブライ 11:8。

5. アブラハムのした「主の言葉に従って旅立つ」（12:4）という経験を、私たちもするだろうか。するとすればどういうときに、どうやってだろう。

→私たちの人生の中の大きな決断や、小さな決心においても、み言葉によって導かれることを思うべき。

〈展開例〉

昔々、アブラムという人がいました。お父さんが死んだために、アブラムの一家は、奥さんのサライと甥のロトだけとなりました。でも、アブラムの家は、お金持ちでしたから、羊ややぎなどをたくさん持っていましたし、羊ややぎの世話をするためにたくさんの人を雇っていました。

そんなある日、神様は、アブラムに語りかけられたのです。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい（1節）」。

「生まれ故郷」を離れるのは、だれでもいやですね。お父さんの転勤で、違うところへ引っ越ししなければならなくなったら、みんなだっただろうと思う。第一に友だちと別れたくないね。知らない学校に行って、新しい友だちができるかなあ。どんな家に住むのかなあ。いろいろ心配があるよね。

しかも、神様は、アブラムに「わたしが示す地に行きなさい」とおっしゃるだけで、どこへ行っていいのかも教えておられません。みんなだったら、どうする？

「行き先もわからないし、何があるかわからない。そんな所には行きたくない」って神様にお祈りするかなあ。しかも、アブラムは、もう75才にもなっていました。旅をするだけでも大変な年齢です。

でも、神様は、さらに、こうおっしゃいました。「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝

福の源となるように（2節）」。

「祝福の源」って、わかるかなあ。

みんな知っているかなあ。川を、ずっとずっとさかのぼっていくと、だんだん川の幅も少なくなり、水も少なくなって行きます。さらに、さかのぼって行くと、ちよろちよろっと、水がわき出ている所に着きます。もう、その先はありません。そういう場所を川の源と言います。

今、世界中には、たくさんの教会と主イエス様を信じているたくさんの人々がいます。でも、ずっとずっと昔にさかのぼっていくと、アブラムのところまで行くのです。アブラムから始まって、ダビデ、そして主イエス様。この主イエス様によって教会が全世界に広がっていくのです。

アブラムは、神様のお言葉通りにしました。そこにアブラムが神様を信じているということがあるんですね。神様を信じるということとは、神様のお言葉通りにするということなんですね。アブラムが神様のお言葉通り、カナンという土地にまで行きますと、神様は「あなたの子孫にこの土地を与える（7節）」とおっしゃいました。そこが神様の約束された所だったんだね。でも、まだ、たくさん問題があるます。第一、跡を継ぐ子どもがいませんね。第二に、カナンの地には、他の人たちがたくさん住んでいます。神様は、どのようにして、アブラムに約束をはたしてくださるのでしょうか。来週のお楽しみです。

〈ねらい〉

アブラハムの召命物語の意味を、1) 神様による神の民の創造と、2) 個人への召しとそれに対する応答、の両面から学ぶ。

〈展開例〉

1. アブラハムは突然に神様のお声を聞いている。その言葉の意味ははっきりとしたものだった。私たちも、そのように神様のお声を聞くことがあるだろうか。

→アブラハムのようなしかたで神様のお声を聞くことはないだろう。でも、礼拝で説教をきくとき、神様が私たちに、はっきりと語りかけてくださる。教会の皆に向かって、また、私たち一人一人にも。

2. アブラハムに対して与えられた神様の祝福の約束の内容は何だろうか。12章1～3節の箇所から探してみよう。

→ 1) あなたを祝福する、2) 地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。「あなた」はアブラハムだけでなく、その子孫も含まれている。地上の人々がアブラハムの子孫を通して神様の祝福を受けることは、後のヨセフ物語でエジプトに与えられた祝福でも明らかになる。

3. この物語の直前にはバベルの塔の物語がある。その出来事は人類が全地に散らされるところで終わる。今日の聖書の箇所との関係を想像してみよう。

→アブラハムの物語は、バベルの塔の話と反対に、人々が集められるイメージがある。つまり、神様によって新たにご神様の民が創造され、集められるイメージ。さらに、アブラハムとその子孫を通して、世界に散らばった人々に神様の祝福が広げられる。私たちも（信仰による）アブラハムの子孫であり、神様は世界に祝福を与えるために私たちをお用いになられる。（神様によって集められる人々は、しかし、バベルの塔の場所に戻るのではなく、神様との正しい関係の中に戻る。つまり、神の国。）

4. アブラハムはなぜウルを、そして後にハランを出たのだろうか。

→参考=ヨシュア 24:2、ヘブライ 11:8。

5. アブラハムのした「主の言葉に従って旅立つ」（12:4）という経験を、私たちもするだろうか。するとすればどういうときに、どうやってだろう。

→私たちの人生の中の大きな決断や、小さな決心においても、み言葉によって導かれることを思うべき。

ねらい

親からの自立や分離には何が必要か。アブラハムの信仰の出発から学ぶことができる。

話し合ってみよう！

精神的独立をするためには何が必要なのか話し合ってみよう。

展開例

「召命（呼びかけ）calling」には「職業」という意味があります。この由来について考えてみましょう。神の呼びかけに応えていくうちに責任ある仕事へと発展してゆきます。

アブラハムの生涯を信仰者のモデルと考えて自分自身の生き方に適用してみましょう。

祈り

主の促しに应答する人生を送らせてください。

○暗唱聖句○

創世記 12:2

○祈りの課題○

聖書日課

日 ヘブライ 11章 1～3節
月 ヘブライ 11章 4～7節
火 ヘブライ 11章 8～12節
水 ヘブライ 11章 13～16節
木 ヘブライ 11章 17～22節
金 ヘブライ 11章 23～31節
土 ヘブライ 11章 32～40節

☆三二日記☆

テキスト 創世記 15章 1～21節

アブラムへの神様からの約束が記されている箇所です。

(1) 揺れる信仰(1-4)

アブラムが、主の召しに応じてカナンの方に移住してきてから、すでに何年も経過しました。主から召命を受けたとき、アブラムには子孫の繁栄の約束が与えられました。しかし、サライが不妊であることは変わらず、子が与えられませんでした。アブラムは神様の約束があるにも関わらず、恐れを抱き、将来に対して期待をもてず何も変わりはないと考えていたのかもしれませんが。そのことをアブラムの言葉から知ることができます。

そのアブラムに対して主は「恐れるな」と呼びかけられます。これは、恐れに駆られていたアブラムをうち砕く言葉でありました。信仰的に揺れていたであろうアブラムに対して、神様は「恐れるな」との力強い言葉を語られ、あらためて約束を神様はアブラムに与えられました。彼の跡嗣ぎはアブラムの血を継ぐ、彼自身の子でなければならないという、神様のご計画です。その約束の成就を待ち望むようにと、忍耐が求められました。

(2) 信仰によって義とされる(5,6)

主は、御自身のご計画を明らかにされた後、アブラムを外へと連れだし、天の星々を見せて、「あなたの子孫はこのようになる」とおっしゃいました。この天の星はしるしであり、彼はそれを見て信じたと言われています。

それは、文字どおり天の星を見て信じたというのではなく、天の星々を見て、神の御言葉を聞いたとき、アブラムが、神が神であることを悟り、信じたということでしょう。彼は、天の星々を造られた創造主なる神の御

前にへりくだり、約束を受け入れたのです。それは、アブラム自身がそこに到達したということではなく、神様から与えられた奇跡と言うべきです。それが彼の義と認められた信仰であり、また、私たちに与えられる信仰でもあります。

(3) 契約のしるし(7-21)

土地の所有の確認と契約の締結は契約の儀式を通じて行われます。

契約の儀式は古代中近東で一般的な儀式であったようです。それは、犠牲の動物を真っ二つに切り裂いて、向かい合わせに置き、その間を約束を取り交わす人たちが、手をつないで歩くというものです。もし自分が約束を破った場合、約束を取り交わした相手から、この動物のように自分が切り裂かれて良い、文句がないということの意味したようです。

この契約の儀式が、聖書においては、契約が神の一方的な恵みであることを示すために用いられています。契約は、アブラハムが深い眠りに襲われて、何もできない状態で結ばれます。すなわち、人間の業ではないのです。そして、主なる神お一人が二つに引き裂かれた動物の間を通り過ぎられます。アブラムは通り過ぎません。こうして、主なる神がすべてを負ってくださって、一方的に契約の恵みをお与えくださるのです。

このしるしをお与えくださって、主なる神は、なお忍耐が必要とされるアブラムを励ましてくださいました。約束を保証し、励まされたのです。これは、今の私たちの聖餐の礼典に通じます。私たちは、目に見えるしるしを与えられて、信仰に堅く立つよう力づけられ、励まされているのです。

テキスト 創世記 15章 1～21節

〔単元のねらい〕

神がアブラハムに与えられた「契約」は、人間が互いに結び合う「契約」とは違います。人間の場合は、互いがある責任と義務を負い合う「双務契約」ですが、神がここでアブラハムと、そして彼をとしてわたしたちと結ばれた「恵みの契約」は、「片務契約」つまり、神だけが契約履行の責任を一方的に負い、その責任を果たすのであり、人間はそれに対して何一つ責任も義務も負うことがないという、恵み深い契約なのでした。

「神さまからの一方的な恵みの約束」

みなさんは、高い山や空気のきれいな高原に行くと、星空を見たことがありますか。街では明るくて、あまり見ることができませんが、山の上に行くと、「天の川」やきれいな星を見ることができます。アブラムがいた時代は、空気もきれいで、星が一杯見えました。神さまは、アブラムがすべての人々のための「祝福の源」となるように、神さまの祝福と恵みをたくさん与える約束をくださいました。そしてたしかに、財産はとても多くなりました。たくさんの羊や牛、山羊、お金、そして使用人たちを持つようになり、アブラムはお金持ちになりました。けれどもアブラムには心配がありました。それは、アブラムには子どもがいなかったからです。アブラムに対する神さまの約束は、「あなたの子孫に」と言われて、アブラムの子どもに受け継がれることになっていました。ところが子どもが一人もいないのです！アブラムは、神さまに尋ねました。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子どもがありません」(2節)と。子供がいなければ、神さまの祝福の約束はどうになってしまうのでしょうか。それにアブラムも、奥さんのサライも、とても年をとっていて、子供を産むことができる

とは考えられませんでした。ところが神さまは、アブラムを外に連れ出すと、約束されたのです。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」(4、5節)と。とても実現しそうにない神さまの約束を、しかしアブラムは「信じた」(6節)のでした。

そしてアブラムに、その約束が確かであることを示すふしぎな出来事を見せられたのです。アブラムの時代、とても大切な約束、契約を結ぶときには、特別な儀式をすることになっていました。それは犠牲の動物を用意し、それを真つ二つに切り裂いて、向かい合わせに置き、その間を約束を取り交わす人たちが、手をつないで歩くというものでした。それは、もし自分が約束を破った場合、約束を取り交わした相手から、この動物のように自分が切り裂かれて良い、文句がないということの意味しました(エレミヤ 34章 18節)。「契約を結ぶ」とは、契約を「切る」という言葉によるもので、このように動物の犠牲を切り裂くことに由来したのです。動物の血が流され、血が注がれることで、契約は成立したのです。

アブラムの前で行われた不思議な出来事は、この契約を結ぶことに由来します。神さまはここで、アブラムと契約を結び、それを必ず実現することを約束されたのでした。もし神さまが約束を破ったら、この動物のように神さまがアブラムによって切り裂かれても良いということです。しかも、この契約が結ばれた時、アブラムは眠ったままで（12 節）、切り裂かれた動物の間を通ったのは、神さまだけでした。「煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」（17 節）とありますが、その「煙を吐く炉と燃える松明」は、神さまを象徴するもので、神さまだけがその契約を結ばれたことを意味しました。ふつう約束というのは、二人の間で取り交わせば、その両者が約束し合うことになっています。そして片方が約束を破れば、もうその約束はだめになるのです。しかしここで神さまがアブラムと結ばれた契約（18 節）は、ただ神さまだけがアブラムに一方向的に約束し、神さまの方で必ず実現すると約束されたものでした。そこではアブラムは、何もしなくてよいのです。またアブラムが約束を破ったら、その約束も駄目になるというものではありませんでした。それが、アブラムが眠っている間に、神さまだけが動物の間を通ったということの意味なのです。神さまは、ここでただアブラム一人だけではなくて、アブラムを通してわたしたちにも、同じ約束を結んでくださいました。わたしたちが守っても守らなくても、神さまの方で

一方向的にわたしたちと契約を結び、神さまがその約束を果たし、必ず実現してくださるというものです。それが「恵みの契約」と呼ばれるもので、その内容は、「わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」というもので、それがここでアブラムに約束された、彼にたくさんの子孫が与えられ、その子孫に土地が与えられるという約束の意味なのでした。

この神さまの約束は、インマヌエル（神は我々と共におられる）と呼ばれるわたしたちの救い主イエス・キリストにおいて成就し、実現しました（マタイ 1 章 23 節）。アブラムの子イエス・キリストにおいて、神は「ご自分の民を罪から救い、そして神は「彼らの神」となり、彼らは「神の民」とされたからです。主イエスによって、神はご自分の新しい民を集め、彼らの天国という永遠の土地を与えられたのでした。そしてこの約束は、イエスさまを信じるあなたにも与えられているのです。神さまは、この約束を必ず実現して下さいます。なぜならこの「契約」は、イエスさまの血によって立てられ、結ばれた確かな契約だからなのです。

そのことを覚えるため、教会では「聖餐」をして、イエスさまの血によって、わたしたちと神さまとの間に「恵みの契約」が結ばれていることを覚え続け、感謝するのです。あなたも早く、この「聖餐」にあずかれるように、イエスさまへの信仰に励んでください。

〔今日の暗唱聖句〕 創世記 15 章 5 節

主は彼を連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

〈ねらい〉

神さまは、約束をかならず守ってくださることを、喜び感謝します。

や孫を、この星のように祝福します」とお約束されました。

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

〈お話〉

神さまのおことばどおりに出発をしたアブラハムは、家族とたくさんの動物を連れて、カナンの国にようやく着きました。

☆ ☆

☆

☆ ☆

そこで、まず最初にアブラハムは、何をしましたと思いますか？・・・神さまに感謝して礼拝をささげました。

〈暗唱聖句〉

「アブラハムは主を信じた。」
創世記 15:6

ある日、神さまは、アブラハムを外へ連れ出しました。「空の星を見てごらん。空の星の数を数えてごらんなさい」と言いました。そこには、数えきれないほどの、美しい星・星・星・・・。アブラハムは、「すばらしい星空ですね！でもわたしには、とても数えきれません。」と言いました。

〈賛美〉

「主にしたがいゆくは」
『こどもさんびか』53番
(日本基督教団出版局)

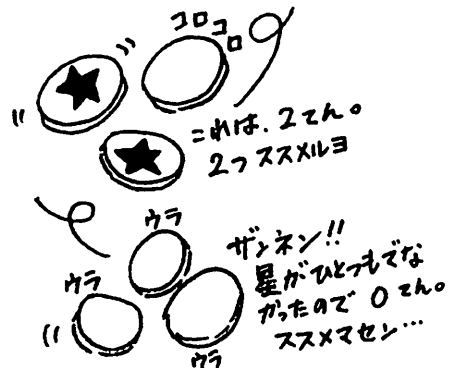
神さまは、アブラハムに「あなたの子ども

〈こどもカテキズム〉

問 37、38 を参照

〈分級の流れ〉

- ①「聖書物語」などの絵本でアブラハムの物語の絵を見せた後、上記のお話をします。
- ②暗唱聖句を復習します。
- ③ゲーム 「なぞなぞすごろく」☆☆☆
 - ・「なぞなぞすごろく」のすごろく盤は、105ページを御覧ください。
 - ・星のサイを、三ついっしょに振って出た星の合計の数だけ進みます。(裏は0)
 - ・なぞなぞの部屋で止まったら、そのなぞなぞに答えます。答えることができたなら、さらに、二つ進むことができます。
 - ・クラスの子どもの年齢によって、なぞなぞとすごろく盤の内容を調整してください。
- ④楽しく遊んだ後、賛美 (#53) して、お祈りをささげてわかれませう。



〈展開例〉

この前の創世記 12 章 7 節の神様の御言葉の中で、カナンの土地を「あなたの子孫に……を与える」と神様はおっしゃいましたね。でも、アブラムには、子どもがなかったよね。アブラムがハランを出発したのが、75 才の時だったね。もうかなりのおじいさんだね。その時、奥さんのサライは 65 才でした。しかも、サライは子どもの産めない身体だったんです。じゃあ、神様が約束しておられるように「あなたの子孫に……〔カナンの土地〕を与える」ことなど、本当にできるのでしょうか。アブラムは、悩みました。

そんな時、神様は、再び、アブラムに語りかけられました。「恐れるな、アブラムよ。／わたしはあなたの盾である。／あなたの受ける報いは非常に大きいであろう（1 節）」。

アブラムは、奥さんのサライには、子どもが産めないことを知っていました。子どもがなければ、自分の財産は、全部ダマスコのエリエゼルのもになってしまうと神様に訴えました。そればかりか、神様が「祝福の源」になると約束してくださったことも、みんな果たされません。どうしたらよいのでしょうか。アブラムは、このように神様に悩みを打ち明けました。

神様は、アブラムを外に連れ出し、空を見上げさせました。空には、きらきら光るたくさん星が輝いています。真っ暗で、空気の良い所では、私たちには見えない星もたくさん見えるそうです。そんな多くの星を数

えることはできません。神様は「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」。……「あなたの子孫はこのようになる」。このようにおっしゃいました。本当に神様の約束通りになるのでしょうか。しかし、アブラムは、神様の言葉を信じたのです。6 節を見てご覧なさい。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」とあります。

でも、神様は、この時は特別なこともなさったのです。次の日のことでしょうか。神様は「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい」とアブラムにおっしゃいました。そして、アブラムは、神様のおっしゃる通りに、山鳩と、鳩の雛以外は、真っ二つに切り裂いて並べました。アブラムは、神様が何をなさるのだろうか、と思いながら、禿げ鷹から供え物を守っていました。夜になった時「突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」のです。この「煙を吐く炉と燃える松明」は、神様ご自身を表わしています。神様が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎられたのです。神様は、もしご自分が約束を破ったら、この動物のように引き裂かれてもよいという意味があったのです。

こうして、神様はアブラムへの一方的な祝福をお約束になりました。アブラムの子孫を星の数のように、数えられないくらい多くすると約束なさったのです。

〈ねらい〉

アブラハムに与えられた契約の祝福が、神の民全体への祝福としての大きな広がりがあること、また、私たちも信仰によるアブラハムの子孫であることを学ぶ。

〈展開例〉

1. マタイによる福音書では最初にイエス様の系図が記されているが、それはアブラハムから始まる。どうしてアブラハムからなのだろうか。

→神様はアブラハムとその子孫ご自分の民とし、彼らをとおして全世界を祝福される約束をしてくださった。その系図の中に、真の祝福の基であるイエス様がお生まれになった。

2. アブラハムに多くの子孫が与えられるということ(15:5)が祝福である、とはどういうことか。

→アブラハムが大勢の子孫を持つということ自体が神様の祝福。しかし、それ以上に、この約束には神様によって選ばれた多くの民が起こされるという、大きな祝福がある。

3. 今はアブラハムの子孫はどこにいるのだろうか。

→肉による子孫としてのイスラエル民族についてはマタイ 3:9 を参照せよ(ただし、ローマ 11:25 からの箇所も大切で、ユダヤ人否定にならないように注意)。信仰による子孫についてはガラテヤ 3:29 を参照せよ。

4. 「この土地を与え、それを継がせる」(15:7)との約束の土地とは何を意味するのだろうか。

→直接にはカナン(パレスチナ)の地。この約束は、後に捕囚や亡国を経験したイスラエルの人々にとっては、大きな希望となったのだろう。また、その地に住んでいるときには、自分たちが祝福の中に置かれていることの証拠でもあっただろう。しかし、ヘブライ 11:16 では、アブラハム(と彼の子孫)が真に望んだ約束の地は地上のものではなく、天の故郷であったことを記す。

ねらい

信仰の道を歩み出すとき、神さまはさらに約束を確認して、歩みを導いてくださる契約の神であることを学ぶ。

話し合ってみよう!

契約関係を結ぶためには何が求められているのか話し合ってみよう。

展開例

将来への不安や悩みが出たときには、祈りによって、神さまに問い、尋ね、確認することができることを、アブラハムの例から教えられる。

神さまの側で、決意と自己犠牲を含めて契約の確認がされている点に注目しよう。

祈り

神さまに信頼する心を与えてください。

○暗唱聖句○

創世記 15:5

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 創世記 12 章
- 月 創世記 13 章
- 火 創世記 14 章
- 水 創世記 15 章
- 木 創世記 16 章
- 金 創世記 17 章
- 土 創世記 18 章 1 ~ 15 節

☆三二日記☆

テキスト 創世記 21章 1～8節、22章 1～19節

〈イサクの誕生(21:1-8)〉

主なる神は、アブラハムに息子が生まれると約束しておられました(12:2, 15:4)。また、イシュマエルが与えられましたが、妻サラを通して生まれる男の子が約束の息子であると、主なる神は予告されました(18:10)。

ここでは、この出来事が神の約束の成就であることが強調されます(21:1, 2, 4)。イサクの誕生は、約束の成就であり、神の御業です。アブラハムとサラは年老いており、このことは人間的には不可能に思えることでした。アブラハムは、主なる神への信頼と、神の御業を待ち望むことを学んだのです。

〈神への信頼(信仰)〉

アブラハムは、息子イサクを焼き尽くす献げ物としてささげるよう、命じられます。親にとって自分の子どもを取り去られることは、自分の命を失うこと以上に苦しく悲しいことです。イサクが「あなたの愛する独り子」(22:2)と呼ばれることによって、神の命令の厳しさがいっそう強調されています。

アブラハムの心の内には、多くの葛藤があったはずですが、御言葉は、アブラハムが神に従順に従ったことのみを語ります。このことは、かえってアブラハムの信仰の決断を鮮やかに示しています。信仰とは決断でもあります。アブラハムは、ただ神のみを信頼して、神に従う決断をしたのです。1節で、神が「アブラハムよ」と呼びかけてアブラハムが「はい」と答えたこと、これは実に象徴的ですが、神とアブラハムの間の信頼関係(信仰)を印象深く示しています。

このアブラハムの神信頼(信仰)に基づいて、イサクは父アブラハムを信頼し、神を信

じて依り頼んでいました(22:8)。御言葉はイサクの心の内についても沈黙していますが、イサクも神信頼(信仰)において、アブラハムと心を一つにしていたと思われる。

〈神への献身の姿〉

主なる神が求められたことは、心からの信仰を表す献身、自分のすべてをささげる献身ということです。信仰と献身の表明として、アブラハムには愛する独り子イサクをささげることが求められました。イサクにとっても、自らをささげる献身が求められました。この出来事は、「神が備えてくださる」(22:8)という信仰の告白であり、またアブラハムとイサクの主なる神への献身なのです。

そして、このような献身の姿は、人間的には不可能と言わざるを得ません。主なる神が、アブラハムとイサクに、このような献身の姿を呼び起こされたのです。この献身は、人間の業ではなく、主なる神のくすしい御業です。ですから、この御言葉を通して学ぶべきことは、神を畏れる者に与えられる献身の姿です。主なる神は、真実に神を神とし、神を信じ畏れる者に、このような自らをささげ尽くす献身の姿をお与えになるのです。「主なる神はほむべきかな」。そう讚美すべきです。

〈主イエス・キリストを指し示す〉

この出来事は、主イエス・キリストのみわざを指し示しています。父なる御神は愛する独り子を惜しむことなくささげてくださり、また贖い主イエス・キリストはご自身の命をささげて私たち罪人を罪から贖い取ってくださいました。キリストの徹底的な従順と献身が、私たちの従順と献身を呼び起こします。私たちも自らを主にささげて歩むのです。

テキスト 創世記 21章 1～8節、22章 1～19節

〔単元のねらい〕

イサク奉獻の物語は、聖書の神とその信仰の本質の究極の啓示である。それだけに、聖霊によって新しくされ、信仰の真理に目が開かれない者であれば、躓きと誤解を与える以外にない。説教者は、ここで神の言葉への絶対的な服従以外に神信仰は成り立たないこと。しかし同時に、服従を命じられる神は、摂理の神であり、御自身が御子イエス・キリストをお与えくださった自らを犠牲にする愛の神であることを物語る。なお、この説教では、子イサクの視点から、親の信仰生活を考えさせてみる試みをしている。

「イサクをささげる信仰」

神さまは、もうすっかり年をとっていたアブラハムと妻のサラさんの間に男の子が与えられると言う約束を下さいました。そして、本当に、待ちに待ったその日、信じられなかったその日がやってきたのです。神さまのお力とお約束で、本当に元気な男の子、イサクちゃんが生まれたのです。二人はもう嬉しくて嬉しくて飛び上がって喜びました。

こうして生まれたイサクは、すくすく元気に大きくなりました。アブラハムもサラもイサクを見ているだけで嬉しく、いつもニコニコです。そして「ああ、私たちの真の神さまですばらしい方だなあ。約束してくださったことは必ず実現される真実で、どんなことでもすることのできる力ある神さまだなあ。」こんな感謝の心でいっぱいでした。

しかし、そんな幸せなアブラハムに突然、神さまの驚くような命令が下りました。「あなたの愛するたった独りの子ども、イサクをモリヤの山でわたしのために焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」いったいこの時、アブラハムの心は、どんなであったでしょう。これまで、ずっと神さまに従ってきたつもり、失敗もあつ

たけれど、神さまは愛の神さまで、自分達を裏切ったり、嘘をついたり、無視したりなど一度もなさらなかった、真実の神さまだった。でも、その神さまが、神さまが約束して与えてくださったイサクを殺して焼いてしまいなさい、神さまへのささげものとしなさいと命じられなんて……。いったい何を考えておられるんだろう。神さまはおかしいのではないか。いや、私が聞き間違えたのではないか。そんなことをお命じになるような神さまではないはずだ……。」心はあっちへ行つて、またこっちへ戻つて、苦しくて苦しくて仕方ありません。けれども、アブラハムは、次の朝早く立ち上がつて、神さまの命じられるとおりに、従うことを決心しました。

ろばの背中に薪を乗せ、二人の手伝いの若者とモリヤの山を目指します。そして、神さまに導かれるまま、アブラハムとイサクは、神さまを礼拝するために二人だけで山に登って行ったのです。どこを見渡しても、小羊はありません。イサクは不思議に思つてお父さんに尋ねました。「わたしのお父さん。」「焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」アブラハ

ムは答えました。「わたしの愛する子よ。小羊はきつと神さまが備えてくださる。」こうして、二人は礼拝の場所に着きました。ところが、どうでしょう。アブラハムは祭壇を築いて薪を並べると、イサクを縛ってしまったのです。

イサクは、お父さんが自分を献げ物にしてしまうことをそこで初めて知りました。イサクさんは、どんな気持ちでいたのでしょうか。いつも、「お前は神さまによって与えられたのだ。本当に嬉しいよ。お前も、神さまに感謝しなさい。信じて従いなさい」と言っているお父さんです。だから、イサクもお父さんのするままに、縛られて行きます。

そして、アブラハムは愛する独り子に刃物を振り下ろそうとします。ちょうどその時、天から主のみ使いが仰いました。「その子に手を下すな。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かった。あなたは自分の独り子すらわたしにささげることを惜しまなかった。」そこで、アブラハムが辺りを良く見てみるとなんと、木の茂みに一匹の雄羊が角をとられて動けなくなっていました。そこで、アブラハムはすぐにその雄羊を準備した祭壇で献げ物としたのです。

何故、神さまはこんな厳しい命令をなさったのでしょうか。こんな命令を受けたのは、後にも先にもアブラハムだけです。神さまはアブラ

ハム選んで、神さまを信じるってどんな事なのか、神さまはどのようなお方なのかを教えてください。神さまに従うって言うことは、自分がこうしたい、こうなりたいからそのために神さまに従うと言うような事とは全く違います。皆の中で、お父さんやお母さんが真の神さまを信じているお友達があります。皆は、お父さんとお母さんに、神さまを第一にして欲しいですか。それとも自分のことを第一にして欲しいですか。

今日の暗唱聖句は、「主の山に備えあり」です。神さまは、イサクの代わりにちゃんと雄羊を用意して下さいました。つまり、神さまのご命令は、必ず、神さまの栄光と従う人の喜びになるのです。僕たち私たちは勇気をもって神さまに従って良いのです。

それだけでなく、僕たち私たちは、このお話から、イエスさまのことを思いだします。こんな命令をなさった神さまは、やがて、僕たち私たちの罪を赦して、神の子にするために神の独り子イエスさまを十字架につけてくださいました。本当に、恐ろしいまでの犠牲を支払ってくださったのは、天のお父さまの方です。心から、独り子イエスさまを与えてくださった天のお父様に感謝しましょう。

〔今日の暗唱聖句〕 創世記 22 章 14 節

アブラハムはその場所をヤーウエ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。

〈ねらい〉

「約束をなされた方は、真実な方であると、信じていたからです」(ヘブライ 11:11)。アブラハムのように、どんなときも神さまに信頼できるように、お祈りをささげます。

〈お話〉

おじいさんとおばあさんになった、アブラハムとサラには、子どもがいませんでした。もう・・・あきらめていました。しかし神さまは、思いもよらない、すばらしいことをしてくださいました。年をとったサラが、赤ちゃんを生んだのです。“笑う”という意味の「イサク」と名づけました。アブラハムもサラも、大喜びで、大切に育てました。

ある日のことです。神さまは、アブラハムを呼んで、「イサクを、わたしにささげなさい」とおっしゃいました。アブラハムは、「どうしてですか!？」とびっくりしましたが、

神さまのおことばですから、そのとおりにしました。

神さまは、「あなたは、自分の一番の宝物よりも、わたし(神さま)を一番にすることがわかりました」と言いました。アブラハムは、神さまを礼拝した後、イサクを連れて帰りました。

〈暗唱聖句〉

「アブラハムは主を信じた」
創世記 15:6

〈賛美〉

「主にしがいがゆくは」
『こどもさんびか』53番
(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 37、38 を参照

〈分級の流れ〉

- ①「聖書物語」などの絵本でアブラハムの物語の絵を見せた後、上記のお話をします。
- ②暗唱聖句を復習します。
- ③キルト 「わたしのだいすきなもの」
 - ・右のシートをひとりひとりに渡して、書きこんでもらいます。
 - ・それらにまさって、神さまを第一にできることを感謝しましょう。
 - ・キルトなので、色鉛筆などで色をぬったり模様をつけたりします。

だいすきな ♡ひと♡ [] []	[] [] [] [] []	だいすきな ♡こと♡ [] []
[] [] [] [] [] かみさま [] [] []		
だいすきな ♡おもちゃ♡ [] []	[] [] [] [] []	だいすきな ♡たべもの♡ [] []

〈展開例〉

今まで、聖書には、ずっとアブラムと書いてありましたね。それが、今日の聖書の箇所には、アブラムと書いてあるね。いつから名前が変わったのかな？

ちょっともどるけど、17章5節に「あなたは、もはやアブラムではなく、アブラムと名乗りなさい」という神様の言葉があります。この時から、アブラムがアブラムに変わったのだね。奥さんのサライも、17章15節に「あなたの妻サライは、名前をサライではなく、サラと呼びなさい」という神様の言葉があって、サライからサラに変わったんだよ。

神様は、約束通り、奥さんのサラに子どもを授けられました。生まれた時は、何とアブラムが百才、サラが九十才だんだんだよ。普通なら考えられないね。九十才で子どもを産んだら、お母さんが死んじゃうよ。でも、これは神様の御業だったから、神様が、ちゃんと守ってくださいったんだね。子どもはイサクと名付けられました。待ちに待った子どもだから、嬉しかっただろうね。だって25年も待ったんだよ。イサクは、お父さんとお母さんの愛情をいっぱい受けて、すくすく成長していきました。

でも、神様は、とんでもないことをアブラムに求められるのですね。神様は、アブラムに息子イサクを「焼き尽くす献げ物としてささげなさい」とおっしゃるのです。25年も待つて生まれた独り子なのに……。

これで、跡継ぎができたと安心したのに……。またもや希望を失ってしまう。そして、何よりも神様が与えてくださった子どもなのに……。アブラムの心は揺れ動いたことでしょう。

でも、アブラムは、もう恐れませんでした。次の朝早く、イサクとお供の者を連れて出かけ、三日目に、やっと神様が示された山が見える所までやってきました。そして、アブラムとイサクの二人だけで山に登っていきました。

アブラムは、山の上に祭壇を作りました。そして、イサクを縛って、薪の上に乗せました。いよいよ、山刀を振り下ろそうとした時、天からアブラムを呼ぶ声がありました。「アブラムよ。あなたは、自分の息子より神様を大切にしていることがよくわかりました」。そうすると、近くの藪に角を引っかけた雄羊がいました。アブラムはイサクと一緒に、その雄羊を神様に献げて、神様を礼拝しました。

父なる神様も、愛する独り子主イエスを十字架つけてまで私たちを愛してくださいったんだね。イサクの代わりに、雄羊が「焼き尽くす献げ物」となったよね。それも神様が雄羊を準備しておられたから、イサクは死ななくてよかったんだね。神様は、私たちに主イエスを準備してくださいったんだよ。その主イエスは、その雄羊のように、私たちの代わりに十字架にかかって死んでくださいったんだよ。

6月1日 「イサクをささげる」 小学科上級

〈ねらい〉

アブラハムの姿勢をとおして、私たちも神様のご命令に真剣に聞き従うべきこと、また、神様のお言葉に信仰をもって従う者に祝福が与えられることを理解する。

〈展開例〉

1. イサクをささげよとの神様のご命令はひどいことではないだろうか。
→人間的判断からは無茶なご命令と感じるところ。素直に感想を語り合えばいいだろう。でも、人間の思いを超えた神様のご計画、み心を認めるべきことを学ぶ。それは、我々が大きな試練にあうときも同じ。参考=子どもを犠牲としてモロク神にささげることに対する禁止命令（レビ 18:21）。
2. アブラハムはこの神様のご命令にどのような思いで従ったのだろうか。
→信仰者として神様のご命令に従った（ヘブライ 11:17 から）。しかし、それは心の葛藤を否定するものではないだろう。それでもアブラハムは、神様を信じ、ご命令に従った。そのアブラハムに、神様は祝福

を与えられ、アブラハムは感謝し喜ぶ者となった。教会は、ここのイサクをささげようとするアブラハムの姿を、愛する独り子を十字架につけられた父なる神様を暗示するものとして理解してきた。

3. アブラハムに対する神様のご命令は深刻なものだった。私たちがイエス様に従って生きるということも深刻なものか。それとも簡単なことか。皆で話し合ってみよう。
→参考=マタイ 19:29、16:24、11:30
4. アブラハムの信仰に関して、創世記 15:6 では「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と記されている。これと同じような言葉を知っているだろうか。
→信仰義認（ローマ 4:5、5:1。信仰も恵みとして与えられるものであることに注意せよ）。信じ従ったアブラハムに祝福が与えられたように、イエス様を救い主と信じ、その信仰のゆえに義とされた者の受ける祝福は大きい。

ねらい

アブラハムの人生における最大の試練において、神の真実を疑わず、神の備えを信じて神の命令に従うアブラハムの信仰的態度を学ぶ。

話し合ってみよう！

人生の試練やテストに合格するために何が必要か話し合ってみよう。

展開例

父と子との信頼に満ちた言葉のやりとりに注目しよう。

子イサクの父への信頼と従順は、のちの主イエス・キリストの父なる神への従順の予表と見なされる、素晴らしい行為である。

祈り

試練の時にも逃れの道を備えてくださる神さまであることを信じさせてください。

○暗唱聖句○

創世記 22:14

○祈りの課題○

聖書日課

日 創世記 18章 16 ~ 33節
月 創世記 19章
火 創世記 20章
水 創世記 21章 1 ~ 21節
木 創世記 21章 22 ~ 34節
金 創世記 22章
土 創世記 23章

☆三二日記☆

テキスト 使徒言行録2章1～13節

聖霊降臨の出来事を語る箇所です。「五旬祭（ペンテコステ）」とは五十日目の祭のことを指し、過越・除酵祭から七週目にあたり、「七週祭」とも呼ばれます（出エ34章22節）。これは収穫の初穂をささげる祭で、この時に聖霊降臨の新しいみわざが始まったことは、世界宣教の刈り入れを保証するのでしょう。

(1) 聖霊降臨

聖霊降臨は二つの徴が伴いました。一つは「烈しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ」た。もう一つは「炎のような舌が分かかれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」「風」は旧約時代から聖霊の象徴に用いられてきました。イエスの約束の通り、「天から」の聖霊の派遣が起きていることを表しています。また「舌」は「"霊"が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました」形でさらに明確に現れます。どちらも聖霊降臨の徴として記され、聖霊の降臨は同時に語りだしに結びついています。聖霊が注がれると、それは必ず「舌」となって話さずにはいられなくなるのです。それは、1章8節でイエスが「わたしの証人となる」と言われていたとおりです。また、「突然、烈しい風が」と描かれるように、聖霊の降臨はまさに「力」として起こりました。これもイエスが1章8節で「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」と言われていたとおりですし、「"霊"が語らせるまま」というところでもわかります。まさに聖霊は力です。

そして、「分かかれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」とあるように、「一同」には言われず、「一人一人に」起こるのです。これは一人一人がその場の雰囲気

に飲まれたのではなく一人一人が自覚的に、だからこそひとつの言葉ではなく「国々の言葉」となって現れたのです。

(2) 人々の反応

5節以降この出来事を見た人々の反応が記されています。「天下のあらゆる国から帰ってきた、信心深いユダヤ人」と「大勢の人」が目撃しました。丁寧に記してあるのはこの出来事が幻でも狂乱でもなく確かな出来事であることを証明するためでしょう。

さらに9節以下の様々な地域のリストは、まさにイエスが「地の果てまで」と言っていたことの成就を指すのでしょうか。この言葉はちゃんと聞き取られて「わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」と驚きを表します。語り出す方にも一人一人聖霊に促されて各国語で話しますが、それは同時に聞き取る方にも「わたしたちの言葉で神の偉大な業を」という驚きになるのですから、聖霊降臨を受けた本人たちだけでなく、耳を傾けた多くの人々にも聖霊の力と証は届いたこととなります。

聖霊の降臨は語るにせよ、聞くにせよ、それに触れたものたちは静観することができない事柄なのです。ですからそれを否定する者たちは、13節「あざける者」となって反応しました。

まさに刈り入れの感謝を初穂を捧げて祝った「五旬祭」の日、聖霊降臨による世界の刈り入れが始まりました。その始まりは、烈しい聖霊の力と、その聖霊がとどまった一人一人によって構成される教会とその語りだし、そして「わたしたちの言葉で神の偉大な業」を聞く人々によって描かれています。

テキスト 使徒言行録2章1～13節

〔単元のねらい〕

聖霊降臨祭を記念して、教会の誕生の経緯を学ぶ。教会は聖霊によって、生み出され、育てられ、形成される。その教会へと来ている子らに、既に自分も聖霊の働きにあずかっていることを気づかせたい。ここでは、歴史的な面から教会の姿を学びたい。教師自身もまた、教会の姿を歴史的視点から考える力を身につけていただきたい。

「教会の誕生」

今日も愛する皆と一緒に教会に集って、神さまを礼拝できることをとても嬉しく思います。皆をここに呼び集めてくださった神さまに心から感謝しています。先生は確信しています。天のお父さまは、僕たち私たち一人一人を、その名を呼んで、神の民の祈りの家、キリストの御体としての教会に連れてきてくださったことをです。皆は、そう信じていますか。

教会は、何をするとところですか。神さまを礼拝するところですか。聖書を通して語ってくださる神さまからのお話を皆で聴いて、お祈りし、賛美を歌います。そして、一人でも多くのお友だちに、イエスさまのことを紹介するのです。教会は世界中で、日曜日の朝、礼拝式をささげています。

僕たち私たちは、日本キリスト改革派教会という教会の〇〇〇にある教会、〇〇〇教会で礼拝をささげています。日本キリスト改革派教会は、今から、56年前に生まれた教会です。でも、日本キリスト改革派教会の中には、100年以上も前からある教会もあります。この日本キリスト改革派教会は、日本で一番古い教会とつながりのある教会なのです。そして、今は沖縄県から北海道まで150

くらいの教会があります。〇〇〇にも、夏のキャンプで一緒だったお友だちが通っている教会があります。僕たち私たちのこの教会は今から〇年前に始まった若い教会です。

この「改革派教会」という教会の名前は、中学生のお兄さんお姉さんになると学校の教科書で必ず学びます。それほど、有名な教会なのです。今から、450年以上の昔、ジャン・カルヴァンという先生がスイスのジュネーブで新しい教会を始めました。教科書では「宗教改革」って学びます。この改革派教会とは当時の教会が聖書の正しい信仰からそれてしまったことを、「聖書によって改めましょう」と言って建てられた教会で、僕たち私たちの教会は、日本におけるこの教会の歴史を受け継いでいる教会なのです。

僕たち私たちの教会は、立派な建物がありません。ビルの小さな一部屋です。けれども、ここは、教会です。イエスさまは「わたしはこの岩の上に、私の教会を建てます」と仰いました。「二人でも三人でも、私の名によって集るところには、わたしも共にいるのです」と約束してくださいました。

それなら、一番最初の教会はどのように始まったのでしょうか。イエスさまが、十字架

につけられて三日目に復活されて、お弟子さんと食事をしておられた時のことです。こうおっしゃいました。「エルサレムを離れてはいけません。あなたがたは、聖霊なる神さまを受けます。その時には、あなたがたは力を受けて、わたしのことを世界中の人々に伝える人になります。証人となります。」その後、お弟子さん達が見ている前で、天に昇って行かれました。お弟子さんたちは、言われたとおり、お祈りしながら待っていました。「天の父なる神さま、私たちは、これまで、イエスさまのことを信じることができず、イエスさまの教えてくださったことを悟ることが出来ませんでした。自分達どうしも、誰が一番偉いか偉くないか競いあつて来ました。こんなわたし達を赦して下さい。イエスさまの復活の証人として、強くして下さい。力を与えてください。」

それから毎日毎日、来る日も来る日もお弟子さんたちは、心をひとつに合わせてお祈りに集中していました。そして、すでに10日たった五旬祭というお祭りの日のことです。その日も、ずっとお祈りの会が続いていました。すると、突然、天から激しい風が吹いてくるような音が、家中に響いたのです。炎のような舌が一人一人の上に留まりました。すると、みんな聖霊に満たされ、外国の言葉で神さまをほめたたえ始めたのです。

お弟子さんたちは、今までイエスさまを十字架につけた人々がたくさんいるエルサレムの真中にいました。ですから、窓を閉めてお祈りしていました。怖かったからです。自分達だって、見つかったら殺されるかもしれないのです。けれども、聖霊を受けた今、お弟

子さんたちは神さまの力に満たされて、この物音にびっくりして駆け集って来た人々に、イエスさまの十字架の福音を語り始めました。「あなたたちが十字架につけて殺してしまつたあのイエスさまは、復活されました。イエスさまは神さまです。あなたがたの罪の身代わりに十字架に掛かってくださったのです。罪を悔い改めて、イエスさまを信じなさい。」大胆に御言葉を語りました。これを聞いていた人々は、心を打たれ、「どうしたら良いのでしょうか。」と言いました。お弟子さんたちは、人々に洗礼を受けるように勧めました。その日に、洗礼を受けて仲間に加つた人の数は、3000人にもなりました。

これが、僕たち私たちの教会が地上に始まつた日の光景です。初めの教会には、教会堂はありませんでした。けれども、聖霊なる神様の力によって、皆がイエスさまを愛し、お互いを愛し、お弟子さんたちの聖書の教えを聴き、心を合わせてお祈りしていました。

あれから2000年たった今、世界中にキリストの教会は広げられました。そしてこの地にも、天のお父さまのご計画によって、イエスさまのお祈りによって、聖霊が注がれて、僕たち私たちの〇〇〇教会が誕生したのです。僕たち私たちは、今、聖霊なる神さまによって生まれたこの教会に、聖霊なる神様のお働きによってここに呼び集められ、ここに座つてイエスさまを礼拝しているのです。つまり、初めの教会と同じように聖霊の神さまの力を受けているのです。あなたも、勇気をもってイエスさまのことを伝えることができますのです。

〔今日の暗唱聖句〕 使徒言行録1章8節

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。

〈ねらい〉

教会で、お友だちと心を合わせてお祈りする時、神さまも共にいて、豊かに聖霊を注いでくださることを喜び、感謝します。

〈お話〉

イエスさまが十字架におかかりになった後、こわくなってばらばらになってしまった弟子たちが二人、三人・・・と集まって来ました。そして、集まってお祈りを始めました。

お祈りを始めて10日たった時、素晴らしいことが起こりました。弟子たちは、聖霊なる神さまの力に満たされたのです。弟子たちの心を一つにしてください、「祈りの家」、教会が生まれました。教会のお誕生日、それ

がペンテコステです。

〈暗唱聖句〉

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にあるのである。」 マタイ 18:20

〈賛美〉

「しゅイエスはまことのぶどうのき」
『こどもさんびか』73番
(日本基督教団出版局)

〈こどもカテキズム〉

問 30、34 を参照

〈分級の流れ〉

①あじさいの花は、小さな花が集まって丸くなって咲いています。神さまは、わたしたちがイエスさまから離れないで、いつもいっしょにお祈りできるように教会をあたえてくださいました。

②折り紙

「あじさいの花のバスケット」

材料・・・紫、薄紫、ピンク色などの色紙

・色紙で、あじさいの花を折ります。

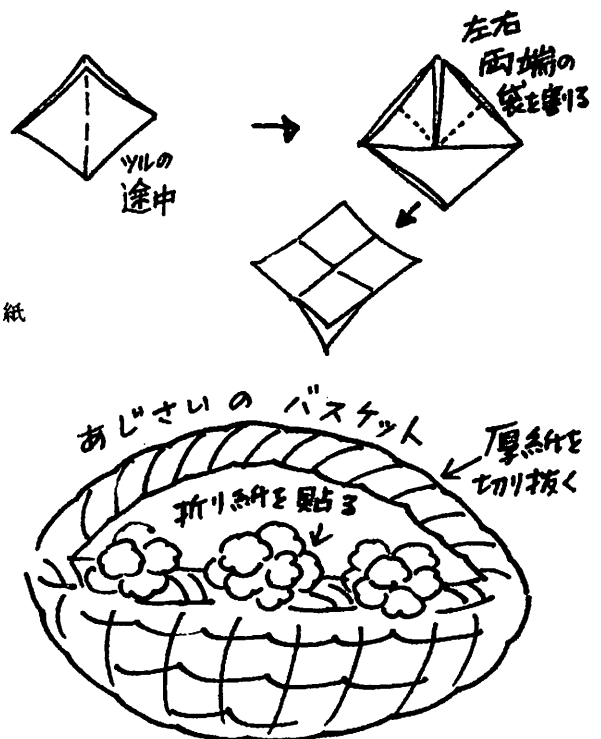
一人いくつでもよい。

・バスケットの形の厚紙に、編み目模様を描いて、みんなで作ったあじさいの花をのりで、貼っていきます。

・「花の日」として、教会学校行事を行う教会は、感謝をこめたプレゼントにしてもよいでしょう。

③賛美 (#73) をささげ、祈りをささげます。

『あじさいの花』



〈考えてみよう〉

- ①教会には幾つかの大切な日（記念日）があります。みんな知っているか聞いてみましょう。
・クリスマス・イースター・ペンテコステの三つです。
- ②子どもたちに合わせて、クリスマス・イースターについて簡単に説明しましょう。
- ③ペンテコステはどんな日でしょうか？
・教会の誕生日？ ・イエス様が天に昇られた日？ ・それとも・・・。（教会の誕生日です）
- ④ペンテコステは教会の誕生日です。それでは教会は誰がつくったのでしょうか？
・お弟子さん？ ・イエスさま？ ・大工さん？ 答えはイエス様です。
- ⑤イエス様はどのようにして教会をつくられたのでしょうか。
・イエス様が天のお父様のところに帰られたのち、お弟子さんたちが集まっているときに、聖霊を送られました。聖霊を受けたお弟子さんたちはいろんな国の言葉でイエス様のしてくださったことを話したのです。そのイエス様が送られた聖霊によって話された人たちが、たくさんイエス様を信じるようになりました。そうして最初の教会ができたのです。
- ⑥今みんなが来ている教会は、この最初の教会と何か関係があるのかな？ また、どんな関係があるのか、分かる人がいるかな。
その答えは、この教会もイエス様が聖霊を送られてつくられた教会だということです。すべての本当の神様を礼拝している教会は、イエス様が聖霊を送ってくださってつくられた、イエス様の教会なのです。
- ⑦この聖霊は、来ているみんなにも送られる

のかな？

答えはイエス様を信じたときに送られます。その聖霊を受けたとき、小さなみんながイエス様の教会の一人となるのだということ子どもたちに教えましょう。

〈やってみよう〉

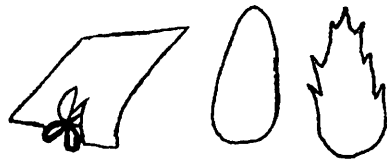
今日は、暗唱聖句のしおりを作しましょう。

・用意する物

紙（画用紙 or 色画用紙）、鉛筆、パンチ、しおりに通すリボン

・作り方

1. 最初に、紙をペンテコステのときに降った聖霊のイメージに切りましょう。



2. 次に、一番上の適当なところにパンチで穴を開けておきます。



3. 裏と表に今日の暗唱聖句を書きます（使徒言行録 1:5）。裏には、「あなたगत」というところにお友だちの名前を書きましょう。

4. 最後にリボンを通してできあがり。



〈ねらい〉

ペンテコステの出来事を理解し、今の私たちの教会も、最初に成立した教会と同じ恵みと使命の中にあることを知る。

〈展開例〉

1. イエス様は、ペンテコステの出来事が起こること、また、それを経験した教会がどうなるかを、予告しておられた。それらを1:3-11の箇所から探してみよう。

→「聖霊による洗礼」。「あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく・・・」。後者は、聖霊の導きによる教会の働きとして、使徒言行録がこの後に記しているところ。

2. ペンテコステは教会の誕生日と言われる。そうすると、これまで学んできた旧約のアブラハムは教会にはいなかったことになるのだろうか。

→旧約の信仰者も主の民であり、当然、教会の人々だった。しかし、旧約時代にはキリストの教会としての姿は、まだはっきりとは現れていなかった。ペンテコステはキリストの教会がはっきりと現れた記念日とも言えるだろう。

3. ペンテコステの時、聖霊が降臨したことは、風のような音や炎のような舌によってよくわかった。また、弟子たちが多くの外

国語で神様の偉大なことを語ったことによって、人々はそこに不思議な力が働いたことを知った（あざける人もいた）。今、教会ではそのようなことは起こっていない。今の教会には聖霊が働いていないということだろうか。

→ペンテコステの時、特別な形で聖霊が働かれた。それは「キリストの教会の誕生」という特別な時だったからだろう。それとともに、教会には（後の時代にも）聖霊が与えられていることを確かに示す意味もあったのだろう。ペンテコステの日にベトコの勧めを聞いて、三千人の人々が洗礼を受けた。それと比べると、今の教会で洗礼を受ける人は少ない。しかし、そうであっても、教会で信仰告白をして、洗礼を受ける人が起こされることは、同じ聖霊の働きによる。

4. イエス様が言われた「あなたがたは・・・わたしの証人となる」(1:8)の「証人」とはどういう意味だろう。

→使徒 1:22、2:32 では、使徒たちがイエス様の「復活の証人」として記されている。イエス様の十字架と復活を直接に知っていた使徒たちにとって、その証言をすることが大切な働きだった。また、殉教者も証人と呼ばれている(22:20)。そのような「証人」の働きは、聖霊を与えられ、イエス様の十字架と復活を知る私たちにも与えられている。

ねらい

現在の教会の由来について学ぶ。

聖霊なる神様のお働きによって教会が誕生し、今も継続していることを理解する。

展開例

教会は単なる人々の集まりではないことを理解する。また、教会の真の指導者は誰なのか。教会役員との関係についても考える機会とする。

聖霊なる神さまは信者一人一人の心の中に内住し、個別に人格的に導く神であることを

認識する。

話し合ってみよう!

神が真の指導者であって人間（教会役員）は媒介者であるとはどういうことか、具体的に話し合ってみよう。また、説教、聖餐、牧会の働きについて、等。

祈り

聖霊を私たちにお送りください。

○暗唱聖句○

使徒言行録 1:8

○祈りの課題○

聖書日課

- 日 使徒言行録 1章 1～5節
- 月 使徒言行録 1章 6～11節
- 火 使徒言行録 1章 12～26節
- 水 使徒言行録 2章 1～13節
- 木 使徒言行録 2章 14～21節
- 金 使徒言行録 2章 22～42節
- 土 使徒言行録 2章 43～47節

☆三二日記☆

6月15日 「エジプトに売られるヨセフ」 聖書研究

テキスト 創世記 37 章 12 ~ 36 節

ヤコブの息子ヨセフが兄たちから憎しみをかい、エジプトに売られる御言葉です。背後にある神様のお導きを読みとりましょう。

(1) 兄から不評を買う

ヨセフは、夢を見ました(1-11)。それらの夢は、ヨセフに対して他の兄弟や両親がひれ伏すという夢でした。親から特別に愛され、また奇妙な夢を見て得意になったため、彼は兄たちからの不評を買い、憎しみの対象となりました。この憎まれたヨセフは、兄たちを治める者として、また彼らを助ける者となるために神様から選ばれていたのです。

父ヤコブから自分たちに使いに出された弟ヨセフを見て、兄たちは、ヨセフを殺してしまおうとたくらみました。長男のルベンはそのたくらみに反対しますが、それを阻止するだけの力なかったようです。ヨセフは命までは取られませんでした。しかし、憎しみのために荒れ野の中の穴に放り込まれてしまうことになりました。

(2) エジプトへ売られる

ヨセフはその兄たちから捨て去られ、葬り去られようとしていました。ちょうどそのころヘイシュマエルの商隊がやってきて、兄たちはユダの提案によって、この商隊にヨセフを売ることを決めてしまいます。ヨセフの命を取ることにについては、良心がとがめたのかもしれませんが。ここで新共同訳聖書は、通りかかったミディアン人の商人がヨセフを引き上げて、イシュマエル人に売ったと語っています。これが本来のかたちの翻訳のようです。いずれにせよ、ヨセフは当時の相場に相応しく奴隷として銀 20 枚で商人に売り渡さ

れました。兄たちのたくらみの結果の出来事であって、このことに関わった兄たちの罪は変わることがありません。このとき長兄であるルベンは何らかの理由で席を外しており、この出来事をあとで知ったようです。

この出来事によって、ヨセフは父からの愛を一身に受けて守られ育まれる家から、彼を受け入れない兄たちによって捨てられ、亡き者にされました。正確にはそのように見えると言った方がよいのかもしれませんが。

(3) ヨセフ物語と神様の摂理の御業

ヨセフは兄たちの憎しみと妬みのためにエジプトへと売られていきました。この嘆かworthy出来事の背後に、神様のお働きと摂理の御業が明らかに示されています。

ヨセフは兄たちから受け入れられることなく、憎しみと妬みによって売られ、亡き者とされました。しかし、その出来事が、イスラエルの人々が神様のご計画に従ってエジプトへ移住する備えとなります。そして、主の救いの御業、贖いの御業が明らかに示される出エジプトへと導かれていくのです。

また、遠い将来の出エジプトという出来事だけではなく、パレスチナ地方に起こったひどい飢饉の時に、ヤコブの子らへの救いが与えられます。それも、ヤコブとその子らをアブラハムとの約束のゆえに守られる神様のお働きによるものです。

神様はこのようにその歴史の中で歴史に関わりを持たれながらお働きになり、摂理の御業をなさっておられます。それは、歴史の一時期だけではなく、全時代を通じてなされる神様の御業なのです。

6月15日「エジプトに売られるヨセフ」説教展開例

テキスト 創世記 37章 12 - 36節

〔単元のねらい〕

ヨセフが会おう試練は、兄たちの悪意とヨセフ自身が蒔いた種を刈り取る面がありますが、しかし神がヨセフを訓練して、神の救いの計画に用いるために与えられたものでもありました。その中で、「神はヨセフを離れず、あらゆる苦難から助け出して」、ヨセフを守られたのでした。ヨセフが大変な労苦を通る中で、しかし創世記はくりかえし、「主がヨセフと共におられた」ことを明らかにします。苦難の中で共にいて守られる神を豊かに語ってください。

「苦しみの中でヨセフと共にいて守る神」

ヨセフは、自分が見た夢を兄たちに話しました。それはいつの日か、兄たちも父母も、やがては自分にひれ伏すという夢で、それをさも得意そうに語ったヨセフを、兄たちは苦々しく思いました。自分たちは羊を飼うという苦しい仕事をさせられているのに、ヨセフ一人は特別扱いで、長袖のきれいな服を着せてもらい、テントの中でのんびり遊んでばかりいましたから、それも兄たちにはおもしろくありませんでした。そこでだいに兄たちの心は、ヨセフに対する憎しみでふくれあがり、なんとかヨセフを殺してしまおうと考えるようになっていきました。そしてそれは、すぐにやってきたのです。兄たちがいつものように羊の群れを野原で飼っていたとき、兄たちへのお使いを頼まれたヨセフが、兄たちを捜してやってきました。その姿を遠くから見つけた兄たちは、「夢見るお方がやってきた」と、ヨセフを捕まえて殺してしまおうとはかります。そうすれば、ヨセフが見た夢は、一体どうなるのでしょうか。殺してしまえば、兄たちがヨセフの前にひれ伏すなどということは、起こるはずもありません。ヨセフは、絶体絶命のピンチを迎えました。

ヨセフは、あやうく殺されそうになりますが、長男のルベンがヨセフをかわいそうに思い、殺すことだけはやめようと、他の兄たちを思いとどまらせます。穴に落としてこらしめるだけで十分だと。それは、後でヨセフを助け出すためでした。こうしてヨセフを空の穴に投げ落として、食事をしていたところに、らくだに様々な品物を乗せて、売り歩くイシュマエル人の隊商が見えてきます。そこで今度は、ユダがヨセフを隊商に売り飛ばして金儲けをしたらどうかと、他の兄たちに相談します。ところが、兄たちがあれこれ議論する間に、穴にいるヨセフを通りかかったミディアン人の商人が見つけて、イシュマエルの隊商に売ってしまったのでした。兄たちは、憎しみの的だったヨセフの、お父さんからの特別な長袖のきれいな服をびりびりに破ると、それに山羊の血をぬりました。ヨセフが、途中で獣に襲われて、噛み裂かれたと思わせるためでした。そうすれば、兄たちがヨセフを殺そうとしたり、こらしめようとしたことは、お父さんのヤコブにはばれないと考えたのです。こうしてヨセフは、エジプトに売られてしまい、これからは奴隷として生きなければなりませんでした。

これまでは、たくさんいる召使いや使用人にかしづかれながら、なんでもしてもらうことができたのに、これからは自分のことは自分でしなければならないばかりか、買われていった家の奴隷として、ご主人に仕え、ご主人の言われるとおりに、仕事をしなければなりません。これまでは、「おぼっちゃま」として、家でも特別に、そして大切に扱われ、羊を飼うという家の仕事さえ、ヨセフはすることがありませんでしたのに、これからはそれよりももっとつらい仕事を毎日、朝から夜まで休むこともできず、働き続けなければならないのです。そして一生奴隷のまま、もう二度と家に帰ることも、優しいお父さんに会うこともできないのです。手を縛られて、エジプトへと連れられていった時、ヨセフの頬には、涙が伝って流れたのでした。エジプトで売られて、ポティファルという人の家に来てからも、朝から晩まで怒鳴られたり、しかられたりしながら仕事をさせられることもあり、夜にやっと休みの床に着いた時、故郷と優しいお父さんを思い出しては、涙が溢れてくるのをとめることはできませんでした。ヨセフは、どれほど悲しく、辛かったことでしょうか、どれほど寂しく、心細かったのでしょうか。アブ

ラハム・イサク・ヤコブの神さまは、ヨセフには神さまではないのでしょうか。お父さんのヤコブの神さまは、ヨセフを守ることができなかつたのでしょうか。

いいえ！ 神さまは、ヨセフに特別な計画をもっておられました。そしてそのご計画を果すために、ちゃんとヨセフを守っておられたのでした。ヨセフが兄たちによって殺されないように守り、奴隷として売られた先は、心優しく親切な人の家でした。何より、「主がヨセフと共におられ」（39章2、3、21、23節）、ヨセフを守ってくださいました。そして「神はヨセフを離れず、あらゆる苦難から助け出して」（使徒言行録7章9、10節）くださったのでした。わたしたちも、ヨセフのように苦しい目に遭ったり、つらいことに会いますが、そこでも神さまは共にいて、わたしたちを守ってくださいます。そして、神さまがわたしたち一人一人のために立ててくださった特別な計画を果すために、わたしたちを導いてくださるのです。どんなにつらいことに会っても、神さまはそこから逃れる道をも用意して、わたしたちがつぶれてしまうことがないように、ちゃんと共にいて守ってくださる神さまなのです。

〔今日の暗唱聖句〕 コリントの信徒への手紙 一 10章13節後半

神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさ
らず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

6月15日 「エジプトに売られるヨセフ」 幼稚科

〈ねらい〉

どんな時でも、神さまが共にいてくださることを喜び感謝します。

さみしい時もお守りくださいました。

わたしたちは、どんな時も決してひとりぼっちではありません。神さまが共にいてくださることを感謝しましょう。

〈お話〉

ヨセフさんは、深い穴に落とされた時、どんな気持ちがしたのでしょうか？ 悲しかったですよね。

それだけではありません。やっと穴から出されたと思ったら、こんどは行ったこともない、遠いエジプトの国に連れて行かれたのです。大好きなお父さんと離れ離れになってしまったのです。

お父さんは、どんなに心配をして悲しんだことでしょう。

そんなヨセフさんを、神さまは悲しい時も

〈暗唱聖句〉

「主がヨセフと共におられた・・・。」

創世記 39:2

〈賛美〉

「主イエスとともに」

『ふくいん子どもさんびか』90番

(いのちのことば社)

〈こどもカテキズム〉

問 13 を参照

〈分級の流れ〉

①「聖書物語」などの絵本で、ヨセフの物語の絵を見せた後、上記のお話をします。

②暗唱聖句を覚えます。

③製作 「お父さんありがとうハンガー」

材料・・・針金のハンガー、幅広のリボン、両面テープ、サランラップの芯

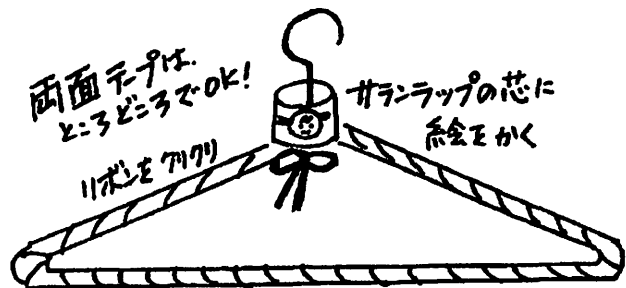
・リボン（布地をバイアスに細長く切ったものでもよい）の裏に、両面テープを貼り、針金にクルクル巻いてゆく。巻き初めと、巻き終わりを 15 cm 位残しておいて、最後にリボン結びをします。

・サランラップの芯を 4 cm 位に切り、絵を描いたり（お父さんの顔、自分の顔など）、字を書いたり（「お父さんありがとう」「お父さんおかえりなさい」など）、模様を描いたりして、引っかける部分に通します。

ハンガーのできあがり！

④足踏みをしながら、歩く格好をし、て賛美（#90）をささげます。

⑤お祈りをささげて、さようなら。



6月15日「エジプトに売られるヨセフ」小学科下級

〈展開例〉

今日は、ヨセフがエジプトに売られるというお話です。

今日の箇所の前1節から11節に書いてあるのだけど、ヨセフは夢を見ました。その夢は、二つありました。

一つは、畑で麦を束ねていると、ヨセフの麦の束がいきなりまっすぐに立ったと言うのです。そこへ、お兄さんたちが束ねた麦の束がやって来てひれ伏したという夢でした。この夢は、やがて、お兄さんたちが、ヨセフにひれ伏す時が来るということを意味している夢でした。

もう一つの夢は「太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏している」夢でした。「太陽と月」は、お父さんとお母さん、つまりヤコブとリベカです。「十一の星」は、11人の兄弟たちです。この夢は、11人の兄弟たちだけでなく、お父さんもお母さんも、やがて、ヨセフにひれ伏す時が来るということを意味している夢でした。

ヨセフは、この夢をお兄さんたちに話したものですから、お兄さんたちは、かんかんになって怒りました。

皆さんの中に、お兄さんやお姉さんのいる人は？ 弟や妹のいる人は？ みんなどう思う？ 「お兄ちゃんは、九九をすらすら覚えたのに、あなたはどうしたの？」と言われたり、「お姉ちゃんは、あなたの年の時には、もっとしっかりしてたわよ」。このように言われるのいやだよ。ヨセフは、兄弟たちだ

けでなく、お父さんもお母さんも、ひれ伏す時が来るという夢を見たと言うのですから、お兄さんたちは、カリカリ来ていました。そして、いつかはヨセフを殺してやろうとまで考えていたんだよ。

しかも、絶好のチャンスが来ました。ヨセフは、お父さんのヤコブのお使いで、お兄さんたちの様子を見に来ました。ヨセフは、あやうく殺されそうになります。しかし、長男のルベンが、殺すことだけはやめようと言いつけました。それで、穴に落としてこらしめることにしました。

ちようどそこへ、イシュマエルの商隊がやって来ました。お兄さんたちが、ヨセフを奴隷として売ってしまおうと相談しました。しかし、その間に、ミディアン人の商人たちが通りかかって、ヨセフを穴から引き上げ、銀二十枚でイシュマエル人に売ってしまったのです。

ヨセフは、エジプトに連れていかれ、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルの奴隷になりました。ヨセフは、これからどうなるのでしょうか。

でも、ヨセフに夢を見せられたのは神様です。神様がヨセフを守ってくださいます。

「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(コリ10:13b)。

6月15日「エジプトに売られるヨセフ」小学科上級

〈ねらい〉

人間的には絶望と思える状況でも神様の摂理のお働きの中にあることを学ぶ。ヨセフの物語の展開において、夢は重要な役割をしている。生徒にとっても、印象的な部分だろう。それだけに、今の私たちにとって夢の働きを必要以上に重視する必要がないことを確認する必要がある。

(ヨセフ物語は詳しいが、神様の直接的な関わりはアブラハムからヤコブまでよりも薄くなる。ヨセフ以後、モーセの時代まではさらに薄くなる。こうした期間は、ある意味で絶望の時と言えるだろう。このような時にも神様のお働きがあることを学ぶことも大切かもしれない。)

〈展開例〉

1. ヨセフは夢を見ること、また、その意味を解き明かすことにおいて、特別な力を神様から与えられていた。私たちにはその力はない。ヨセフをうらやましく思うべきだろうか。

→私たちは教会、聖書(そして聖霊の働き)によって、ヨセフよりもより直接的に神様を知っていると言うことができる(ヨセフの時代には、書かれた聖書はなかっただろう)。だから、ヨセフの夢をうらやましく思う必要はない。神様はヨセフの夢を通して後に起こることを示され、その夢の実現を通してご自分の民を救われた。しかし、神様がご自分の民に救いを与え、恵みを与

えられる仕方は時代によって異なる。大切なことは、いつの時代にも神様はご自分の民を愛し、恵みを与えてくださるということ。

2. 私たちが見る夢の場合にも、神様が働いてくださり、そこに特別な意味があるのだろうか。

→新約の教会の時代にある私たちに対して、神様が夢を通して具体的な指示を与えられることはないだろう。だから、夢占いなどを気にする必要はない。(ただし、聖霊が自由に働いてくださって、夢を通して、私たちに悔い改めの機会を与えてくださるといったことはあるだろう)。

3. クイズ。ヨセフは銀貨20枚で奴隷として売られた。イエス様がユダに裏切られて捕らえられたときにも、報酬としてユダに銀貨が与えられた。その銀貨は何枚だったでしょうか。

→マタイ 26:15。銀貨の連想によってイエス様を取り上げるのは、日曜学校の真のヒーローはヨセフではなくイエス様だから。

なお、ヨセフが売られたこととイエス様の十字架の贖いとは直接には関係ないので、銀貨を代価として売られたことの共通性を強調し過ぎない方がよい(ヨセフは低められ後に高められるという人生の経験をするが、これらのことはイエス様の謙卑と高挙を暗示するものと考えられている。)

ねらい

私たちの人生の歩みが神さまの見守りと導き〔摂理〕の中にあることを信じて、苦難や逆境にも忍耐して生きていけるように祈り求める。

話し合ってみよう!

つらい体験やいやな出来事があるとき、どうしたらよいか、話し合う。

展開例

兄弟の反感を買うヨセフの態度にも問題があった。人間の争いや闘いをも用いて、神の計画が実現されていく、物語の素晴らしさを味わいたい。

祈り

どんなつらい時にも、神の見守りと導きがあることを信じさせてください。

○暗唱聖句○

コリントー 10:13b

○祈りの課題○

聖書日課

日 創世記 37章 1～11節
月 創世記 37章 12～36節
火 ローマ 8章 1～11節
水 ローマ 8章 12～17節
木 ローマ 8章 18～25節
金 ローマ 8章 26～30節
土 ローマ 8章 31～39節

☆三日記☆

テキスト 創世記 39章～41章

ヨセフは、エジプトに住むファラオの侍従長ポティファルに売られた(39:1)。そこで、ヨセフは才能を発揮し、着実に成功する。聖書は、それを「主が共におられたので」と、主なる神の臨在に根拠を置く。これがヨセフ物語の基調音である。

しかも、臨在の主と共に生きる者の周辺にも、主の祝福が及んで行く(5節)。神への信仰は、信仰者のみに祝福をもたらすのではなく、遣わされた場所にも祝福を及ぼす。キリスト者が自分の祝福に真剣になるのは、隣人をも神の救いの御業に招き入れるためである。隣人のためにも、我々は祝福を受けているし、より受けるべきである。

しかし、ここで事件が起こる。主人の妻から性的な誘惑を受けるのである。祝福されたヨセフであるが、神の祝福とは、試練、苦しみから避けられることを意味していない。彼は、誘惑を拒絶したことによって、監獄に入れられる。

性的誘惑は、どれだけ厳しい戦いを強いることか、とりわけ年若い者にとっては深刻である。誘惑に対して、時間をかけて悩み考えていてはならない。すぐ拒絶する以外に道はない。彼は、即座に誘惑を斥けた。その理由は、「神に罪を犯すことができない」からと彼女に告げる。ダビデの悔い改めの詩編第51編6節にも、「あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し 御目に悪事と見られることをしました。」とあることを思い起こさせられる。神の臨在を意識することに常に心を用いるヨセフだからこそ、誘惑を拒否することができたのである。

ここには、信仰の修練、靈性の涵養の重要性、

必要性を覚えずにおれない。詩編第119編9節を思い起こさせられる。「どのようにして、若者は 歩むべき道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおりに道を保つことです。」御言葉を心に保つこと、御言葉への信頼による。それは、主イエス・キリストとの交わりの現実感を深く受け止める道であるからである。

「コーラム・デオ」(神の御顔の前で生きる)と言う信仰の姿勢、常に祈りの心で生きることへのたゆみない求めなしに、誘惑に打ち勝つことはできない。

ただし、教師にも子らにも、誘惑への敗北、失敗の経験がある(場合がある)。ヨセフにない者はこの物語を読み、教える資格がないのだろうか。もちろん、そうではない。主イエス・キリストによる罪の赦しにあずかり、生かされている。決して、英雄談ではなく、我々への警告、悔い改めへの招き、励ましとして語るべきである。

40章～41章は、監獄におけるファラオの夢の解き明かしによって、いわばエジプトの総理大臣にまで一気に抜擢される物語である。説教者がここを取り上げて語るなら、夢の解き明かしという不思議な能力に視点をおくのではなく、神の言葉を語る預言者としてのヨセフ像を際立たせるべきである。神がファラオに見せられた夢とは、本来、ヨセフが見るべきものであったのではないか。神は、ヨセフとイスラエルとを祝福するために、このような形で預言の言葉を与えられたのであろう。ここに神の計り知れない哀れみの御計画を見ることができる。

テキスト 創世記 39章～41章

〔単元のねらい〕

ヨセフがエジプトに連れて行かれたのは、「命を救うため、神がわたしをあなたがたより先にお遣わしになった」(45章5節)のであり、ヨセフによって「大いなる救いに至らせるため」(同7節)でした。しかしそのためには、ヨセフが訓練されて、神の役に立つ人物として造り変えられる必要がありました。ヨセフがたどった試練は、ヨセフを造り変えるための神の訓練でしたが、その渦中にずっと神は、ヨセフと共にいて、彼を守っていかれたのでした。

「ヨセフを訓練して役に立つ人にする神」

お父さんの家では、長袖のきれいな服を着せてもらい、何不自由なくすごしていたヨセフでしたが、エジプトに奴隷として売られてしまいます。ヨセフはどんなに悲しかったことでしょうか。またお父さんやみんなに、どんなに会いたかったことでしょうか。しかし今は、言葉も通じない異国の地で、しかられたりしながら、したくもないきびしい仕事を、朝から晩まで休みなくし続けなければなりません。しかしヨセフがこのようにエジプトに連れて行かれたのは、ヨセフによって「大いなる救いに至らせる」(45章7節)という、神さまの特別な計画があったからでした。エジプト人をはじめ世界中の人々の「命の恩人」(47章25節)となるために、神さまはヨセフをエジプトへと遣わされたのでした。ヨセフによって、世界中の人々の「命を救うため」に、神がヨセフを先にお遣わしになったのです(45章5節)。しかしそのためには、ヨセフが訓練されて、神の役に立つ人物として造り変えられる必要がありました。ヨセフがたどった苦しみは、ヨセフを造り変えていくために、神がヨセフに与えられた訓練でしたが、その渦中にずっと神は、ヨセフと共にいて、彼を守っていかれたのでした。

ヨセフはいつまでも悲しがったり、淋しがったりしてはいられません。奴隷として、たくさん仕事をしなければならなかったからです。奴隷の仕事はとでもきつく、つらいものでしたが、それによってヨセフはたくましい若者になっていきました。家にいた時には仕事もしないで遊んでばかりいたヨセフでしたから、ひ弱で何の仕事をする力もありませんでした。けれども奴隷の仕事は、ヨセフをどんなつらいことにも乗り越えていく力を与えるようになります。体の力だけではなく、くじけないで生きる心の力です。そうして忠実に仕事をするうちに、ヨセフは家での色々な仕事をこなせるようになっていきます。そしてヨセフがすると、何でも成功したため、ご主人はついにヨセフに「家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せ」るようになります(39章4節)。そして「主人が家の管理やすべての財産をヨセフに任せてから、主はヨセフのゆえにそのエジプト人の家を祝福され」るようになり、その「主の祝福は、家の中にも農地にも、すべての財産に及んだ」のでした(同5節)。「家の管理」とは、ご主人様や奥様の身の回りのお世話から、食事、お仕

事の手伝いといったことだけではなく、ご主人が持っている農地を耕し、そこからの収穫物を管理し、売買し、必要なものを揃え、全財産を運用して商売をし、損をしないで儲かるようにするといったことの全てを含んでいました。これまで何でも使用人に自分の世話も家の管理もしてもらっていたヨセフでしたが、こうして家を管理するという大切な仕事をするようになり、その仕事をきちんと果たす知恵と力を身につけていくようになります。そして、ここでの経験が、農作物を管理し、やがてエジプトという大きな家を経営していくための準備となっていくのです。

しかしヨセフにもっと大切なことは、どんな苦しみと問題の中でも、神さまを畏れて、神さまを信頼し、神さまに従っていくということでした。若くて、しかも美しく、たくましくなったヨセフは、ご主人の奥様の目にとまり、来る日も来る日も、声をかけられて、誘惑されるようになりますが、神さまを畏れるヨセフはそれをこばみません。そのために、奥様に乱暴を働いたという濡れ衣を着せられて、ヨセフは牢に入れられてしまいます。奴隷にはなつたけれども、せつかくここまで出世し、ご主人の信頼を得て活躍するようになった矢先に、ヨセフは牢に入れられてしまったのです。何もかもだめです。もう二度と牢から出られないかもしれません。ところがヨセフは、そこで絶望に駆られたり、捨て鉢になつたりはしませんでした。そして「主

がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった」(39章21、22節)ののです。こうして「主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計ら」ってくださるのでした。このようなつらい経験を通してヨセフは、どんな時でも神さまを信頼し、神さまにゆだねていくことを、教えられていくようになります。

やがてエジプトの大臣となり、自分を殺そうとした兄たちを再会したヨセフは、これまでのつらい経験を通して、神さまが自分に何をなさろうとしておられるか、そして自分は何をしなければならぬかを深く理解し、それに従うようになっていきます。お兄さんたちに向かってヨセフは、ヨセフがエジプトに連れて行かれたのは、「命を救うため、神がわたしをあなたがたより先にお遣わしになった」(45章5節)のであり、ヨセフによって「大いなる救いに至らせるため」(同7節)だったと語ることができるようになりました。しかしそのためにヨセフは、つらいところを通されていきましたが、それによって訓練されて、神の役に立つ人物として造り変えられていったのです。ヨセフがたどった試練は、ヨセフを造り変えるための神の訓練でしたが、その渦中にずっと神は、ヨセフと共にいて、彼を守っていかれたのです。

【今日の暗唱聖句】 創世記 39章 2節

主がヨセフと共におられたので、彼はうまく
ことを運んだ。彼はエジプト人の主人の家にいた。

〈ねらい〉

どんな時でも、神さまが共にいてくださることを喜び感謝します。

〈お話〉

ヨセフさんは、どんなつらい目にあってもお守りくださる神さまを信じて、何でもいっしょうけんめいしました。そんなヨセフさんをエジプトの王さまは、エジプトの大臣にしました。そして、王さまの指輪と金の首飾りをヨセフに贈りました。

大臣になったヨセフさんは、神さまがいつも共にいてくださって導いてくださったこと

を感謝しました。

〈暗唱聖句〉

「主がヨセフと共におられた・・・。」

創世記 39:2

〈賛美〉

「主イエスとともに」

『ふくいん子どもさんびか』90番

(いのちのことば社)

〈こどもカテキズム〉

問 13 を参照

〈分級の流れ〉

①「聖書物語」などの絵本で、ヨセフの物語の絵を見せた後、上記のお話をします。

②暗唱聖句を覚えます。

③工作 「大臣の指輪と首飾り」

材料・・・画用紙、色紙（色画用紙）、セロテープ、のり、はさみ

・指輪・・・画用紙を、6cm×1cmの幅に

切り、マジックペンで模様を描いて、

セロテープで補強して、輪にする。

・首飾り・・・色紙（金色や、黄色など）

を幅2cmくらいの短冊に切り、輪を

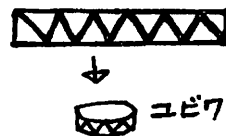
作って、鎖のように首飾りを作る。

④指輪と首飾りをつけて、足踏みをしながら

賛美（#90）をささげます。

⑤まるくなってお祈りをささげ、来週に期待

を持たせてわかれませう。



〈展開例〉

前の主の日のお話しは、ヨセフが、エジプトに連れていかれ、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルの奴隷になったというところで終わりましたね。

ヨセフは、一所懸命に働きました。神様は、ヨセフを助けられました。それで、ポティファルの財産を管理するという、奴隷としては考えられないような地位を与えられました。

しかし、そのヨセフに、またまた、困ったことが襲ってきました。ポティファルの奥さんが、ヨセフを誘惑したのです。ヨセフは、ポティファルの奥さんから逃げました。しかし、ポティファルの奥さんは自分が悪いことをしておいて、その罪をヨセフにかぶせてしまいました。そのため、ヨセフは、牢獄に入れられることになりました。それでも、神様は、いつもヨセフを助けられました。牢獄の中で、他の囚人たちの世話をする係りになりました。

そうこうしている時、エジプトの王（ファラオ）の給仕役の長と料理役の長がファラオの怒りにふれて、ヨセフのいる牢獄に入れられることになりました。ある夜、給仕役の長と料理役の長の二人は夢を見ました。その夢について、二人はヨセフに相談しました。ヨセフは、給仕役の長の夢は再びファラオに仕えるという夢だと話します。でも料理役の長の夢は、木にかけられ死刑になる夢だと話します。その夢は、実際に、ヨセフが話したとおりになりました。

みんなも、夢を見ることはありますね。でも、給仕役の長と料理役の長に見せられた夢は、神様が見せられた特別な夢なんだよ。そして、神様は、ヨセフに、夢の意味を教えておられたから、ヨセフも夢の意味をお話してきたのだよ。

給仕役の長の夢は再びファラオに仕えるという夢だったから、再び、給仕役の長は、ファラオに仕えました。でも、もうすっかりヨセフの事は忘れてしまっていました。

でも、神様は、ヨセフを守られます。今度はファラオが夢を見ます。あまり奇妙な夢なので、エジプト中の魔術師と賢者をすべて呼び集めて、問いただします。しかし、だれもわかりませんでした。そんな時、ヨセフから夢の意味を教えられた給仕役の長が、ヨセフのことを思い出したんだね。これも神様の導きです。

ヨセフは、みごとにファラオの夢の意味を話します。ファラオの夢の意味は、7年の大豊作の後に、7年の大飢饉が来るというものでした。感心したファラオは、王に次ぐ、王国第二の地位を与えました。このようにして、ヨセフは、神様に導かれて、エジプトで、王に次ぐ、王国第二の地位を受ける者になりました。

でも、お話しは、ここで終わりません。神様は、もっともつとすばらしいものをヨセフに準備しておられたのです。そのお話しは、来週いたしましょう。

〈ねらい〉

神様はヨセフに夢を解く力を与えられ、王の夢とおして飢饉の備えをさせられた。それにより、エジプトおよび周囲の人々を飢饉から救い、イスラエルの人々をエジプトへ導かれた。そこに、ヨセフに慈しみを与えられるとともに、ご自分の民と世界の人々を憐れみ、その歴史を導かれる神様のお働きを見ることが出来る。

〈展開例〉

1. ヨセフの働きによって、彼を買い取ったポティファルも、またエジプトの国も繁栄を得た。そのことから、私たちと、まわりにいる人たちとの関係のことを想像してみよう。

→神様の恵みは私たちが独占するためにあるのではない。恵みは広げられるもの。神様は私たちを通して恵みが広げられることを望んでおられる。地上的な恵みも、救いにかかわる恵みも。私たちにできる具体的な働きについて話し合ってみよう。

2. ヨセフは豊作のときに飢饉に備えて食糧を蓄える政策をとった。イエス様のたとえ話に少し似た話があるけれど(ルカ 12:16)、そこでは財産や穀物を蓄えた金持ちは愚かな金持ちと呼ばれている。ヨセフはこの愚かな金持ちとどう違うのだろうか。

→知恵を用いて神様から与えられたものをよく管理することは大切。重要なことは、それを何のために用いるかということ。愚かな金持ちは自分のために蓄えた。私たちが自分たちに与えられた財産(お金も知恵も)をどう使うかということも大切。

3. ヨセフはエジプトの総理大臣としての大切な務めも立派に行うことができた。どうしてそんな働きができたのだろうか。また、必要な訓練や教育をどうやって受けたのだろうか。

→神様がその能力を与えられるとともに、それまでの困難な人生を通して、その働きができるように彼を成長させられたのだろう。私たちの人生で、辛い、苦しいと思うことがあるかもしれないが、神様が私たちを成長させようとしているのではないだろうか。

ねらい

神は人間を訓練し成長させてくださることを学ぶ。

間へと成長させた。

神が共におられる人生は祝福された人生を送れることを学ぶことができる。

話し合ってみよう!

ドラマのような人生を私たちも送る可能性があることを話し合おう。

展開例

ヨセフは父ヤコブの愛を一身に受けて高慢な態度を他の兄弟に対して示すようになった。そこから不幸な事件が起こり、つらい悲しい体験を経験したヨセフであった。

しかし、神はヨセフと共におられて、ヨセフを訓練し、神の計画を実現させる有能な人

祈り

神よ、私を訓練し、成長させてください。

○暗唱聖句○

創世記 39:2

聖書日課

- 日 創世記 39章
- 月 創世記 40章
- 火 創世記 41章 1 ~ 36節
- 水 創世記 41章 37 ~ 57節
- 木 創世記 42章
- 金 創世記 43章
- 土 創世記 44章

○祈りの課題○

☆三二日記☆

テキスト 創世記 45 章、50 章

〈エジプトの飢饉とヨセフの兄たち〉

ヨセフが解き明かしたように、エジプトの全地に飢饉が起りました。食糧を蓄えていたエジプトは、食糧に困りません。しかし、飢饉は激しさを増し、周囲の国々の人々がエジプトに食糧を求めてやって来るようになります。カナンに住んでいたヤコブも、エジプトに食糧があると知って、息子たち（ヨセフの兄たち）を買い出しに遣わします。

42章から44章まで、ヨセフの兄たちのエジプト下りの物語が書き留められています。ヨセフは、すぐに兄たちに気づきましたが、黙って兄たちを試みます。試みを通して、兄たちの悔い改めが明らかになります。ヨセフをエジプトに売り渡したことを悔いているのです。自分たちが困難に出会うのは、かつてヨセフに対して行った罪の罰を受けているのだと受け止めました(42:21)。また、銀の杯の事件により、ベニヤミンがヨセフの弟として愛され、大切にされていることも示されます(44:33)。たいへん興味深く感動的です。

〈ヨセフが自分の身を明かす〉

ヨセフは、兄たちの心からの悔い改めを知りました。ヨセフは黙っていることができなくなり、自分の身を明かします。

45章4節から8節に書き記されているヨセフの言葉は、ヨセフ物語の頂点と言うべきでしょう。第一に、「悔やんだり、責め合ったりする必要はありません」と言って兄弟たちを慰めます。第二に、神が自分をエジプトに遣わされたのだと語ります。ヨセフは兄たちによって売られたのですが、神の御手の働き、神の摂理なのです。第三に、神がヨセフをエジプトに遣わしたその意味は、まずヨセ

フが遣わされて、続いてヤコブの家族がエジプトに来て生活するため、ヤコブの家族がこのエジプトで救いを得るためなのです。

ヨセフは、波乱にあふれた歩みと今の栄光ある地位について、それを自分のものとすることなく、兄たちに責任を帰すのでもありませんでした。神の摂理を信じて、神に栄光を帰したのです。ヨセフは、神を仰ぐことを通して苦しみを乗り越え、兄たちに対する復讐心を克服しました。また兄たちも、神を仰ぐことを通して、深い罪意識、罪責が取り除かれ、慰められます。父ヤコブの陰府にくるほどの悲しみ(42:38)もいやされます。

ヨセフは、ベニヤミンをはじめ兄弟たちと抱き合って泣きました。この涙は、主にあって赦しと慰めを得た感謝と喜びの涙です。

ヨセフは父ヤコブをエジプトに招きます。やがてヤコブの家族は、エジプトに土地を得て、新しい生活を始めました(47:11)。

〈罪の赦しの再確認〉

ヤコブは祝福の中で生涯を閉じます。ヤコブはカナンの地に葬られました(50:13)。

その葬りののち、兄たちがヨセフのもとに来て、あらためて赦しを求めました。これほどまでに兄たちの罪意識は深く、いやしがたいものでありました。ヨセフは語ります。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れなでください」。主なる神は人の罪を超えて、罪をも用いて働かれます。私たちは、大きな摂理の神を仰ぐのです。私たちは、神の大きな御計画と素晴らしいみわざの中に置かれています。

6月29日 「悪を善に造りかえた神」 説教展開例

テキスト 創世記 45章、50章

〔単元のねらい〕

万事を益として下さる神の摂理のくすしさを覚え、神への信頼を深くしたい。「ヨセフ物語」を主イエスの十字架の先取りとして読むこともできるはずである。

「悪を善に造りかえた神」

ヨセフさんは、お父さんのヤコブさんがヨセフさんばかりをかわいがるのを見てヨセフさんをねたみ、またヨセフさんが、お兄さんたちがみなヨセフさんの前にひれ伏す夢を見たことで腹をたてて、ヨセフさんを奴隷としてエジプトの国に売り飛ばしてしまったのです。そして、お父さんのヤコブさんには、ヨセフさんは野原でけものに食い殺されて閉まったと伝えたのでしたね。

けれども、エジプトで奴隷の苦しみの中にあつたヨセフさんと、神さまはいつもともにいてくださって、いちばんよいはからいをしてくださいました。ヨセフさんはエジプトの王さまが見た夢の意味をときあかして、エジプトの国を飢饉から救いました。それで、奴隷としてエジプトに売られてきたヨセフさんは、エジプトの総理大臣にまでなつたのです。

やがてヨセフさんが言ったとおりに、飢饉が来ました。けれども、あらかじめそのことがわかっていて、食べ物をちゃんとたくわえていたエジプトは、だいじょうぶでした。

そして、飢饉に苦しんでいた世界中の国の人々が、食べ物を分けてもらおうとしてエジプトにやってきました。ヨセフさんのふるさともひどい飢饉におそわれて、ヤコブさんもお兄さんたちも、弟のベニヤミンも飢え死に

しそうなほど苦しみました。

そこで、お兄さんたちはエジプトの総理大臣であつたヨセフさんをたずねてきて、ひれ伏して食べ物に分けてくださいとお願ひしたのです。昔ヨセフさんが見た夢のとおりになつたのですね。

さて、このとき、ヨセフさんにはこの人たちがなつかしいお兄さんたちであつたことがすぐにわかりました。でも、お兄さんたちは、目の前にいるエジプトの総理大臣が、かつて自分たちが奴隷としてエジプトに売り飛ばした弟のヨセフさんであるなどということに、気づくはずありません。

ヨセフさんのほうも、自分が弟のヨセフであることをしばらく隠していました。そして、心を鬼にして、お兄さんたちにつらくあたります。

けれども、お兄さんたちが、ああわたしたちがこのようなつらい仕打ちにあうのは、弟ヨセフのことで神さまの罰を受けているのだ、弟が苦しんでいたのに助けもせず、奴隷として売り飛ばした罪の報いを受けているのだと語りあうのを聞き、その罪を心から悔いているのを知ると、ヨセフさんは自分の身分を明かすのです。わたしは、あなたたちがエジプトへ売つたヨセフです、と明かすのです。

これを聞いてお兄さんたちは、驚きのあまり声も出なかったことでしょう。

こうしてヨセフさんとお兄さんたちは、涙を流して再会を喜びあいました。何よりもヨセフさんにとってうれしかったことは、もう年老いてしまった愛するお父さんのヤコブさんが、まだふるさとで元気に暮らしていると聞いたことでした。

ヨセフさんたちはお兄さんたちに言います。これは神さまの、はかり知れないご計画によることです。神さまは、わたしたち家族の命を飢饉から救い出すために、このようにしてわたしをあなたがたよりも先にエジプトにつかわされたのです。さあ、あなたたちもエジプトに来てください。お父さんもエジプトに連れてきてください。これからは豊かなこのエジプトの国で、幸せに暮らしましょう。

お兄さんたちはお父さんのヤコブさんをエジプトに連れて来るために、一度ふるさとに戻ります。そしてヤコブさんに、ヨセフは生きています、それも、エジプトの総理大臣になっていますと知らせます。もうどうの昔に死んでしまったと思っていた愛するヨセフさんが生きてると聞いて、ヤコブさんは気が遠くなるほど驚き、そして喜びました。こうしてヨセフさんの一家はエジプトの国で、神さまの祝福と守りの中で、幸せに過ごしたのです。

さて、ヤコブさんがこの世を去って、神さ

まのもとに召される日が来ました。ヨセフさんは悲しみの中にも、心をこめてヤコブさんのなきがらを葬りました。

そのときお兄さんたちはヨセフさんのところに来て、ヨセフさんにひれ伏して、どうかあなたを奴隷としてエジプトに売ったわたしたちの罪をゆるしてくださいと、あらためて願いました。お兄さんたちは、まだヨセフさんが自分たちをうらんでいて、お父さんのヤコブさんがいなくなったことをきっかけに、ここぞとばかりに昔の仕返しをするかも知れないと恐れたのでしょうか。

でもヨセフさんは言いました。恐れることはありません。たしかにあなたがたは、昔わたしに悪いことをたくらみました。でも、神さまは悪いことをも、人の罪さえもよいことにかえてくださるお方です。あなたがたがわたしをエジプトに売ったおかげで、わたしたちも、ほかの多くの人々も、命を救われたではありませんか。

神さまは人間のはかる悪いことをも、よいことにかえて下さるお方です。イエスさまのことを考えましょう。罪のない正しいお方であるイエスさまを十字架につけて殺してしまったのは、人の罪です。けれども、イエスさまが十字架に死んでくださったことによって、わたしたちは罪あがなわれ、ゆるされて永遠の命に入れられたのです。神さまのご計画のすばらしさを覚えましょう。

〔今日の暗唱聖句〕 創世記 50 章 20 節

あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。

〈ねらい〉

どんな時でも、神さまが共にいてくださることを喜び感謝します。

〈お話〉

何日も雨が降らないので、畑の麦も、野菜もみんな枯れていきます。とうとう食べ物が無くなってしまいました。

しかし、大臣ヨセフのいるエジプトの倉庫には、食べきれないほどの、麦やお羊がどっさりしまっていました。國中の人々が、大臣ヨセフのところへ、食べ物を買いにやってきました。

何も知らずに、ヨセフのお兄さんたちもエジプトに食べ物を買いにやってきました。ヨセフは、ひどいことをしたお兄さんたちをゆるして、食べ物やお金をたくさんあげました。

「食べ物が無くなって困っているお兄さんたちを助けるために、神さまが私を先にエジプトに來させてくださったのです」と言いました。ヨセフさんは、いつも、どんな時でも神さまに感謝したのです。

〈暗唱聖句〉

「主がヨセフと共におられた・・・。」

創世記 39:2

〈賛美〉

「主イエスとともに」

『ふくいん子どもさんびか』90番
(いのちのこば社)

〈こどもカテキズム〉

問 13 を参照

〈分級の流れ〉

①「聖書物語」などの絵本で、ヨセフの物語の絵を見せた後、上記のお話をします。

②暗唱聖句を覚えます。

③ゲーム 「ヤコブとヨセフ」

準備・・・3×3の碁盤、白丸×3、黒丸×3

・白丸に(ヨ・セ・フ)

・黒丸に(ヤ・コ・ブ)

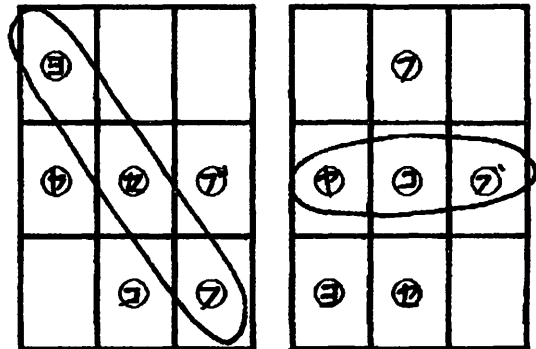
と書いておく

・二人で対戦します。

・交替で、自分の●(○)を、名前がつながるように並べていきます。

・タテ、ヨコ、ななめのいずれでもよいが、名前がつながらなくてはけません。

・何度も置きなおして、先にならんだほうが勝ち!!



④賛美 (#90) をささげ、お祈りをしてわかります。

6月29日 「悪を善に造りかえた神」 小学科下級

〈展開例〉

前回は、ヨセフは、神様に導かれて、エジプトで、王に次ぐ、王国第二の地位を受ける者になったというところで終わっていたね。

ファラオの夢は、7年の大豊作の後に、7年の大飢饉が来るということの意味している。ヨセフは言いました。その通りのことが起こりました。これも神様の導きですね。王国第二の地位になったヨセフは、全国に倉を建てさせ、穀物を倉に入れました。7年の大豊作が終わると、大飢饉がやって来ました。

大飢饉は、エジプトだけではなくありませんでした。お父さんのヤコブのいる所も大飢饉でした。そのために、食べるものがなくなってしまいました。ヤコブは、エジプトにはまだ食糧があることを聞いて、子どもたちに食糧を買わせるためにエジプトに送ります。

ヨセフは、エジプトに食糧を買いに来たお兄さんたちのことは、一目ですぐにわかりました。でも、お兄さんたちは、立派になったヨセフを見ても、ヨセフであることは、わかりませんでした。それは、エジプトでは、ヨセフは、ツアフエナト・パネアという名前に変えていたことにもよります。でも、ヨセフは、お兄さんたちに、自分のことは話しませんでした。それは、お父さんのヤコブや末っ子のベニアミンを食糧の十分にあるエジプトに連れて来たかったからです。

ヨセフはお父さんが一番可愛がっている末っ子のベニアミンさえ、エジプトに来れば、お父さんのヤコブもエジプトに来てくれるに

違いないと考えていました。そこで、ヨセフは、末っ子のベニアミンを連れて来るまでは、お兄さんたちの一人シメオンを人質にし、9人のお兄さんたちに食糧を持たせて帰らせませす。

ヤコブの所に食糧がなくなった頃、9人のお兄さんたちは、末っ子のベニアミンを連れて、再びエジプトに行きました。ヨセフは、みんなを大歓迎します。ごちそうの並ぶ中で、ヨセフは、実は自分は、お兄さんたちが奴隷に売ったヨセフだと名乗ります。それだけではなく、お父さんのヤコブをも呼んでくるように言います。

それを知った、お父さんヤコブは総数七十名の家族を連れて、ヨセフの所に行きました。そうして、飢饉の中でも、なお、豊かなゴシェンという地方に住み、お父さんのヤコブは147才で天に召されました。その時、お兄さんたちは、ヨセフに赦しを求めました。

その時のヨセフの言葉が、聖書には、こう書いてあります。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」。ヨセフは、確かにお兄さんたちが自分を殺そうとしたり、奴隷に売ったことは悪いことに違いない。でも、神様は、お父さんのヤコブや兄弟たちをエジプトに呼ぶために、自分を先に遣わされたのだ。こう言って、ヨセフは、お兄さんたちを赦しました。そして、ヨセフも家族と共に住み、110才で天に召されました。

6月29日 「悪を善に造りかえた神」 小学科上級

〈ねらい〉

聖書は、感動の対面の場面までに、兄たちとヨセフの間の長いやり取りを記す。その中で、兄たちの悔い改めの思いが明らかにされる。ヤコブ一族のエジプトへの移住は、出エジプトへとつながる。罪を悔いることの大切さ、また、神様のご計画のすばらしさを学ぶ。

〈展開例〉

1. なぜ、ヨセフは兄たちに、すぐに自分が弟であることを明かさなかったのだろう。
→いろいろ想像していいだろう。ただ、その中で、兄たちが自分たちの罪を思い、ヨセフが兄たちの悔い改めの姿を確認したことに注目したい。罪を悔いることの大切さ、また、罪を赦された者として互いに赦しあう関係を持つことの大切さを思うべきだろう。

2. ヨセフは罪を悔いる兄さんたちに「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え・・・」(50:20)と答えた。神様が人の罪をも用いて働いてくださるのであれば、私たちが罪を犯すことは悪いことではない、ということにはならないか。

→神様は人の罪をもお用いになって、ご計画を実行し、摂理のみ業をなしてくださる。その代表例は、イエス様の十字架における、ユダ、ピラト、大祭司などの罪だろう。しかし、それだからといって、罪を犯しているわけではない(参考=ローマ 6:1 ~)。

3. ユダがベニヤミンの身代わりになると申し出た気持ち(44:33)を想像してみよう。
→かつて、ヨセフを殺そうとした自分の罪を悔いていることの表れだろう。ユダの自ら進んで犠牲になろうとするへりくだりの姿勢は美しい。愛から発する最も完全な犠牲の姿は、イエス様の十字架にある。

4. イスラエルの十二部族の祖といわれるヤコブの息子たちの名前(35:23-26)と、出エジプト後、カナンに定着した十二部族の名前(聖書地図を参照)の関係を比べてみよう。違いがあるのはなぜだろう。

→ヨセフの子どもたち(エフライムとマナセ)に対する祝福(48:5)。ヨセフ物語の主要人物であるヨセフとユダがイスラエル全体の中心になっていく。レビは祭司の一族へ。

5. エジプトは神様が与えてくださる約束の地ではない。それなのになぜ、ヤコブとその一族はエジプトに行ったのか(なぜ、その地に神様は導かれたのか)。

→人の思いを超えた神様のご計画と言うべきだろう。神様は、エジプトの地でヤコブの一族を増やされた。そのことによってヨセフとともにおられた神様が、その後もイスラエルの人々とともにおられたことを示している(詩 105:24)。それとともに、出エジプトという旧約聖書最大の出来事の準備となっている。

ねらい

人間の悪事をも用いて神の救いの計画を実現させる、神の不思議な働きについて考える。

話し合ってみよう!

ヨセフの生涯と主イエスの生涯を比較して話し合ってみよう。

展開例

「神を愛する者たち、つまりご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」(ローマ 8:28)。このパウロの言葉をヨセフの生涯にあてはめて、一緒に考えてみよう。

祈り

神が共にいてくださる生涯を送らせてください。

○暗唱聖句○

創世記 50:20

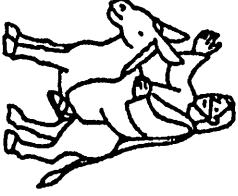

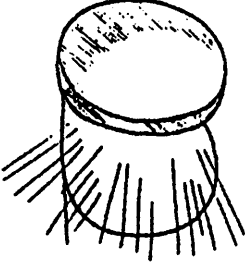

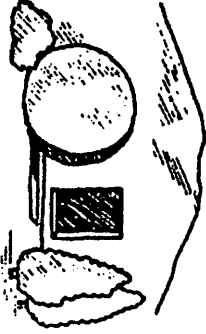
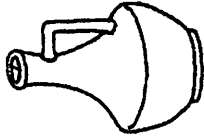
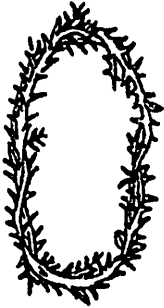
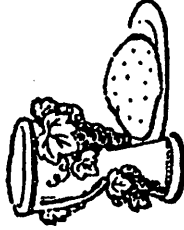
○祈りの課題○

聖書日課

日 創世記 45 章
月 創世記 46 章
火 創世記 47 章
水 創世記 48 章
木 創世記 49 章
金 創世記 50 章 1 ~ 14 節
土 創世記 50 章 15 ~ 26 節

☆≡二日記☆

《4月13日分 小学科下級教材》

<p>「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。」 ()</p>  <p><エルサレムへ旅へ行く> マルコ11:11-11</p> <p>日</p>	<p>「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」 ()</p>  <p><宮きよめ> マルコ11:15-19</p> <p>月</p>
<p>「あなた方は復活なされて、ここにはおられない。」 ()</p>  <p><よみがえり> マルコ16:1-8</p> <p>日</p>	<p>「天地はほろびるが、わたしの言葉は決してほろびない。」 ()</p>  <p><いちじくの木のおしえ> マルコ13:28-31</p> <p>火</p>
<p>婦人たちは、安息日にはおきてにしたがって休んだ。(ルカ23:56)</p>  <p><墓の中></p> <p>土</p>	<p>「この人はできるかぎりのことをした。」 ()</p>  <p><香油をそぐ> マルコ14:3-9</p> <p>水</p>
<p>「父よ、彼らをおゆるしくたさい。自分が何をしているのかわからないのです。」 ()</p>  <p><十字架> ルカ23:26-56</p> <p>金</p>	<p>「取りなさい。これはわたしの体である。」 ()</p>  <p><最後のばんさん> マルコ14:22-26</p> <p>木</p>

<p>スタート</p>		<p>あのつくことば は、なに？</p>	<p>4ほんあしの どうぶつは？</p>	
<p>3もじ のことば は？</p>	<p>うえからよんでも したからよんでも おなじことばは？</p>		<p>むしのなまえを いってください</p>	<p>いっかい やすみ！</p>
<p>いっかい やすみ！</p>	<p>カナンのくに</p>			
	<p>くだものの、 なまえをいっ てください。</p>		<p>たまごをうむ どうぶつは、 なに？</p>	<p>2つ もどる</p>

日曜学校 2003年度カリキュラム (2003年7～9月分)

－救済史に基づく一年間のカリキュラム－

月日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
7月6日	神の人モーセ	出エジ 2:1-10,3:1-10	
	契約に真実な神を仰ぎ、教会共同体のために神に応答するよう励ます		
7月13日	主の過ぎ越し	出エジプト 12:21-27	
	贖いのみわざによって罪赦され、神の民とされる恵みに招く		
7月20日	出エジプト	出エジプト 14章	
	神の救いの確かさ、その力の偉大さを讃美しよう		
7月27日	契約のしるし	出エジプト 24章	
	契約の恵みに応答することへと招く		
8月3日	約束の地	ヨシュア 3章	
	信仰による確かな歩みへと招く		
8月10日	ダビデとゴリアト	サムエル上 17:41-54	
	神の勝利を確信して、神のための戦いを戦おう		
8月17日	ダビデ契約	サムエル下 7:1-17	
	主イエスを証しする預言の確かさ、神の約束の真実さを覚えよう		
8月24日	ソロモン王	列王上 3章	
	神の祝福を神と人とのために用いる祝福へと招く		
8月31日	ユダの滅亡	エレミヤ 18:1-17	
	神の見えない御手の創造と滅ぼすみわざを覚えよう		
9月7日	回復の預言	エゼキエル 34:11-31	
	真の牧者なる神の羊の群れとされている幸いを感謝しよう		
9月14日	捕囚からの解放	イザヤ 45:1-13	
(15敬老の日)	異邦の王キュロスさえ用いて救う神の力と恵みを讃美しよう		
9月21日	礼拝の再建	ネヘミヤ 8:1-12	
	礼拝がどれほど大きな恵みであり務めであるかを覚えよう		
9月28日	新しい契約	エレミヤ 31:31-34	
	キリストにおける契約の成就を指し示し、旧約を福音として受け止めよう		

あ と が き

中部中会教育委員会日曜学校教案誌編集部

主の御名をほめたたえます。

ここに、『日曜学校教案誌』第9号を皆様のお手元にお届けすることができますことを心から嬉しく思い、主なる神様を心から讃美し、ご支援くださっております諸教会の皆様に感謝を申し上げます。

第57回定期大会(2002年)ののち、教案誌の発行を継続する道を探って参りました。執筆者と資金的な問題から、第8号までと同じかたちで継続することは早々に断念せざるを得ませんでした。一時期は、一冊の冊子として発行することも難しいかと考えておりました。しかし、新しい執筆者も加えられ、皆様の激励によって、このように『教案誌』を発行することが許されました。ゆだねられている責任をひとまず果たすことができたと、感謝しています。

この4月からの一年間は、教済史に基づいてカリキュラム編成をしています。このカリキュラムの作成に際しては、大会教育委員会が今までに発行しておられたいくつかの教案誌を参考にさせていただきました。大会教育委員会のお働きにも心からお礼申し上げます。

いくつかお詫びしなければなりません。分級展開例の小学科中級をお休みさせていただいております。まことに勝手ながら、小学科下級および上級を参考にして、それぞれの教会で工夫していただければと願っております。過去に掲載した記事に手を加えて用いたものもあります。準備が不十分で、このようなかたちになりましたことを、心からお詫び申し上げます。また、経費削減の関係から、有志の方々の手によって印刷・製本が行われました。製本には慎重を期しましたが、落丁・乱丁があるかもしれません。その際には、ご遠慮なく編集部までお申し出ください。交換させていただきますので、よろしく願いいたします。

皆様の教会の日曜学校の働きが祝福され、多くの子どもたちに福音の喜びが宣べ伝えられますように。この教案誌がそのために豊かに用いられ、日曜学校の教師がたの助けとなることを心から祈り願っております。また、ぜひ今後の教案誌の発行を支えてくださり、編集部のためにもお祈りくださいますよう、心からお願い申し上げます。

Soli Deo Gloria!

執筆者一覧		編集部
聖書研究	幼稚科	相馬伸郎(長)
木下裕也、相馬伸郎、春 名義行、村手淳、望月信	名古屋岩の上传道所	木下裕也
説教展開例	小学科下級	村手淳
三川栄二、相馬伸郎、木 下裕也	加藤親平、漆崎春美、名 古屋岩の上传道所	春名義行
表紙デザイン・・・弓矢容子	小学科上級・・・神港教会 中学科・・・吉岡良昌	望月信

日本キリスト改革派教会 中部中会 『日曜学校教案誌』

2003年4・5・6月号(季刊)

第9号

2003年3月16日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
頒布取り次ぎ 津島伝道所 宣教教師 春名義行
〒496-0038 愛知県津島市橘町2-30
Tel/Fax. 0567-26-4221
頒価 700円(本体価格)
